ダフネの願い

小室　仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダフネの願い

【Ｎコード】
Ｎ９２９５Ｖ

【作者名】
小室　仁

【あらすじ】
大きな港町に住み、
孤児院に勤める庶民の娘、
２２歳のダフネ。
勉学優秀な双子の兄が、やっと受けられた国の高官試験の最終日前日、
事故にあって足を骨折してしまう。
兄の試験合格は、家族の今後の生活を支えるものだった。
怪我をしている者の受験は受け付けないというのを聞いて、

髪の色も違い性別も違うけれど、双子の妹のダフネは、
兄の身代わりとして男に変装し、試験を受ける事を決心する。

兄の足の怪我が治るまでの期間、
無事にダフネは兄の身代わりが勤まるのだろうか。

身代わり

ダフネの毎日の一番最初の仕事は、
早朝の一番忙しい時間を過ぎた、町の市場の顔見知りの屋台を回って、
野菜の切れ端とか、捨てるような硬いスジ肉の細切れとか、
売れずに少し痛んでしまっているような果物を恵んで貰い、
小脇に抱えた大きいざるに放り込んで貰う事だった。

「よう、ダフネ。毎日、大した金にならない仕事に精が出るな」
海外との貿易が盛んなこの大きい港町特有の勢いのいい柄の悪い訛りの口調で、
ダフネを見かけた市場の男どもが声をかけてくる。
「お金なんて、私が毎日貰っている子供たちの笑顔に比べたら取るに足らないものよ！
無駄口はいいから、さっさとそこの魚を2、3匹この中に放り込んで頂戴」

ダフネは背中までのプラチナブロンドの髪を、いつも無造作に束ねていた。
ほっそりとした体は、
まるで色気の無い地味な黒いワンピースに包まれているけれど、
そのエメラルドのように、キラキラと光っている緑の瞳の美しさは隠せず、
おどけて市場の男をひと睨みしてダフネが言うと、
声をかけた男たちは、皆一様にダフネに見とれ、
自分の所の商品を気前良く、ダフネの抱えているざるに放り投げるのだった。

ダフネの仕事は、町の孤児院で身寄りのない子供たちの世話をする事だった。
町からおりる少ない予算で、施設を切り盛りするのは結構大変なのだ。
だから食費などをぎりぎりまで切り詰めるために、ダフネはこうして毎日市場の人間から、
食べ物を寄付してもらっているのだった。

今日も無事に食べ物で満杯になったざるを抱えて、
ダフネが自分の働いている孤児院に戻ると、
院長がダフネを施設の入り口で待ち構えていた。

「どうしたんです？院長」
ダフネは品の良い初老の院長の、ふくよかな頬が青ざめているのに気がついて、
首を傾げた。
「何か、子供達がやらかしたんですか？」
院長は子供たちのいたずらに大げさに反応するから、などと思いながら、
ダフネはのんきに言って、脇に抱えたざるを院長に見せる。
「今日も大収穫ですよ。今晩は肉のたくさん入ったスープが作れそうです」
「ダフネ、すぐに家に戻りなさい」
ダフネの言葉を遮るように院長が言った。
言われた意味が分からず、きょとんとしてダフネは院長の顔を見る。
「あなたの双子のお兄さんのカルロスが、

事故に遭い、怪我をしたそうです。幸い、命に別状はなかったようですが」

「……ええっ！」

ダフネが驚いて持っていたざるを落としそうになったのを、院長が押さえて、ざるをダフネの手から受け取った。

「今日の仕事はもういいから、早く家に戻ってお兄さんの顔を見て上げなさい」

ダフネの頬から血の気がなくなり、色白の顔はますます白くなる。

カルロス兄さんが、事故で怪我？

なんてこと、明日は兄さんが受ける国家高官の最終試験だっていうのに。

何年も努力して努力して、ようやく兄さんは最終試験までたどりついた。

それが水の泡になるなんてことだけは、絶対ありませんように。

大商人や貴族などの出の者達のコネがあるような人達と違って、何の後ろ盾も無い一民間人からこの試験を受け、最終試験までたどりついた者は、

ダフネが見聞きしているだけでは、兄のカルロスだけだ。

この大きい港町で育った勉強熱心なカルロスだからこそ、

今後ますます大きく門戸を開くであろうこの国の、

通商航海に役立つ、数か国語を操れる事を武器にカルロスは試験を勝ち進んだのだ。

明日の試験は、なんとか受けられるくらいの怪我だといいんだけれど。

ダフネは院長に礼を言って、家に向かう道を走って帰りながら、祈るように心の中で呟いていた。

両親と双子の兄と暮らす、質素で粗末な家の玄関の扉の前に立つと、
ダフネは自分の手が震えているのに気がついた。

双子の兄のカルロスが無事、難関の高官試験を突破した暁には、
この家を家族は出る予定になっていた。
ダフネとカルロスが生まれた頃から住んでいるこの小さい家は、
借家であって、家族のものではなかった。
古くからの顔見知りの大家は、とても人の良い人なので、
ダフネの家族に出て行くようにとは決して言いはしないのだけれど、
ダフネの家族たちは知っていたのだ。
一人暮らしをしている大家のコネリ老人が、
本当は持っている自分の古い貸家を全て壊して、
更地として売りに出し、その売却資金を持って孫の家族のいる隣町
に行きたいと、
心の中では思っていることを。
そして、ダフネ達のいる借家の並びには、
古いせいもあるのか、ダフネ達しか残っていなかった。

カルロスが国の高官として宮廷に仕事に上がることになれば、
国の仕事に携わる者として、住まいを国から提供されることになる。
そうすれば、２２歳という年まで、
苦学生としてずっと勉強一筋できた兄を支えてきた両親と、
兄は一緒にその住居に住めることになる。

国から支給される住まいだ。
今いる古い小さい借家よりは、ずっと見栄えのする家だろう。

そうすれば、カルロスは結婚をして家庭を持つことも可能になる。
カルロスも、両親も幸せになるだろう。
その時は、ダフネは今働いている孤児院に住み込みで雇ってもらえる事になっていたので、
全て丸く収まる予定だったのだ。
それが、カルロスが事故にあったせいで、
試験に受かる事が出来ず、借家を出ることもかなわず、
全て駄目になるのかもしれない。

「ただ今！」
空元気を出して、ダフネは思い切って家の扉を開けた。
そして、部屋の中に入ると後ろ手に扉を閉め、狭い廊下を居間へと走った。
居間の戸を開けて中に入る。

真っ先に目に入って来たのは、居間の真ん中に設えられたベッドだった。
天井からロープが吊るされていて、そのロープはダフネの双子の兄、カルロスのギブスで固定された右足を吊っていた。

ダフネが居間に入っていくと、足を吊られて寝ている兄のカルロスと、
側に不安げに座っている両親が、一斉にダフネを振り返った。

顔つきは良く似ている双子とはいえ、
二卵性の兄のカルロスは、髪の色もプラチナブロンドのダフネとは違う。

少しウェーブのある黒い髪をしているカルロスは、
ダフネを見ると驚いたように目を見開いた。
「ダフネ、仕事はどうしたんだ？」
声もよく似ていると言われる。
けれど、勿論ダフネと違いカルロスは男なので、
ダフネの声よりもずっと低いのだけれど、
その柔らかいトーンの響きはダフネの声にとても似ていた。

思わず、ダフネの目から涙がこぼれる。
「兄さんが事故にあって怪我をしたと院長に聞いたから」
ダフネは寝ているカルロスに走りよって、ベッドにしがみついた。
「ああ、でも思ったよりもずっと元気そうで良かった」
「足を骨折はしたけど、暴走した馬車には頭は轢かれなかったから」
カルロスが弱々しくも明るくいうのに、
涙をぽろぽろ流しながらも、ダフネはにっこりと笑って言う。
「ねえ、明日の高官試験の受験には、
私も付き添って行くわ。支えて歩いてあげるから一緒に行きましょう」
ダフネが言うと、カルロスは小さく首を左右に振った。
「どうして？試験の答案の解答を書くのは怪我をした足ではなくて、手でしょう？」
ダフネが叫ぶように言うと、カルロスは目を伏せて苦々しく言った。

「もし、僕が試験に受かって勤める事になったら、
ボスとなるはずだったこの国の通商航海部門を担当する、
大臣のミルワード公爵の高官選出の基準のひとつに、
健常な肉体を常に維持出来る者というものがあるんだ。
高官として仕えてからならともかく、
試験の段階で怪我をしている者を合格させる事は無いだろう」

苦々しくも、冷静なカルロスの口調にダフネが声を荒げる。
「そんな！人には事情ってものがあるでしょう？不運にも事故にあって怪我をしたからって、
こんなに勤勉で優秀な兄さんを、試験から落とすなんてしたとしたら、
そのミルワード公爵とやらは、とんでもない馬鹿なんじゃない？」
ダフネの母親が慌ててダフネに駆け寄り、ダフネの口をふさぐ。
「聞くと、ミルワード公爵は、国の政治機関の中でも一番最年少で大臣になったという曰くの方。
見聞が広く、この国の通商航海を仕切らせたら、右に出る者がいないと聞くわ。
そんな恐ろしい方の悪口を言うのは、やめて頂戴」
悲鳴に近い声で言う母親に、ダフネは大人しくなって頷いた。
「けれど、兄さんが試験を受ける事が出来なくなったら、
私たちはどうするの？」
不安げに言うダフネに、父親が力の無い声で言う。
「もうこれ以上、大家のコネリ爺さんには迷惑をかけられない。
私たちはこの家を出て行くしかないだろう。
大丈夫、カルロスにはまた来年試験を受けて貰うことにして、
それまでまた頑張ればいいさ。ダフネ、お前は孤児院に住み込ませて頂いて、
天職をまっとうしなさい」
父親の言葉に、ダフネはまた瞳に涙をにじませて言う。
「父さん、兄さんの高官最終試験までに受験費用がいくらかかったのか、
私は知ってるのよ。来年なんて、絶対無理よ」
ダフネが強く言うと、父親は顔を伏せた。
国の高官試験を受けるのに、庶民出身がいなくて貴族や大商人の子息が多いのは、
受験料が庶民の家を一軒建てるくらいの費用がかかるせいもあった

のだ。

「分かったわ。私が兄さんのカルロスの代わりに最終試験を受けるわ」

ダフネが決意したように言いながら立ち上がると、

ベッドの上のカルロスと両親が驚いたように、ダフネを見上げた。

「男と女の差はあれ、私とカルロスは双子だし、

通商航海の試験の鍵となる外国語は、

海外の船がしきりと出入りするこの大きな港町育ちの私だって、

その辺の貴族のぼんぼんより得意だわ」

ダフネは唇を噛んで、少し考え込んだ後、

元気良く口を開いた。

「お母さん、木工家具屋のシヌークの所へ私の靴を持って行って、

私の足の形にあった２０センチのかかとの高さのある木靴を、

明日の朝までに作ってもらって頂戴。

１６０センチない私が、カルロスの振りをするなら２０センチは身長を足さなきゃ。

お父さんは、馬具屋のソーンさんのところへ行って、

やっぱり明日の朝までに、黒い馬のたて毛でかつらを作ってもらってきて！

もちろん、カルロスの髪にそっくりなやつよ！」

ダフネの両親がダフネの言葉に驚いて絶句していると、ダフネは両手をパンと叩いた。

「カルロスの試験は明日なのよ！呆けている時間はないわ！」

ダフネの言葉に、両親が弾かれたように居間の戸を出て行く。

「そして、カルロス」

ダフネは少し不安げな表情をして、ベッドの上の双子の兄を見た。
「明日の最終試験に私が受かるように、徹夜で勉強の指導をして頂戴。
ひとつの魂を分け合って生まれてきたあなたの双子の妹として、精一杯やれるところまでやってみるわ」
ダフネが不安げながらも心から言うと、
カルロスは小さくおどけたように、微笑んだ。
「それでこそ、僕の妹だ」
ダフネも小さく笑う。

「神様を騙すのは死んでも絶対に嫌だけど、いけ好かないミルワード公爵を騙すと思うと、とても楽しみだわ」
カルロスは双子の妹の上司への悪口に、小さくため息をつく。
「ミルワード公爵はとても魅力的な方だっていう話だよ？
２８歳という若さで、国の通商航海部門を一身に任されているうえに、
相当の美形だと聞いている。
世間の報道のゴシップ記事の大半は、ミルワード公爵のものだと聞くしな。
それだけ、この国の女性達が気にする人物だということだ。
優秀ではあっても、ダフネが思うような悪人ではないと、僕は思うけどな」
ダフネはからからと笑った。
「それは、女性にとって魅力的だという話だけでしょう？
悪人でないという証拠はどこにあるの？
世間の法律に関しては悪人ではなくても、
女性にとっては、極悪人かもしれなくてよ？
それに、私は明日あなた、カルロスになるの。
男になるのに、軽薄な女性とのゴシップに騒がれるような上司に

は、
余計興味は無いわね。
それに万が一、私が試験に通って高官になっても、
あなたが完治するまでの身代わりになるだけなのだから、
男としての私には、ミルワード公爵は関係ないわ。
本当にただの上司よ。
私は、自分のこの使命が終われば孤児院に戻るだけだし。
それよりも、早く勉強を教えて頂戴。お母さんとお父さんを助けられるのは、
私たちだけなんだから」
ダフネのせかす言葉に、カルロスは頷いた。
「じゃあ、その棚から参考書を取ってくれるか」

自分から言い出したものの、
果たして、カルロスの代わりが務まるのか、
ダフネは非常に不安だった。
でも、やるしかないのだ。

ダフネはカルロスに言われるまま、
書棚から分厚い本を取り出すと、双子の兄に渡した。

もう一人のカルロス

「明日の通商航海部門の、高官最終試験の重要な山場は、
イリシャ国とオーマ王国の言葉の通訳、及び翻訳だ。
両国はもうすぐ我が国マルターナと友好条約を結ぶ。
そうすると、今まで以上に、ますます両国との貿易は盛んになるだろう。
きっと明日の最終試験は、この2カ国語に精通しているかどうかに、
審査の重点が置かれる事になる」
兄のカルロスが言うのに、ダフネは頷く。

「うちの孤児院は、外国の船乗りと恋に落ちて授かったものの、
色々な事情で親が育てられなくなった子供たちを、
たくさん預かっているわ。
イリシャ国やオーマ国のハーフの子も数多くいる。
その子達にここマルターナの言葉を教えたのは私よ。
食料を仕入れに行く市場では、毎日外国の船乗りにも会うし、
大体の言葉なら理解してるわ」
頼もしく言うダフネに、双子の兄のカルロスは頷くと、
分厚い参考書のページを閉じた。

「さあ、もう夜が明ける。少し部屋に戻って休むといい」
天井に足を吊ってベッドに横になっているカルロスは、
優しく言うと、ベッドの側に座るダフネの頬に片手を当てた。
「ダフネ、やっぱり考え直したらどうだ？
僕の代わりに男装して試験を受けるなんて、無謀だ。
見つかったらどうする？

それにどう変装してみたって、ダフネは男には見えやしないさ。
僕の可愛い、この世でたった一人の妹なんだから」
自分と同じ緑色の瞳にじっと見つめられてダフネは微笑むと、
カルロスの手に自分の手を添えた。
「双子の妹ながら、カルロス兄さんって本当にハンサムだわ。
でも、私だって身長を２０センチ高くして、黒いカツラを被ったら、
兄さんにそっくりな美男子になれると思うの。期待してて頂戴。
それに、もし見つかって試験に不合格になったとしても、
何もしないで最初から諦めるよりは、気が済むだけマシなはずよ」
にっこりと笑ってダフネは言うと、居間を出て自分の部屋へと戻っていった。

狭い自室。
カルロスも、ダフネと同じような部屋を一室両親から与えられていたけれど、
あの足を吊るベッドが入るような大きさの部屋ではない。
だから、カルロスは居間に寝かされていたのだろう。

小さい鏡台の前には、ダフネが言った通りに、
父親と母親が手配した身長を高くするための底の厚い木靴と、
黒い馬のたてがみで作られた短髪のカツラがあった。

ダフネは一つ大きくため息をつくと、
着ていた黒い地味なワンピースを脱ぎ捨てた。
ほっそりとした体つきの割りに、ふくよかにふくらんだ胸を包む下着が露になる。

さらしで胸をつぶし、胸板が厚くなるように何重にも巻く。
綺麗なストレートのプラチナブロンドの長い髪は頭の上にまとめると、
固くピンで留めた。

そしてその姿のまま自分の部屋を出ると、カルロスの部屋に行き、
クローゼットを開けて、明日最終試験に向かってカルロスが着ていくはずだった、
黒いパンツと白いフリルのついた襟のシャツ、ベスト、マントを取り出して部屋に戻る。

それらの服を手早く身につけ、
重く底の厚い木靴を履き、ダフネは黒い短髪のカツラを被った。

カルロスとの実際の身長差は、２０センチ近くある。
さらしを巻いても多少だぶつく上着はどうしようもなかったけれど、
裾の余る黒いパンツは木靴で何とかごまかせた。

被った黒髪の前髪を手で直しながら、ダフネは鏡の中の自分を見た。
そこにはカルロスによく似ている、でも知らない誰かが映っていた。

「お嬢さん、私の名前はカルロス・クレインと申します。
どうか以後、お見知りおきを」

意識して低めの声で鏡に向かって口を開いてみる。
エメラルドグリーンの瞳が、黒い前髪の間からきらりとのぞいて、
我ながら、カルロスとはまた少し違った魅力のある男が鏡の中にいるのを見つけ、
ダフネはにんまりと笑った。

カルロスに自分の姿を見せようと部屋のドアに歩き始めて、
履いた重い木靴を思い出した。
その時にはすでに遅く、バランスを崩して転んでしまう。

「ああ、そうだった…。いつもよりも２０センチも背が高いんだから、
気をつけなきゃ」
強く打った腰を手で撫で、痛みをこらえて唸りながら、
ダフネは呟いた。

そして、兄の代わりになって試験に行く前に、
勤めている孤児院に行って、
仕事を休む旨を院長に話さなければならないのを思い出す。

窓の外が朝の光に明るくなりつつあるのを見ると、
ダフネはカルロスの服を脱いで、
孤児院に向かうためにもう一度自分の服に着替えたのだった。

ペラー

朝焼けに染まる港町を小走りになりながら、
ダフネは勤めている孤児院へと急ぐ。
カルロスの代わりに試験に向かう時間までには、
家に戻らなければならない。

まだ6時を少し過ぎた頃だったけれど、
孤児院の建物にたどり着いたときには、
仕事仲間の一人が玄関口を箒で掃いて、掃除をしていた。

「あら、ダフネ。お兄さんが事故で怪我をしたから、
今日と明日は、お休みになるだろうって院長言ってたわよ?
こんなに朝早く、どうしたの?
お兄さんは、大丈夫なの?」
恵まれない子供達のために一緒に働いている、
同僚のシンディが、優しい声でダフネに聞いた。
シンディは赤毛髪の毛をいつもポニーテールにしていた。
そして、そのそばかすの浮いている顔は、
常に穏やかに微笑んでいる。

「それが、一日二日にどころか、もしかしたら場合によっては、
兄の怪我が完治するまでの期間、お休み頂かなきゃいけないかもしれないの。
もし兄が明日の最終高官試験を受けて受かれば、
しばらく足が不自由な兄の仕事を、私が手伝うしかないのよ。
ほら、うちの家族って兄の就職にすべてをかけてるじゃない?」
家の事情を知っているシンディに、ダフネは遠慮がちな声で言う。

「そう、それじゃあ仕方ないわね。また必ずここに戻ってきてくれるなら、
それまでのあなたの仕事の穴埋めは、喜んでしてあげるわよ」
シンディの優しい言葉に、ダフネはほっとする。
「院長は昨日の晩から、急用で出かけているの。
だから、ダフネの事は私の方から院長に言っておくけれど……」
シンディの声のトーンが沈んだのに、ダフネは首を傾げる。
「何かあったの？」
「あなたがいなくて、困った事が起きてね」
シンディは箒を置くと、ダフネについて来るように仕草をして、
孤児院の建物の中に入って行った。

「三日前に、難破したんだろうと思われる小さな漁船が、
砂浜に座礁していた中から、助けられた女の子がいるじゃない？」
シンディの言葉に、ダフネは頷く。

まだ多分、7歳にもなっていないだろうと思われる少女だ。
座礁した小さな漁船の中に、かろうじて息をしている状態で見つけられたのだ。
一緒だったであろう親の姿はどこにもなく、
きっと難破した時に波に流されてしまったのだろうと、
孤児院では予測していた。

そして、一番困ったのが言葉が通じないことだった。
多分、近隣に点在する小さな島国の民なのだろうとは思うのだけれど、
今まで聞いたこともないような言葉を、その少女は話すのだった。
外国との交流が盛んな大きい港町に育ったダフネも、

少女の話す言葉は今まで聞いたことが無かった。
けれど、言葉は通じなくても、
献身的に世話をするダフネにその少女は心を開いていて、
昨日、ダフネが施設を留守にしたことに、
駄々を捏ねていたというのだ。

少女の名前だけは、何とか通じない会話の中でも、
ダフネは見つけていた。

「ナイケ？」

広い部屋に並んだベッドの中から、
その少女のベッドを見つけて、ダフネは近づきながら小さく声をかける。

毛布をかぶっていたものの、寝てはいなかったのだろうか、
ダフネの声を聞くと、毛布は一瞬で持ち上がり、
中から施設に支給されたパジャマを着た、金髪の幼い少女が顔を出した。

「シ　ギウンズ　ウォ」

理解の出来ない言葉を言いながら、少女がダフネに抱きついた。
ダフネは少女を抱きしめる。

「ごめんね、何も言わないで仕事を休んじゃって。
でも、大丈夫よ。私はしばらくこれないけれど、
私の同僚達があなたのお世話をしてくれるから」
ダフネは言いながら、ナイケの幼い体を抱きしめて話しかける。
きっと意味は通じてはいないだろうが、
言葉に込めた愛情は伝わるはずだと、ダフネは信じていた。

「ダフネ」
少女が顔を上げて、ダフネを呼んだ。
少女も言葉が分からないながらも、会話の中から、
ダフネの名前を理解したのだろうか。
ダフネの表情が気持ちが通じた嬉しさで、ぱっと明るくなる。

「イッヒ　シュテルメン　スカッツァ」

ナイケの言葉に、やはり理解出来なくてダフネは首を傾げて少女を見る。
ナイケは小さく笑うと、
自分の首の後ろの手を回して細いチェーンを外すと、
それをダフネに差し出した。

銀色の細いチェーンの先に、美しい小指の先ほどの黒い珠がついている。
それは不思議な珠で、
黒い色をしているのに、光の加減では虹色に光るのだった。

「え？これを私にくれるの？」
ダフネが驚いて、ナイケを見る。

「アイン　シュワルツェ　ペラー」
ナイケは続けて言うと、
ダフネの手の中にその不思議な美しい珠のついたネックレスを押しつけた。

「私が貰ってもいいの？こんなに綺麗なもの。
あなたが大事にしていた物なんじゃないの？」
ダフネが言うと、ナイケはまた笑った。
そして拙い言葉で、ダフネに言った。

「ダフネ、私のママ、似てる」

誰かに教わって覚えたんだろうか。
たどたどしいけれど、マルターナの言葉だった。
ナイケは言い終わると、
みるみるとその瞳から涙をあふれ出す。
ダフネはネックレスを受け取りながら、
ナイケを強く抱きしめた。

どれだけ心細いだろうか。
言葉も通じない国に、親からはぐれて一人きりで。
そんな子が、自分を慕って贈り物をくれるというのだ。

自分の目からも涙が流れるのを感じながら、
ダフネは胸の中に抱えたナイケを見た。
「有難う、一生大事にするわ。
もう一度、これが何なのか言ってくれる？」
ダフネが言うと、ナイケは頷く。

「アイン　シュワルツェ　ペラー」
ナイケの言葉を、一生懸命ダフネが繰り返す。

「あいん　シュワルチェ　ぺ……」
ダフネがついていけないのに、ナイケが笑った。

「ペラー」
ナイケが言う。
「ぺらー？」
ダフネが繰り返すと、ナイケは頷いた。

「ペラー、ペラー」
ナイケは言いながら、ネックレスの先の美しい黒い珠を指して言う。
「ぺらー、ぺらーね？」
ダフネが同じように黒い珠を指して言うと、
ナイケは弾けるような笑顔で頷いた。

ナイケとシンディーに見送られて孤児院から戻ると、
部屋でダフネはカルロスの服に着替えた。

鏡の中のダフネは再び中性的な魅力のある、美しい黒髪の男になった。
ナイケに貰ったネックレスをフリルのついたシャツの襟元に隠すと、
両親とカルロスに挨拶をして、
ダフネは高官の最終試験の会場に向かったのだった。

抗えない魅力

国の王政が執り行われる建物は、
国王が住まう広大な王宮の敷地の一部にある。
今日の試験は、その建物の一室で行われる事になっていた。

試験会場と看板が掲げられている門の前で、
ダフネはぞろぞろと中に入っていく黒いマントの男達に、
少し気後れして立ち止まっていた。

履いている木靴のせいで、身長は周りの男達に見劣りがしないものの、
カルロスが言っていた身体の選考条件があるせいなのか、
どれも頑強で体の大きい男達だ。
この中に入ると、ダフネは自分が貧弱な体つきをしているのを、
思い知らされた。

男たちは誰もが皆、利発そうな鋭い眼光を辺りのライバル達に投げかけながら、
門の中へと入っていく。

ふと、自分を通り過ぎていく男の一人がダフネを振り返り、
声をかけてきた。

「最終試験にびびってるなら、遠慮なくこの門の前から引き返して貰おうか。

今日、これだけの人数から選ばれるのは、たった一人だ。
あんただけでも減れば、それだけ可能性が増えるからな」
ダフネの被っているカツラと同じ黒髪の男だったが、その男はあごひげを生やしていた。
年齢的にはかなりダフネよりも上のようだった。

「冗談、誰がびびるもんですか」
ダフネが咄嗟に言い返すと、そのひげの男は眉をひそめた。
自分が素のまま答えていたことに気がついたダフネは、
慌てて低い声にして言い直す。
「私はこの日のために今まで頑張ってきたんです。引き返すなんて出来るわけがない」
言うとダフネは門の中に入っていった。
歩きにくい木靴でも、なるべく大股歩きをするように心がける。

昔町で見た芝居を思い出す。
その芝居は女性だけで劇団を作っていて、
女性が男役も務めていた芝居だった。
それはそれはその辺の本物の男よりも、ずっと二枚目の男に見えるような男を、
その女性の団員は見事に演じていた。

せめてイメージだけでも。

ダフネは心の中で呟きながら、芝居の様子を思い出して歩き続ける。
あごひげの男も、ダフネの様子を見て小さく肩をすくめると、
再び歩き始めた。

会場になっている部屋に入り、マントを脱いで椅子に座る。
部屋の中を見回すと、そこにはざっと見ただけで３０人近くの男たちがいた。

この全員が最終試験を受験して、選ばれるのがたった一人なの？

ダフネは心の中で、呆然と呟く。
いくら、イリシャ語とオーマ語が得意とはいえ、
この優秀な男たちを負かす事が出来るんだろうか。
カルロスと参考書で勉強した他の知識は、所詮一夜漬けのものなのだ。

やがて時間が来ると、試験管らしき人物が入ってきて、
テスト用紙を配り始めた。
ダフネの手が緊張で小さく震える。
翻訳以外の問題が多ければ、アウトだ。

開始の合図とともに、受験者は一斉にテスト用紙を表にひっくり返した。

ダフネは問題の全てに真っ先に目を通した。

カルロスの言っていた通り、大半がイリシャ語とオーマ語の翻訳だったが、
残りの問題はカルロスから教わった参考書にも載っていないような

異色な問題で、
ダフネは驚いていた。

それはこのマルターナ国で一番栄えている港町市場で扱っている輸入品の中で、
フルーツや魚、農産物などの食品の最近の取引内容を、
国別に記すというものだった。
その問題の下には、簡単な白地図も書かれていて、
どこの国のどの港から何を輸入しているのかという、
ルートを問う問題もあった。

問題の港町市場というのは、
毎日ダフネが施設の食料を寄付して貰うために出入りしている、あの市場の事だ。
そして、ここのところ、
盛んにマルターナ国と友好条約を結ぶ国が増えているため、
出入りしている他国の国々も、輸入される商品なども移り変わりが激しいのだ。
リアルタイムの取引内容は、市場に実際に足を運んでリサーチをしている者ならいざ知らず、
いくら優秀で賢かろうが、卓上で知識を吸収しているようなここの受験者の男達では、
きっとダフネほど、正確にこの問題に答えられる者はいないに違いないと、
ダフネは思った。

ああ、神様、

チャンスを有難うございます。

ダフネは胸の前に手を組んで、しばし神にお礼の祈りをすると、
ペンを勢い良く手に取り、答えを記入し始めた。

制限時間が来て、答案用紙が集められると、
結果の発表を待つ間、ダフネの周りの者達は顔見知りなのか、
数人が、ひそひそと雑談を始める。

「今日選ばれるのは、身分は国の高官というものらしいが、
実際の仕事っていうのは、例のミルワード公爵の秘書だって話だぞ」

「ミルワード公爵かぁ。相当傲慢な男だっていう噂だもんな。
個人秘書はきついよな、はっきり言って」

「２８歳という若さで、父親から継いだ海運業を、
もとの数倍の規模に成長させたやり手を買われて、
国に通商航海部門の顧問を依頼されたという優秀さは分かるがな」

「その上、毎回ミルワード公爵のゴシップ記事が新聞に載るたびに、
この国だけじゃなく、他国の女ども達までが騒ぐ程の、
相当な美貌の持ち主だしな。
俺が女だったらな。ミルワード公爵の個人秘書になることに、
諸手を挙げて歓迎出来るんだがな」

「相当な女好きだって話だしな」
その後に、男達の間にクスクスと小さい笑いが起きた。
嫌でも、ダフネの耳に会話が入ってくる。

ミルワード公爵の個人秘書。
ダフネは会話を聞いて青ざめていた。

個人秘書ということは、もし試験に受かったら、
間近に顔を合わせるということだろう。
いくら自分がカルロスと双子だといっても、
もともとが二卵性であるし、男女の差もある。
代わりを演じた後、カルロスの怪我が治って入れ替わったら、
ばれてしまう可能性もある。

もし試験に受かる事が出来たとしたら、
その後の対策も考えなければ。

ダフネは青ざめて試験の結果発表を待っていた。

ふと、バタンッ！と音がして、
会場の扉が開いた。

さっきの試験官とは違う、背の高い男が部屋の中に入ってくる。
深い青のベストにシンプルな白いシャツ、黒いパンツ姿。

濃い茶色の短い髪の男だ。
その堂々とした強い足取りは、受験者一同の視線を釘付けにした。

そして、部屋の正面に行くと、
受験者を見渡して口を開く。

「諸君、ご苦労だった。試験の結果が出て、
五人が同点であった。
今から名前を呼ばれた五人は、その場で起立すること。
その他の者は、即座に退出して帰ってよろしい」

有無を言わさぬような強い声。
けれど、深みのある低いその声は、なんとも言えず魅力があった。

そして、真っ直ぐに受験者を見る、
髪の色と同じ濃い茶色の瞳の力強さ。

何よりも、その男は、
地味に２２年生きてきたダフネが見たこともないくらい、
美しかった。
まるで、神話の中の登場人物が、
肉を持って生まれてきているかのようだった。

スラリとしながらも、
きっと上着の下の体は固く鍛えられているであろうことが、
服の上からでも分かるような体型。

長い足、長い手、
そして、その顔は、

まるで非の打ち所がないような端正さだった。

少し日焼けしている肌は、匂い立つような男の色気を増幅させている。

髪の色と同じ濃い茶色の瞳は、光の加減では金色にも見えるのが、ますます魅力的だった。

通った鼻筋、広い唇。

服の胸元から少し覗き見える、逞しい首筋。

「ミルロード公爵が、試験会場に直々に来るとはな」

誰かがぼそりと言った。

この人がミルロード公爵！

ダフネは心の中で叫んだ。

なるほど、マルターナ国だけどころか、

他国の女達も騒ぐはずの素晴らしい男性だわ。

ダフネは孤児院で働いているという環境のせいもあるのか、

初恋もまだだったけれど、

ミルワード公爵を見た瞬間から、

この人の広い胸にもたれる事が出来たら、
どんなに素晴らしいだろうと、妄想してしまうのだった。

「ダフネ……」
なんて、こんなに素敵な人に自分の名前を呼ばれたら、
一体、どういう心持になるのだろう。

試験の合格の発表がされている間も、
ダフネはぼーっとミルロード公爵に見とれながら、
自分の妄想の中にいた。

「カルロス・クレーン！」

いらついたような声が、ようやくダフネの耳に入って、
ダフネは我に返った。

「カルロス・クレーン。この場にいないのなら、
次点の者を合格させるが！」

ミルロード公爵の怒鳴り声に、
ダフネは震え上がって、椅子から勢い良く立ち上がった。

そうだった、今はダフネ・クレーンではなく、
自分はカルロス・クレーンなのだ。

「はいっ！ここにおります！」
声が裏返ってしまっているけど、構っている余裕は無い。

目を細めて睨むようにして、ミルロード公爵はダフネを見た。
「合格者の発表の時に呆けていられるというのは、
大した度胸だな。
しかし、自惚れるな。今ここにいる五人の中で、
一人しか俺は採用はしない」
明らかに嫌悪の感情を込めて言われて、ダフネはオドオドしながら
周りを見回した。

いつの間にか、三十人近くいた受験者は姿を消していて、
ダフネをはじめ、その場に起立してミルロード公爵と向き合っている
のは、
五人だけになっていた。
その中に、門でダフネに帰れと言ったあのあごひげの男もいる。

何をやってるの！
ダフネは自分を叱咤する。

いくら、ミルロード公爵が素敵だからといって、
見とれて、この最終高官試験の合格を無駄にしてしまうなんてあり
得ない！
カルロスの身代わりの役目を、きちんとやり遂げなければ。

しかし、みくびっていた。

ダフネは心中、少しがっかりしていた。

輸入品の事に関するあんなに意外な問題でも、この机上のエリート集団に、
私と同じくらいに答えられる人が四人もいた。

そして、公爵は五人の中で、
一人しか採用しないと言った。

ならば、次の試験は絶対に勝たなければ。

ダフネは唇をかみしめて、
ミルロード公爵から感じる魅力を、心の中で押し殺したのだった。

傲慢で最低な奴

「次の選考は別室で行う。ついて来るように」

ミルワード公爵は言うと、きびすを返して部屋の出口へと歩き始めた。

ダフネの他の四人の男たちも急いで席から離れて、ミルワード公爵の後を追う。

もちろん、ダフネも急いで歩き出した。

けれど、動揺しているせいか木靴の足がもつれて躓(つまず)いてしまう。

試験のために並んでいた椅子とテーブルにぶつかり、

ガタガタンッと大きな音を立てて転んでしまった。

部屋を出ようとしていたミルワード公爵を始め、

他の四人のライバル達が、転んでいるダフネを振り返る。

ライバルたちは気の毒そうな顔をしたものも、小さく笑った者もいたけれど、

ダフネの目に真っ先に入ってきたのは、

美しいミルワード公爵の顔に浮かんだイライラとした表情だった。

さっき名前を呼ばれた時にも公爵に見とれてぼうっとしていて、

そして今度は動きが鈍くて転んだのだ。

もう公爵は本音では、自分を即効落第にしたいに違いないのだろうと、

ダフネは感じ取っていた。

慌てて立ち上がっている間に、
気がつくと部屋の中には誰もいなくなっていたのをいいことに、
ダフネは口を尖らせて小さい声で毒づいた。
「何よ、ちょっと転んだだけじゃない。
いくら顔やスタイルが抜群で、地位や名誉があるからって、
そんな風にさげずむように人を見ることないでしょう？
さっき誰かが言ってたけど、ミルワード公爵って外見だけで、
性格は本当に傲慢で最低な奴だわ」
ぶつぶつ呟きながら、ダフネは急いで部屋を出て皆の後を追った。

廊下に出て、小走りになって他の者の姿を探すと、
受験者の最後の一人が、廊下の先にある部屋の扉の中に消えるところだった。
「危ない、危ない」
ダフネも追いかけて、閉まりかけた扉を手で掴んで開けると、
中に滑り込む。

ミルワード公爵の前に整列するようにして、他の合格者の四人が立っている脇に、
ダフネも急いで並んだ。

「本来なら、先ほどの最終試験で採用の人間を決める筈だったのだが、
同点者が五人いたので、一名にしぼるための追加試験を今から行うことになった。
しかし、ここまで来る間に多少自分の気が変わったこともあって、
今から行う試験に合格者がいない場合には、今回の採用は見送ることにした」

ダフネを始め、残りの四人もざわめく。
「今日の採用は単なる国家公務員を雇うわけではなく、
私の右手となるような個人秘書が欲しい為の公募だった。
直感で申し訳ないが、
何故か今日の試験結果の人材に、最大の信頼を抱くことが出来ない気がしてな」

ミルワード公爵のさらっと言い流す言葉にはかなりの毒がこもっていて、
受験者達は驚きを隠せずにいた。
そして、ダフネの他の受験者は、皆ダフネをちらりと見ていた。

なによ、私のせいだっていうの！
皆の視線を受けて、ダフネは目を見開く。

試験の点数だけは良かったけど、
実際の人材としての資質に問題がありそうで、
最大の信頼を抱くことが出来ないっていうのは、
もしかして、私のこと？

ミルワード公爵をはじめ、他の受験者に対しても、
ダフネの中に燃えるような怒りが沸いてくる。

馬鹿にするのもいい加減にして欲しいわ。

まったく、こんな最低な男に見とれてぼーっとしてたなんて、
今までの私の２２年の人生で最大の恥だわ！

睨むように見ていても、決してダフネの事を見ようとしないミルワード公爵に、
ダフネは心の中で悪態の限りをついていた。

カルロス兄さんも、こんな奴のもとで働かなきゃいけないなんて、
試験なんか落ちたほうがいいんじゃないかしらとさえ思うわ。

けれど、ふっと両親の顔が頭に浮かんだ。

でも、カルロスがこの試験に受からなければ、
お父さんお母さんが、困ることになるのよね。

ダフネはミルワード公爵から視線を落とすと、
唇をかみ締めて俯いた。

やはり、どうしてもこれはカルロスに欲しい仕事なのだった。

「それでは、今から追試の内容を説明する。
そこの台には、多数の貴金属が展示してあるが、
その中の一つに、まだマルターナと国交の無いある国の特産物が

ある。
この辺りでは見ることも無い、とても珍しいものだが、
その国との交渉次第によっては、量産可能の代物だ。
もしその国と国交が開くことが出来て、
お互いに特産物などのやり取りが興るようになれば、
この国の貿易がますます盛んになると、
私は読んでいる。
君たちには、その国の特産物がどれなのかを当てて貰いたい」
ミルワード公爵が言い終わると、部屋の扉ががちゃりと開いて、
女性が一人入ってきた。

襟元がつまっていて、腰に大きなベルトを巻いているような、
今まで見たこともないような、不思議な民族衣装を着ている、
金髪の女性だ。
一重の目はきつい印象を与えていたが、美人と言えなくもなかった。

その異民族の衣装を着ている女性が口を開く。

「イッヒ　カン　ドーチェラン」

イリシャ語でもなく、オーマ語でもない、
意味の分からない言葉に、受験者は顔を見合わせる。
そして、その女性は言葉を続けた。

「ダス　ポゾンドル　ポルクトン　ソルスランドス　イストアイン
シュワルツェ　ペラー」

早口の言葉でいい終わると、その問題を読み上げるためのゲストは、

肩をすくめてミルワード公爵を見る。
ミルワード公爵は小さく頷いた。

「今の言葉から推測して、このゲストの出身地でもある国の特産物の、
　宝飾品を示して貰いたい」

ミルワード公爵の無謀な言葉に、受験者達はうめき声を上げて、控えめに抗議をした。

聞いたこともないような外国の言葉をその場で聞かされても、意味など分かるはずもない。
ミルワード公爵には、きっと今回の採用を取るつもりはもうないのだと、
ダフネを始め、他四人の受験者達は思った。

しかし、問題を解くのが無理だと悟っていても、解くしかないのだ。
あとは運に任せて、あてずっぽうに宝石を選ぶしかないのだろう。
ダフネと他の受験者は、
絶望に包まれて青ざめながら言われた台を見た。

部屋の中央に赤いビロードの敷かれた大きな台があって、
そのビロードの上には、数々の宝飾品が並べられていた。

そのどれもが、本物であったら素晴らしい価値があるであろう、宝飾品だった。

手の平大の赤い色の宝石をあしらったティアラや、緑、黄色、青、白、色取り取りの宝石で飾られたネックレスや、指輪、ブレスレット、ブローチなどがぎっしりと並べられていた。

受験者の五人は、その赤いビロードの敷かれている台の前で、頭を抱えて宝石を眺めていた。

宝飾品の数はざっと５０はある。
当てずっぽうにひとつ選んでも、当たる可能性は限りなく低い。

他の受験者達と一緒に、絶望しながらその数々の宝石を眺めていて、ふと、ダフネはあるものに目が行って動きを止めた。

それは、他の豪華な装飾品の陰に隠れるようにしてあった。
小指の先ほどの大きさの黒い丸い玉のついた、シンプルな銀の指輪だった。
他の装飾品に比べたら、みすぼらしいとさえ思えるような指輪だ。

ダフネは何気にその指輪をそっと拾い上げて、目の前に掲げた。
その指輪の黒い玉は、光を浴びると虹色に輝いた。

ハッとして、ダフネは自分の胸元に下げているナイケに貰ったネックレスを取り出す。
ネックレスの先についている黒い玉と、ダフネが赤いビロードの台から拾い上げた指輪の黒い玉とは、
まるで同じもののように光に当たり、虹色に光っていた。

「すいません！」
ダフネは思わず声を上げる。
「もう一度、さっきの言葉を聞かせて頂けませんか？」
真っ直ぐにミルワード公爵を見てダフネは言った。

何の感情もなく見返してくる、美しいミルワード公爵の視線に、
じっと耐えて、ダフネは返事を待つ。

「いいだろう」
しばらく黙った後、ダフネには何も期待はしていないという無表情のまま、
ルワード公爵はゲストの女性に、小さく頷いて見せた。
状況が分かったのか、
その異民族の衣装を着ている女性が、再び口を開く。
「ダス　ポゾンドル　ポルクトン　ソルスランドス　イストアイン　シュワルツェ　ペラー」

「ペラー」
ダフネが言葉の最後だけを繰り返す。
異民族の衣装を着ている女性の顔の表情が変わった。
「ヤー　ペラー」
言うと、ダフネの言葉に頷いた。

「どれなのか、分かりました」
ダフネは凛とした声で、ミルワード公爵に声をかける。
「でも、他の方が答え出すまで待ちましょうか？」
今までの侮辱のお返しだとばかりに、
ダフネは胸を張って鼻たかだかに言う。
他の四人の受験者は、ぎょっとしてダフネを見た。

ミルワード公爵は目を細めて、ダフネを見ると、
「カルロス・クレイン。他を待つ必要は無い。
答えの宝飾品は何だ」

少しくせ毛なのだろうか、濃い茶色の短い髪は、
まるでコテで熱を当てたかのように軽くウェーブしている。
こめかみの短いもみあげも、少しカールしているのが遠くからでも分かった。
光が当たると金色に見える茶色の瞳は、
じっと見つめられたら吸い込まれそうになるだろう。
日に焼けている頬、通った鼻筋、広い唇。
一体あのすばらしく魅力的な唇は、
どんな口づけをするのだろう。

……などと、
気を抜けば見とれてしまうような美しい顔で、
ミルワード公爵は相変わらずの、感情の無い声で問う。

「それは、この指輪です」
ダフネはミルワード公爵に向かって、持っている質素な指輪を差し

出した。

「まさか」

「そんな貧弱なものじゃないだろう」

見ていた他の受験者の声が上がる。

他に並んでいる宝飾品に比べたら、本当に見るからに地味な指輪なので、

そう思われるのもしょうがないと、ダフネは思った。

結局、周りにどう思われようが、

答えがあっていれさえすればいいのだ。

ダフネには、絶対の自信があった。

意気揚々として、ミルワード公爵の言葉を待つ。

すると、ミルワード公爵はダフネの視線から目を伏せると、

小さく息をついた。

「カルロス・クレイン。明日から君が私の秘書になる。

詳しい手続きは追って知らせる。住まいにて待つように」

早口で言うと、ミルワード公爵はさっさと部屋の扉に歩いて行って、

部屋から出て行ってしまった。

試験に落ちた他の受験生は、

皆社交儀礼にのっとって、ダフネに合格の祝福の挨拶をして去っていった。

ダフネは頷いてそれに答えていたけれど、
どうにもこうにも、腸が煮えくり返ってしょうがなかった。

受験のライバルだって、こんなに礼儀正しいのに、
これからの雇い主になるって人間が、あの態度ってどうよ！
まるで、私が試験に受かったのが、心底嫌みたいだったじゃないの。
状況的にどうしようもないから、雇ったっていうのがみえみえよ！

しかし、その怒りを越えてなお、
ダフネの気を引くことが、この試験にはあった。

ナイケが教えてくれた「ペラー」が、ダフネをこの試験の合格に導いたのだ。
試験に出されたまだ国交のない国というのは、ナイケの故郷ではないのか。
孤児院にいたままでは、ナイケを故郷に返して上げることなど、
到底思いもつかなかったけれど、ミルワード公爵に仕えていれば、
ナイケの国がどこなのか知る事もできるかも知れないし、
事によっては、ナイケを故郷に送り届ける事も出来るかもしれない。

カルロスのためだけではない。
ナイケのためにも、頑張ってあの嫌なミルワード公爵の下で働かなければ。

ダフネは自分に言い聞かせていた。

不毛な関係

ダフネは家に戻ると、
玄関の前で自分の仏頂面を手ではたいて気持ちを入れ換え、
満面の笑顔を作って家の中に入って行った。

家族は合格を本当に喜んでくれた。
「危なかったのよ、今孤児院で預かっている外国の少女から、
ペラーって言葉を教えてもらっていなかったら、
きっと試験には合格できなかったわ。
だって、同点5人に絞られた後の追試験で正解者が出ないと、
採用は見送るって、急にミルワード公爵が言い出すんだもの。
大体、まだ国交も無いような外国の言葉なんか、
言語学者ならさもしれず、普通の国民で理解できる人なんていないでしょう?
正解する者が出ないことを見越したような、意地悪な問題だったわ」
ダフネが言うと、双子の兄のカルロスは感心したように大きく息をついた。
「それじゃあ、怪我をしていなくて、
僕が普通に試験を受けていたら、きっと合格しなかっただろうな」
ダフネはカルロスの言葉に、慌てて、
「あら、何言ってるの?優秀なカルロス兄さんがちゃんと試験を受けられていたら、
ダントツトップの成績で合格していたに決まってるじゃない。
それこそ、五人同点なんて事にもならなかったから、
意地悪な追試なんかも無かったでしょうね」
ベッドに寝ているその肩にそっと手を置いた。
「とにかく、一日も早く怪我を治して仕事に行けるようになって頂

戴ね」
ダフネがにっこり笑うと、カルロスも微笑んで頷いた。

その日、遅くになってミルワード公爵からの使いがダフネ達の家にやって来た。
男装して待っていたダフネに、王宮に出入り出来る身分証明書や、秘書としての制服などが渡された。
ミルワード公爵の秘書としての勤務は、早々に翌日からになった。

「ダフネ、どうしてももうこれ以上無理だと思った時には、
身代わりをやめてもいいんだから」
使いの者が来ている間は身を隠していたカルロスが、心配げに言う。
「大丈夫よ、カルロス。あなたが歩けるようになるまで、
何とかやり抜いて見せるわ」
ダフネは明るく笑って答えた。

とはいえ、緊張のせいでその夜は眠る事が出来ず、ほとんど一睡もしない状態で、ダフネは次の朝を迎えた。

ミルワード公爵に気に入られていないのは、
ダフネは重々承知しているし、
後々、カルロスと交代した後の事もある。
少しでも気に入られるように、誠意を持って働こうと、
指定されたの出勤時間よりも一時間早くダフネは家を出た。

国の通商航海部門の入っている建物に出勤すると、
ミルワード公爵の執務室の場所を聞いて向かう。

場所を教えてくれた人に礼を言って、
重厚な部屋の扉を開けて中に入り、ダフネはぎょっとした。

広い部屋の中央にある広いデスクにミルワード公爵は腰をかけ、
すでに仕事をしていたのだった。

絶対にまだ公爵は来ていないだろうと思っていたダフネは、
挨拶の言葉も浮かんで来ずに、おろおろとその場に立ちつくすだけだった。

ふと、ミルワード公爵が顔を上げる。

真っ直ぐに自分を見る力強い茶色の瞳に、
ダフネの胸がドキリと音を立てた。

彫刻のように美しい整った顔。
逞しい広い肩。

今まで俯いて書類を読んでいたせいか、前髪が少しその瞳にかかっているのを、
ミルワード公爵は指でぞんざいに払った。
そんな仕草にも、思わず見とれてしまうような魅力が溢れていた。

こんなに美しい男の人が、この世の中にいるのだと、

しみじみダフネは思っていた。
その一挙一動には、この世のどんな女の眼も引き付けられてしまうだろう。

「何をぼーっと突っ立っている」
冷たい声色に、ダフネはハッと我に返る。
「も、申し訳ございません。お早うございます、ミルワード公爵様。
この度は採用して頂き、有難うございます」
青い上下のスーツになっている秘書の制服は、
兄のカルロスの体型に合わせてあつらわれているため、
やはりダフネにはかなり大きめだった。
お辞儀をするとダフネの本来の体の線が出て、上着が余計に大きく見えてしまう。

でも、ダフネの外見に興味が無いのか、
ミルワード公爵は書類に目を戻しながら、
「カルロス、その部屋の入り口のデスクが君のだ。
一時間早く出勤する姿勢は買ってやる。
後は実際の仕事振りを見せて貰うことにしようか。
デスクの上に乗っている書類の全てに目を通して、
それぞれの数字を分かりやすく表にまとめてくれ。
今日の午前中には仕上げるように」

ダフネは言われたデスクに歩み寄り、
その上に乗せられている分厚い書類を見て驚いた。
この大量の書類をまとめるのを、午前中で終わらせるの？

ちらりとミルワード公爵を振り返ると、
自分の仕事に没頭していて、こちらを見る気配もない。

負けないわよ！
ダフネは心の中でつぶやくと、デスクに座って初仕事にかかった。

どの位時間が経っただろうか、
ふと、部屋の外が騒がしい事に気がついてダフネは顔を上げた。

「フレージャーはどこにいるの？フレージャーを出してよ！」

建物の廊下中に、女性の怒鳴り声が響き渡っているのが、
扉のこちら側からでも聞こえる。

ミルワード公爵が大きくため息をついたのに気がついて、
ダフネは顔を上げると、ミルワード公爵に言った。

「騒がしいですね。女の方が叫んでらっしゃいますけど、
フレージャーって人を探してるのでしょうか。
一体、フレージャーってどこの方なのでしょうね」
ダフネがいい終わるか終わらないかの時に、
ミルワード公爵の執務室の扉がバタンッ！と音を立てて乱暴に開けられた。

扉の向こうに立っていたのは、
目の覚めるような赤毛の巻き毛の美女で、
まるでモデルのような妖艶な容姿をした美女だった。

着ているドレスも一目で高価だと分かる豪華な黒いドレスで、
大きく開いた胸元は、はじけんばかりだ。

「フレージャー、どういうこと？
最近、用事ばかりで会えないって言ってたと思ってたら、
昨夜、大きな花束が届いてメッセージカードに
『一緒に過ごした時間は最高だった。今まで有難う』
って書いてあったわ。一体どういうこと？」

涙ぐんで叫ぶように言いながら、
その赤毛の女はミルワード公爵のデスクに詰め寄っていく。

え？フレージャーってミルワード公爵の事だったの？
目を丸くして、ダフネは赤毛の女とミルワード公爵を見ていた。

「悪いけれど、俺はまだ誰とも結婚などする気はないんだ。
君、周りに俺と結婚すると言いふらしているみたいだな。
間違った関係は終わらせないと」
冷静な口調で、ミルワード公爵は赤毛の女を真っ直ぐに見て言った。
その口調も、視線も、有無を言わせない強さがある。

「私を弄んだの？」
ぽろぽろ涙をこぼしながら言う赤毛の女に、
「君だって、楽しんだはずだ。数々の高価なプレゼント、華やかな
パーティ、
情熱的な夜」
ミルワード公爵は何も抑揚のない声で続けた。

情熱的な夜！

ダフネの中で、ベッドで寝そべる半裸のミルワード公爵の妄想が浮かぶ。
耳まで真っ赤になりながら、ダフネはその妄想を打ち消した。
はしたないにも、ほどがあるわ！

「私を振って、今に後悔するわよ」
赤毛の女はミルワード公爵を睨んで言った。
「後悔か。いいね、待ち遠しいよ」
ミルワード公爵は肩をすくめて、小さく笑った。

その皮肉な笑顔さえ、
ドキリと見とれてしまう魅力がある。

赤毛の女はきびすと返すと、部屋の扉に向かって歩き出した。
途中、入り口近くにあるデスクにダフネがいるのに気がついて、
まるで当てつけのように睨まれて、ダフネは驚いた。
今まで泣いていたのが嘘泣きだとすぐ分かるような、
打算が通らなかった悔しい表情だった。

開けられた時と同じように、
乱暴な音を立てて部屋の扉が閉められると、
ダフネは気まずさに書類に目を落とした。

「まったく、女というものは面倒くさいものだ」
ミルワード公爵が誰に言うでもなく言うのに、

ダフネは顔を上げた。
「割りきった関係でいいと最初は言っていたくせに、
少し馴れ合うと、すぐに結婚を迫ってくる」

ダフネはしばらく黙っていたものの、
どうやら自分に言っていたのだろうと解釈して、
おずおずと口を開いた。
「割り切った関係ですか？」

「食事や、パーティの出席の同伴、
肉体的な欲求の発散の相手をして貰う代わりに、
言われるままに高価なプレゼントはするし、
望まれるままの優しい言葉を囁くだけの、
刹那な関係ということだ」
「それは……、とても不毛な関係だと思います」
ミルワード公爵の女性に対する価値観に、
正直ショックを受けたダフネは、
思わず心に浮かんだ思いを口に出してしまった。

ミルワード公爵はみるからに不機嫌になって、
ダフネを見て言う。
「じゃあ、どんな関係が不毛ではない男女の関係だというんだ」
ダフネはずっと胸に描いてきた、いつかめぐり合うだろう自分の運命の人を思い浮かべて、
微笑んで答えた。
「愛のある関係です。お互いを思いやり、お互いだけで他に何もいらないというような、
一生を共に生きていきたいと思うような男女の関係です」

すると、ミルワード公爵は声を上げて笑った。

「お互いだけで何もいらない？
そんな偽善的な関係は、お目にかかったこともないな。
俺が関わった女は、どいつもお互いだけで何もいらないとは言わなかったぞ。
何が欲しい、これが欲しい。そして物の次は、大抵俺の妻の座を欲しがるもんだ。
さっきの女もそうだ」
つと、ミルワード公爵は首を傾げてダフネを見た。
「カルロス、君は恋人がいるのか？」
唐突な質問に、ダフネはたじたじしてしまう。
生まれてから２２年、恋だってまだしたこともないのに、恋人がいるわけもない。

「いません」
消え入るようにダフネが言うと、
ミルワード公爵はまた快活に笑った。
「その方が懸命だ。俺もしばらくは一人でいることにしよう。
男二人で仕事に没頭するとするか」

ミルワード公爵と出会ってから、
不機嫌な表情ばかりを見てきたダフネは、ミルワード公爵の美しい笑顔を見て、
自分の中の何かが音を立てているのを感じていた。

まるで、卵の固い殻にひびが入ったような音。
この人の側で働ける事に、しみじみと幸せを感じる。
ダフネはミルワード公爵には男だと思われているけれど、
それでも良かった。
側にいられることだけで、十分だった。

それが恋だとは、まだダフネは気がついていなかった。

誘い

ミルワード公爵の側で男装をして実際に働いてみて、
ダフネがほっとしていることは、
ミルワード公爵はあまりダフネの事をよく見ていないということだった。
個人秘書などには、興味がないのだろうか。
この調子なら、きっとカルロスと交代するまで、
ミルワード公爵は、実は目の前のカルロスが、
双子の妹のダフネが男装しているなどとは、気がつかないかもしれない。

だからこそ、そっとダフネが仕事の合間に、
ミルワード公爵を盗み見しているのにも、
まるきりミルワード公爵は気がつかなかったのだった。

ミルワード公爵はダフネに対して、
実は仕事に関しても、期待はしていなかったようだった。

午前中内にと言われていた仕事を、予定の時間よりも早く仕上げて、
ダフネはミルワード公爵の元へと持って行った。
すると、意外な顔をして、
受け取った書類の出来上がり具合をチェックすると、
その正確で素早い仕事振りに驚いたようだった。

そこで初めて、ミルワード公爵はダフネをまじまじと見たのだった。
試験の時に出会ってから、初めてまっすぐに視線を向けられたのだ。
ダフネは何気に顔を伏せて、なるべくミルワード公爵の視線を避け

るようにする。

「ふむ、最初の印象と違って、
もしかしたら、君は今までの秘書の中で一番優秀かもしれないな」
じろじろとその容赦ない視線に、
「有難うございます」
と、お礼を口にしながらも、
ダフネは、ほとんど横向きになるくらいにして公爵の視線を避けた。

実は、こんな書類だけの仕事なんていうのは、
ダフネにとってはなんてことない。
普段の孤児院の仕事では、役所に提出する書類山ほどの事務処理の他に、
子供たちの世話があるのだ。
それも一カ国の言語の書類ではない。
他国との交流の盛んな港町ならではの環境なのだった。
ダフネは自分の手際の良さは、
きっと高官としてここで働いている者の誰にも負けないつもりはあった。

「しかし、何で君、カルロス、君はそんなに痩せてるんだ？
上背だけはあるが横を向くとまるで棒のようだ」
じろじろと見るのをやめずにミルワード公爵は言うと、
ふと、ダフネの腕を掴んだ。
ダフネは驚いて、飛び上がらんばかりになる。

「まるで骨と皮だ！」

呆れたように言って、ミルワード公爵はダフネの腕を何度か力を込めて握った。

「ちゃんと飯は食ってるのか？」

「も、もちろんです」

力を込めて握られている手を振り払えずに、

ダフネはせめて正面を向く顔を俯けて、黒いかつらの前髪で顔を隠した。

目を細めて何を考えているのか、デスクに座ったまま、

自分をじっと見ているミルワード公爵に、

ダフネはどぎまぎとして、目を合わせずにいる。

「まあ、いい」

ミルワード公爵がダフネの手を離す。

ダフネはほっとして、小さく息をついた。

「今夜、何か予定があるのか？」

ミルワード公爵の言葉に、ダフネは耳を疑う。

「は？」

「俺の方は、さっきのとおり予定は流れた」

あの赤毛の女性の乱入の事を言っているのだろうか。

もうはっきり別れたので、

あの女性とのデートの予定は全てなくなったということだろうか。

そしてさっきは、しばらくは男二人で仕事に没頭しようといっていた。

ダフネは思い出していた。

「確か、酒は好きだと身上書の自己紹介欄にあったが、
俺も嫌いではない。どうだ、一緒に食事でもしないか」

真っ直ぐな茶色の瞳が、ダフネの様子を伺うようにじっと見ている。
顎に人差し指を当てて、少し首を傾げているその表情は、
本当にきっとどんな女性も見とれてしまうであろう、
美しい男性のギリシャ神話の彫刻が、動き出したようなものだった。

「お酒は」
ダフネは思わず口にする。
お酒が好きなのはカルロスだ。
実はダフネはあまりお酒は強くない。
弱いカクテル一杯きりでも、顔が真っ赤になってしまうくらいだ。

「俺と飲むのが嫌か？」
冗談とも本気とも取れるさらっとした口調で、
ミルワード公爵が言う。

ああ、これが本来のダフネとして誘われているのだったらいいのに。
ちらりと胸のどこかでそんな事を思ってしまう自分を、
胸の中で叱咤する。
今、私はカルロスなのよ！

そして、これは仕事の延長の誘い。
上司の命令に秘書という立場のカルロスが逆らえるはずもない。

「もちろん、喜んでご相伴に預かります」
男らしい口調で言ってみたものの、
ダフネは、男らしい強い酒はまるきり飲めないのだ。

骨と皮みたいに細いとはいえ、１８０センチのカルロスの姿で、弱いカクテルなどを頼んだら、やっぱりまずいだろうか。

大きな不安が、ダフネの胸の中に沸きつつあった。

社交クラブ

定時の時間になると、
ミルワード公爵はダフネに帰り支度をするように言った。
言われるままに、ダフネはデスクの上を片付けて、
どうしたら酒をあまり飲まずにすむだろうかと、ぐるぐると考えていた。
せめて酔っても、吐いたり寝てしまったりという醜態は、
絶対に避けたい。
女だという事がばれてはまずいのだから、隙を作るわけにいかないのだ。

せっかく、今日の仕事で出会ったころの悪印象を、
少し挽回出来たところなのだし。

「何をぶつぶつ言っている?」
ふと、気がつくとミルワード公爵がダフネのデスクの前に立っていた。
もう帰り支度を終えたのか、黒いロングコートを着ている。

それは、他の人が着たら気障に見えるようなデザインのコートだったけれど、
すらりと背が高く均整の取れたスタイルをしていて、
少しウェーブのかかった短い髪、
髪と同じ色の、意思の強そうな瞳をしているミルワード公爵が着ると、
かえって気品が増して漂うのだった。

「あ、いえ。すぐに用意します」
ダフネが慌ててデスクの上の書類をしまい、通勤のためのカバンを手にすると、
ミルワード公爵は小さく頷いて、部屋の外へと歩き出した。
ダフネは慌てていたもので、またも２０センチもかかとの高い木靴のせいで、
思い切りデスクの側で転んでしまう。
けれど、今回は執務室のふかふかの絨毯のせいで、転んだ音もしなかったし、
丁度デスクの陰でもあったし、
ミルワード公爵も気がつかないようだった。

もうこの木靴を履いて転んだのは何回目だろう。
ダフネの細い足のすねには、たくさんの痣が出来ていた。
そしてまた今、新しい所を打った激痛にしばし息をつくことも出来なかったけれど、
ダフネは自分のおっちょこちょいを見つからずに済んだ事に、
ほーーーっと大きく息をついて何とか起き上がり、
ミルワード公爵の後を追った。

もうこれ以上は、ヘマ出来ない。
頑張るのよ、ダフネ。

自分を励まして、ダフネは公爵の後を追った。

運転手つきの黒塗りの車が建物の入り口につけていて、
ダフネが建物を出た時には、
すでに後部座席にミルワード公爵が乗って待っていた。

一礼をし、開いていた後部座席のドアを閉めて、
ダフネは運転手の隣の助手席に乗り込む。

「何で、こちらに乗らない？」
ミルワード公爵の不思議そうな言葉に、
「私は使用人ですので、こちらに座るのが妥当かと」
ダフネは言うと、運転手に車を出すように頼んだ。

実は、座ると制服のズボンの裾が少し上がるのだ。
木靴の厚いかかとがちらりと見える。
気がつきはしないとは思うけれど、
２８歳という若さで父親から継いだ海運業をもとの数倍に成長させ、
その実力を買われて、国の通商航海部門の顧問を依頼されたという、
切れ者のミルワード公爵は油断がならない。

「何故、今日カルロス、君を酒を飲みに誘ったと思う」
ミルワード公爵の言葉に、ダフネは黙っていた。
「そういう君の堅苦しい壁を壊すためだ」
「はぁ」
ダフネは小さく返事をしながらも、
不安な気持ちで一杯になる。

最初の頃のまま、
ろくに自分を見ないでくれていたなら、どんなに良かっただろう。

でも、結局、あのまま顔も見てもらえないくらい嫌われていたとしたら、
首になる日も近かったろう。
やはり、正面からぶつかりつつも正体がばれないようにして、

その上、好かれるように上手くやり過ごさなければ、
カルロスに仕事を引き継げないのだ。

思っただけで、前途多難だ。
勤務時間だけならまだしも、
こうしてプライベートまでつき合わされるのは、
今夜だけならいいんだけれど。
ダフネは青ざめていた。

車が目的の店の前に着くと、
ミルワード公爵は車の外に出る。
ダフネも気後れしながらも、車から降りてミルワード公爵の後を追った。

目的の店は、繁華街というよりは、
少し街外れにあり、緑多い庭園の中にあった。
店というよりは、茶色を軸にしたシックで豪華な建物で、
どこかのお金持ちの大きな別荘という印象だった。

「ここは会員制の社交クラブだ。
何なら、君に誰か良家の子女を紹介してやろうか」
店に向かいながら、面白そうにミルワード公爵がダフネを振り返って言う。
「とんでもない！私は下町の庶民ですから、そのような良家の子女など紹介されても、
私の身分に不釣合いです。単に相手のご婦人にご迷惑をかけるだ

けです、公爵！」
早口で焦って言うダフネをちらりと見て、公爵は続ける。
「そうか、ならばそういう庶民出の若い苦労人の高官が好物の、
金持ちの未亡人もいる。楽しい時間が持てるだろう、君の若さだったらなおのこと」
小さく笑う公爵に、ダフネは驚いて足を止めた。

ミルワード公爵は、
一体、何をしようとしているのだろう、

まさか、新しく来た自分の個人秘書の、
男にしてはひ弱なダフネ演じる庶民のカルロスに、
金持ちの女を紹介しようとしているのか？
実際のカルロスに対してならいざ知らず、
それが例え、酒の席の戯れだとしても、
ダフネが女だとばれる可能性は大きくなる。
女である自分に、女性を紹介されてどうしろと？

「ミルワード公爵、私は新入りの私の緊張を解こうとして、
お食事に誘って頂けたのかと思って参りましたが、
もし女性を紹介されるというような、お戯れが過ぎるようでしたら、
私の不器用な器では対処出来かねます。
今日はここでお暇願うのを、お許し願えませんでしょうか」
ダフネは自分の顔から血の気が引くのを感じた。

もし、公爵の申し出を断って、
職を失ったらどうしようとも思う。
でも、女性を紹介されると分かって無理やり食事をして、
双子の妹が男装をして、ミルワード公爵を騙していたとわかるより

はマシだ。

すると、ミルワード公爵は大声で笑った。

「カルロス、お前、面白いな」

急に、ミルワード公爵の口調が砕けた様子になる。

「分かった、今夜は女抜きで男同士で飲むことにしよう。
しかし、女たちが俺たちに勝手に寄ってくるのは、俺のせいじゃないからな」

ミルワード公爵がダフネの肩に手を置き、一瞬強く肩をつかみ、次の瞬間は離すと、ついてくるように目で言う。

肩をつかまれて、心臓が飛び跳ねていたダフネの足は重かった。
さっき転んだ時に新しく出来た痣も痛かったし、
何より、不安感が増していたのだ。

何故か、最初の冷たい印象と、
今のミルワード公爵は少し違ってきているような気がする。
一体、どういう人なんだろう、ミルワード公爵というのは。

ドアの前で振り返られて、
何をしているのかと見られ、
渋々ダフネはミルワード公爵を追い、建物の中に入っていったのだった。

分かりきっていること

社交クラブの扉を開けて待つドアボーイに声をかけられ、
ミルワード公爵は頷いて見せている。
どうやら、その雰囲気からしてみてここの常連のようだ。

ダフネは過ぎる人々に向けて頭を下げながら、
気後れして、うつむき加減に公爵の後を追った。

赤い絨毯を敷き詰めた広い廊下には、
見るからに高級で上品な調度品が両脇に置かれていて、
壁に飾られている花の花瓶や絵画などが、
天井に下がる眩しいシャンデリアに照らされていた。

すれ違う上等なスーツやドレスに身を包んだ上流階級の人々が、
ミルワード公爵を見つけると、交互に声をかけてくる。
そして、その背中に隠れるようにしている、
自信なさげについてくる青い秘書の制服姿のダフネを見つけると、
どの人も好奇心の目で、じろじろとダフネを見るのだった。

「新しい秘書です」
ある一人のブロンドの貴婦人が、あまりにダフネを見入っているのに、
ミルワード公爵は声をかけた。
「そう、新しい秘書の方ですか」
年の頃はダフネの母親くらいだろうか。
中年の、でも品のある美しい婦人だった。
「もし、お嫌でなければ、ご一緒に飲み物でもいかが？」

上目遣いにじっくりダフネを見たあと、その婦人はミルワード公爵を見て言う。

ダフネの心臓がドキッと鳴った。
一緒なんて出来るわけがない。

ダフネは思いついて、急いで口を開く。
「ミルワード公爵、私は今日はこちらで失礼させて頂きますので、どうか、このご婦人とご一緒にいらしてください」

すると、なんと驚いたことに、
その婦人がダフネのあごに指をかけて自分に向かせた。
木靴のおかげで、ダフネはその婦人よりかなり背が高いにも関わらず。

中年だけれど、化粧も映えて美しい顔でダフネを見上げて、
その婦人は首を小さく傾げた。

「もう少し、その場の空気というものを読む勉強を、
ミルワード公爵から教わることね。
そうすれば、あなたもう少し垢抜けるわよ」
そして、ふっと小さく微笑むと、その婦人はダフネのあごから手をどけて、
ダフネの脇を通り過ぎて歩き去っていった。

呆気にとられて、ダフネがその婦人の後姿を見ていると、
ミルワード公爵がぷっと噴出して笑った。

ミルワード公爵が笑ったのにダフネはまた驚いて、

今度はミルワード公爵を振り返って見る。

「お前は、童貞か？」

「は？」

素っ頓狂な声で答えるダフネの肩に、

ミルワード公爵は笑ったまま手を置くと、

「まあ、いい。行くぞ」

席に案内しようと側に寄ってきたバーテンダーに目配せをした。

「しかし、どんだけ華奢なんだ？

男なら、少し鍛えろ。こんな貧弱な体じゃ、あんなおばさんしか、

女が寄ってこないぞ？」

ダフネの肩を触って、ミルワード公爵が言う。

「女性には、興味がありませんから」

ダフネは口早に言いながらも、

公爵に触られている指先から、ぞくりと背中に電流が走った気がして、

ダフネはミルワード公爵の手から逃れた。

ダフネのその仕草に不思議そうな顔をして見ている公爵から、

さらに二、三歩逃げるようにして下がって、

「席に案内して下さるようです」

ダフネはバーテンダーが待っているのを、慌てた口調で告げた。

「ああ」

ダフネの様子を見て棒読みに答えると、

ミルワード公爵はやはり不思議そうにしたまま、

バーテンダーの後を歩き始めた。

ダフネは俯いて、火照る頬をさり気なく片手で押さえる。

一体、この胸の高鳴りは何なのだろう。

しかし、ど、童貞かですって！
どんな会話？？
男装していると知らないとはいえ、
恋愛経験もない乙女に、なんていう質問なのかしら。

ダフネはさっきの会話を思い出して、
ますます赤面するのだった。

通された席は、レストランの方ではなく、
バーラウンジの席だった。

シックな臙脂（えんじ）の絨毯の敷き詰められた広いフロアに、
すわり心地の良いソファと、美しいクリスタルのテーブルが置かれている席が、
多数にある。
テーブルには美しい花が生けられ、
ラウンジの隅には生のバンドが静かな音楽を奏でていた。

全体の照明は薄暗く落とされていて、
あちらこちらでは、お互いの顔を寄せ合って歓談している先客たちが多数いる。

同性の部下の秘書を連れてくるというよりは、
やはり恋人同士などの方が似合いそうなロマンティックな雰囲気だった。

ミルワード公爵とテーブルを挟んで席に着くと、
あちらこちらから、無言だけれど、
はっきりと意思を持っている視線が飛んでくるのが分かる。

ダフネは小さく眉をしかめて、ますます俯き加減になった。

ミルワード公爵と一緒にいると、どれだけ注目をされるんだろう。
特に、女性の視線が痛かった。

「カルロス、何を飲む」
ミルワード公爵がメニューを差し出して、ダフネに聞く。
「何か、あまり強くないお酒を」
ダフネは周りの視線を気にして、俯き加減のまま小さく言った。

「ふむ」
あからさまに納得していない口調で、公爵はあごに手を当ててダフネを見る。
そして、そのまま脇に控えていたバーテンダーに、
「スコッチを。ブレンデッド、ストレートで」
バーテンを見ずにオーダーをした。

酒を飲まないダフネでも、
スコッチのストレートという言葉は分かる。

どうしよう、飲めない！
ダフネは焦った。

「ひとつ、お前に聞きたいことがあった」
ミルワード公爵の言葉に、ダフネは顔を上げる。

「はい」
一体、なんだろうと思って、ダフネはミルワード公爵を見る。

「ドーチェランの言葉を、どこでお前は学んだ?」
「ドーチェラン……」
ダフネが分からずにいると、公爵が続けた。
「五人同点者に向けた、追加試験に出た国の言葉だ。
ドーチェランとは、まだこの国とは正式には国交のない国だ。
絶対に誰も答えが分かる者などいないだろうと思っていたら、
お前はドーチェランの特産物を当てた。ペラーという言葉を理解していた。
一体、どこでその言葉を学んだんだ」
真っ直ぐに視線を向けて、ミルワード公爵が聞いてくる。
「ああ、それは」
ダフネは思わずにっこりと笑って、
「港町の孤児院に、他国からの難破船から助けられた子供を預かっているんですが、
その子は今まで聞いたこともない言葉を話すので、
どこの国から来たのか分からなかったのです。
実は、ペラーというのはその子をお世話をしていて教わった言葉なのです」
言うと、自分の胸元からナイケに貰ったペンダントを取り出してみせる。

「この美しい黒い玉が、ペラーだとその子は教えてくれていたので、
答えが分かったのです。

きっとナイケはドーチェランという国の国民なのでしょうね。
どこの国か分かって本当に良かった。
そのうち、国に帰して上げられるかもしれないですから」
ダフネは思わず長々と喋ってしまって、ハッと我に返った。

じっとミルワード公爵が自分を見ている。
そして、ダフネの持っているネックレスに手を伸ばすと、
ペラーを指にとって眺めた。
「確かに、同じものだな。しかし、カルロス、君は港町の孤児院などに、
出入りしているのか？」

「い、妹がです！」
慌てて、ダフネは付け足す。
「妹？」
「実は、自分には妹がいまして、
妹が施設で働いているものですから」

ダフネがそこまで言った時、
ダフネの後ろの方から声が聞こえて、ダフネは振り返ることも出来ず、
そのまま固まった。

「ミルワード公爵、ずいぶんご無沙汰ね。
連絡をくれるって言ったきり、もう一ヶ月も経つわ。
あんなに熱く抱きしめてくれた夜は、
全て私の独りよがりの妄想だったとでも言うのかしら？」

小さく震えているけれど、
聞くからに相当な怒りを孕んでいるのが分かる若い女性の声が、

ダフネの直ぐ頭越しに聞こえてくる。

ええええ、また？

ちらりと目の端で、ほんの少し振り返ると、
緑色のレース使いの美しいドレスが目に入る。

ダフネは青ざめて、でも呆れ気味に、
目の前の美しいミルワード公爵を見た。

ミルワード公爵は上目遣いで緑色のドレスの女性を見ると、
小さくため息をついて、立ち上がった。
「カルロス、少し失礼する」

「どうぞ、お気遣いなく」
ダフネははっきりと答えた。

緑のドレスを着ている、黒髪の美しい若い女性の腰に手を回して、
ミルワード公爵はラウンジの外に出て行く。

ちらりと見えた黒髪の女性の横顔は、
気が強そうだったものの、育ちの良さそうな美女だった。

一体、どれだけプレーボーイなんだろう。

ダフネは一つ息を吐くと、

ラウンジから消えていった二人の方を見つめた。

バーテンが酒を運んでくる。

それは琥珀色をした液体の入った小さいグラスで、
天井のシャンデリアの光を反射して、きらきらと輝いていた。

一人でテーブルにいて、手持ち無沙汰だったダフネは、
気まぐれにその小さいグラスを手にとって見る。
でも匂いだけでもツンと来るので、到底飲むことは出来ないのだった。

……熱く抱きしめてくれた夜。

緑の女性の言葉が蘇る。

ミルワード公爵は一体、
女性と、どんな熱い抱擁をするのだろう。
その広く形のいい唇は、
どんな風に女性の唇に触れるのだろう。

そんな事を考えると、ぼーっと頬が熱くなるけれど、
でも同時に、胸が痛むのをダフネは感じた。

自分はミルワード公爵にとっては、

貧弱男子秘書の、カルロス以外の何者でもないのだ。

一人の女として見て貰える事は、決してない。
分かり切っていることなのに。

ダフネは目の前の小さいグラスにもう一度手を伸ばすと、
思い切って一口飲み込んだのだった。

不本意な覗き見

短いグラスに入れられた琥珀色の液体は、
ダフネの喉元を通るときに、焼け付くような熱を持った。
驚いて、ダフネは自分の首を押さえる。

焼ける火箸のような感覚は、喉元を過ぎると胸を通り胃に落ちて、
やがてじんわりと穏やかな温かさに変わった。

じっと構えていると、それ以上の体の異変は起きないので、
ダフネはほっとして息をつく。

けれど、ほんのりと体が熱くなって、気持ちが緩むのが分かった。
ダフネは口元に小さく笑みを浮かべて、
しばらく生楽団の演奏に、耳を傾けていた。

そうやってしばらく待っても、
一向にミルワード公爵が戻ってくる気配が無い。

「戻って来ないなら来ないで、
ここから帰らせてくれればいいのに」

結局、新人の秘書よりも、
公爵は女性を選んだのだという、
少し寂しい気持ちが沸いてくるのを押し殺して、
ダフネは呟いた。

化粧室に行こうと思い立ち、
席の近くを通ったバーテンダーに、その場所を聞く。
ダフネは席を立って、教わった方向に歩いていった。

ラウンジを出ると、化粧室へと続く廊下は静かで、
他に誰もいない。

目指すドアに「ジェントルマン」の金文字の表示を見つけて、
ダフネはあんぐりと口を開けてしまった。

そうだった、今は男の姿なのだ。
「どうしよう、この場合は入っていいのかしら、
　でも、中に人がいたらやだわ」
ブツブツ呟いてドアの前で躊躇していると、ふと声が聞こえた気がして、
ダフネは耳を澄ました。

その声はずっと廊下の先、
奥まった死角になっている場所から聞こえてくるようだ。
別に盗み聞きする気はなかったけれど、
「フレージャー」
という女性が呼ぶ名が聞こえて、ダフネは固まった。

ミルワード公爵？

しばらく迷ったものの、どうしても好奇心に勝てなくて、

ダフネはそろそろと声のする方へと歩いて行った。

そっとそっと絨毯の廊下を歩いて行く。

そして、曲がり角ぎりぎりまで来ると、
目だけでその声の方を覗き見た。

さっきの緑色のドレスを着ている黒髪の気が強そうな美女が、
背の高いそのジャケットの胸にすがるようにして、ミルワード公爵
を見上げていた。

「あなたに結婚をしたい女性が出来たなんて、聞いていないわ！」
悔しそうな声で、その女性が言う。
「シルヴィア、俺たちはもう別れたんだ。お互いに納得済みだろう
？」
「私の気が変わったように、あなたの気も変わるかもしれないと思
ったからよ」
シルヴィアと呼ばれた女性が、震える声で言った。

ミルワード公爵に、結婚をしたい女性が出来たですって？
さっき、執務室に別の女の人が押しかけてきた時は、
私にはしばらく仕事に専念するって言ってなかったかしら？

ダフネが今になってアルコールが回ってきた頭で、ぼーっと考えて
いると、

シルヴィアが口を開いた。

「どうしても、気が変わらないのね」
じっとミルワード公爵を見上げて、切ない声で言う。
ミルワード公爵は綺麗なその顔でただ黙って、
シルヴィアを見ていた。

しばらくじっと黙って、お互いを見ている。
盗み見ているダフネの方が、ドキドキしてしまった。

「それなら、フレージャー、最後に口づけをして。それで諦めるわ」
小さくため息をついて、シルヴィアが言う。

ダフネの心臓がドキリと大きく音を立てた。

「わかった」
ミルワード公爵がかすれた声で答える。

黒い髪のうなじに、ミルワード公爵が手を差し入れると、
シルヴィアは両手を伸ばしてミルワード公爵の首に回した。
二人の顔が近づき、重なり合う。
それは見ている者をも引き込むような、情熱的な口づけだった。

胸の奥でずきりと痛みが走り、
ダフネは息を飲んだ。

この痛みは一体何なのだろう。

後ずさった途端に、
ダフネは木靴のせいで躓いて転んでしまう。

大きな音は立たなかったものの、
シルヴィアの首を抱いてこちらを向いていたミルワード公爵が気配に気がついて、
ぱっと目を開けた。

後姿のシルヴィア越しに、
ミルワード公爵とダフネの目が合う。

ダフネは慌てて立ち上がると、
詫びるように小さくお辞儀をして、その場を逃げた。

アルコールのせいなのか、それとも今見た情熱的な口づけのせいなのか、
ダフネの鼓動は高鳴るばかりだった。

それよりも何よりも、
盗み見をしていた自分を、ミルワード公爵は一体どう思っただろうか。
恥ずかしくて、情けなくて、消え入りたいようだった。

とにかく、ミルワード公爵が戻って来るまでに、
気の迷いで口にしてしまった強い酒の酔いを醒まして、
冷静にならなければ。
そして、ちゃんと釈明しなければ仕事の存続が危ない。

化粧室に来たら、声が聞こえたので近寄っただけだと。
本当は覗き見をするつもりは無かったのだと、
きちんと説明をしなければ。

「あー、くらくらする」

ダフネはラウンジに戻ると、カウンターに歩いて行って、
何か酔いを醒ますための飲み物を飲もうと思った。

見ると、カウンターでバーテンダーが大きいデカンタで、
オレンジジュースをグラスに注いでいるのが目に入る。

「すみません、私にも下さい」
ダフネが言うと、バーテンダーは愛想良く返事をして、
細長いグラスにオレンジ色の中身を注いでダフネに渡した。

ダフネはそれを一気に飲み干す。
冷たいオレンジジュースがダフネの胃の中に落ちていく。
ダフネはもう一杯頼んだ。
それも一気に飲み干す。

「カルロス」
ミルワード公爵の声が聞こえて、
ダフネは振り返った。

シルヴィア嬢の緑のドレスがラウンジの出口に向かっているのが見える。
そして、ミルワード公爵の仕立てのいい紺色のジャケットが、どんどんこちらに近づいて来るのが見えた。

そして、冷たいオレンジジュースを飲んだはずのダフネの胃が、次の瞬間、カーーッと燃えるように熱くなるのをダフネは感じた。

「あれ?どうしたのかしら」
ダフネは呟く。
「オレンジジュースだったのに」

どんどん近づいてくるミルワード公爵の姿が、ダフネにぼやけて見える。

次の瞬間、ダフネの体がその場に崩れ落ちた。

「カルロス!」
ミルワード公爵が驚いて駆け寄り、ダフネの体を抱える。

「…私、決して覗き見をしようとしていたわけじゃ…」
呟くように言いながら、ダフネは真っ赤な顔をして目を閉じた。

様子を見ていたカウンターの中のバーテンダーが、見るに見かねてミルワード公爵に声をかける。
「こちらのお客様は、スクリュードライバーを一息に二杯飲まれましたけれど、
それだけです」

「酔いつぶれるような酒量じゃないな」
ミルワード公爵は頷くと、バーテンダーに行ってもいいと合図した。

「一体、どういう事なんだ？」
ミルワード公爵は呆れたように呟いて、ダフネの体を抱えあげようとして、
あまりにその軽さに首を傾げた。
とても、１８０センチの身長がある男の重さとは思えない。

ミルワード公爵は体の向きを変えると、ダフネの足の下に手をいれ、
腕の下に手を入れて、まるで子供か女性を抱えるように、
男装をしているダフネを抱えあげた。
難無く、ひょいとその体は持ち上がった。

改めてミルワード公爵はダフネの顔をまじまじと見た。

赤く高潮しているけれど、決め細やかな肌の頬、
少し開いたままの唇、
閉じられた瞳の長いまつげ。
良く見れば顔の造作も体同様、華奢な造りだ。
見れば見るほど、男には見えない。

「一体何だ、これは」
戸惑った表情のまま、ミルワード公爵は店に車を呼ばせると、
取りあえず、ダフネを抱えて店を出たのだった。

犯罪者？

黒塗りの車は、
ミルワード公爵が一人で住まう屋敷に向かっていた。

後部座席に座るミルワード公爵にカルロスは体全体で寄りかかり、
アルコールのせいで真っ赤になっている顔で、
スースーと寝息を立てている。

ミルワード公爵は訝しげに、その寝顔を眺めていた。
全身で寄りかかられても、まるでその体は羽のように軽かった。
いくらなんでも、軽すぎる。
痩せすぎているにも程がある。

しかし、あの程度の酒で酩酊するとは。
体調が悪かったのか、酒にめっぽう弱いのか。
けれど、確か身上書では酒が好きだと書いてあったような。

ミルワード公爵は一人、戸惑って心の中で呟いていた。

それにしても、男にしておくにはもったいないような、
愛らしい顔だ。

改めてカルロスの顔を見ると、

その長いまつげ、なめらかな肌、柔らかな唇に、
ミルワード公爵の視線は吸いつけられてしまう。

「女に嫌気が差したからといって、
　男というわけではあるまい？」
小さく声に出して自問して、
ミルワード公爵は苦笑する。
「まさか」
自答した時に、カルロスが寝返りをうって、
その黒髪がミルワード公爵の上着のボタンにひっかかった。

カルロスの頭の上で髪の毛がずれるような感覚があり、
ミルワード公爵は目を見開く。

寝返りを打ったまま、体勢が崩れ落ちたカルロスの頭から、
ごっそりと黒い髪が離れ、ミルワード公爵の上着のボタンにからまったまま残った。

そして、ミルワード公爵の膝の上で崩れるように寝続けているカルロス、
もとい、カルロスと自称していた人間のもとの髪の色、
美しい透き通るようなプラチナブロンドが現れた。
そのプラチナブロンドの長い髪は、かつらを被るためなのか、
きっちりと頭の上でまとめられている。

ミルワード公爵は、しばし絶句して、
自分の膝の上に眠るカルロスもどきを眺めた。

黒いかつらが取れてみれば、
自分が見とれてしまったのもしょうがないほどの、
愛らしい華奢な若い女の顔が現れたのだ。

ミルワード公爵は、カルロスもどきの足元に手をやり、
秘書の制服のズボンのすそをそっとめくる。
足元には、高さ２０センチはあろうと思われる、野暮ったい木靴を
履いていて、
どうやらこれで身長の高さを偽っていたのだろうと、ミルワード公
爵は悟った。

木靴の上に見える細い足には、多数の痣があるのが見える。
ミルワード公爵は裾から手を離すと、呟いた。
「どうやら、良く転ぶわけだ。こんな物を履いていたとは。
　痣だらけじゃないか」
ミルワード公爵は小さく首を振って呟く。
そして、ジャケットのボタンから黒い髪のカツラを外しつつ、
少し厳しい表情になって考え込んだ。

男の格好をしてまでカルロスになりすました、
この娘の目的は一体何なのだろう。
このプラチナブロンドの女は、一体何者なのだ?

やがて、車はミルワード公爵が一人で住まう豪華な屋敷にたどり着
き、
運転手がドアを開ける。

ミルワード公爵はまず自分が先に降りると、
偽のカルロスの体を抱き起こして抱き上げた。

「ご苦労だった、今夜はここでいい」

ミルワード公爵が運転手に言うと、
運転手はミルワード公爵が胸に抱えている、
酩酊した黒い髪の男の秘書の青い制服の中身が、
いつの間にか、プラチナブロンドの娘に代わっているのを見て驚いていた。
ミルワード公爵はちらりと横目で運転手を見たものの、
構わずに、屋敷の玄関へと向かったのだった。

ダフネは強烈な頭痛で目が覚めた。
こめかみに何かが突き刺さるような痛み。

「いたたたた」
両手で頭を押さえて、ダフネは目を開けた。
目は腫れぼったく、口は渇いている。
「お水、飲みたい」
ダフネは呟いて、唸りながら体を起こすと、
自分がまだ秘書の青い制服のままなのに気がついた。
「あら、昨夜はこのまま寝ちゃった」
のかしら、と続けようとして、
ダフネは今自分がいる場所にまるきり見覚えが無いのに気がつき、

慌てて起き上がると、辺りを見回した。

濃いグレーの上等の絨毯の敷き詰められた広い部屋。
天井は高く、眩しいシャンデリアが、
部屋の中を柔らかな黄色い光で満たしている。

大きな窓には、重厚で瀟洒なカーテンが下がり、
少し開いている隙間から、外の夜の黒い空が覗いている。

ダフネが寝ていたのは、白くて大きく、とても手触りの良い皮のソファで、
黒い大理石のテーブルを挟んだ、壁際に見えるステレオからは、
低く静かな弦楽器のクラシックの音楽が流れていた。

首を回して部屋の違う方を見やると、
シンプルだけれど、天蓋つきの大きなベッドも見える。

明らかに、港町の貧しい自分の実家の、
貸家の一室ではないのは明白だった。

「…ここはどこ?」

不安げにダフネが呟くと、
ふと部屋に続くドアのひとつが開いたのに気がついて、

はっと振り返った。

濡れた髪をタオルで拭きつつ、
ふかふかの白いバスローブを羽織っているミルワード公爵が、
シャワーを浴びて部屋に戻ってきたところだった。

バスローブは、シャワーを浴びた後、
ただ羽織っているだけなのか、
その胸ははだけていて、濡れそぼった肌が大きく露出していた。
服を着ていた時から、ダフネが想像していた通り、
かなり鍛えられている逞しい引き締まった胸の筋肉が、露(あらわ)になっている。

「ミルワード公爵！」
ダフネは目をそらしたものの、驚いて声を上げる。
そして、自分の様子がいつもと違うのに感づいて、
急いで自分の姿を見下ろした。

青い秘書の制服はちゃんと着ている。
けれど、自分の頭に手をやって、ダフネは小さい悲鳴を上げた。

「君の探しているのは、これかな？」
ミルワード公爵は髪の毛を拭き終わると、
つかつかと歩いていって壁際の棚から何かを取り出して来ると、
掴んだものをダフネの方に放り出す。
それは、カルロスの髪の色を真似るためのあのカツラだった。

床に落ちた黒いカツラを見て、ダフネは固まった。

「聞きたい事は山ほどあるが」
ミルワード公爵はダフネの元へと歩いていくと、
はだけたバスローブの胸の前で腕を組み、冷静な視線でダフネを見下ろす。
「君が一体どこの誰なのか、そこから始める事にしようか」

男装がばれてしまった。

ダフネは俯いて涙を浮かべる。

カルロス、身代わりになっていたのがばれてしまったわ。

ぽとりとダフネの目から涙が落ちる。

「黙っていては、分からないだろう？
それとも何も聞かずに、詐欺罪で君を国に訴えようか。
もちろん、そうなると無条件にカルロスの高官採用も白紙になるな。
君のような、犯罪者と関係があるのだろうからな」

ミルワード公爵の感情のない冷静な声に深く傷つきながらも、

ダフネは気持ちを決めると、すがるようにミルワード公爵を見上げたのだった。

「ミルワード公爵、お願いです。
私が勝手に双子の兄のカルロスの怪我が治る間、
身代わりになると言い出したのです。
カルロスに罪はありません。どうか罰するなら、私だけを罰して下さい」

ぽろりと涙を流して言うダフネに、
ミルワード公爵は威圧するように胸の前で組んでいた腕を、
少し緩めて続ける。

「双子の兄……。
しかし、何故、女の君が双子の兄の代わりなど？
男と女の体の差など、どう変装しようがごまかせるものではあるまい。
いつか露見するようなことを、
わざわざ危険を犯してまでする意味があるのか？」

ダフネは涙の浮かんだ目でミルワード公爵を見て、
その少し和らいだ口調にほんの少しの希望を抱く。

「ミルワード公爵が自分の側近の高官に望むことの条件の中に、
健康で頑強な肉体の持ち主という項目があると聞いて、
どんなに優秀でも、
採用試験の間に足を骨折などするような者は不採用になるだろうと、
兄のカルロスに聞いたものですから」

「それは確かにその通りだ。この国にはいくらでも優秀な者はいる。
大事な時に怪我をするような者は、
採用から外す事を考えるのは当たり前の事だ」

「兄は、カルロスの事故はカルロスには全く責任の無いものなんです！」

「事故は事故、怪我は怪我だ。運の悪さも実力の内だろう？」

すらりと高い背、
無造作に羽織っているはだけたバスローブから見える逞しい胸、
まるで映画のワンシーンの俳優のように美しいけれど、
ダフネを見ているミルワード公爵のその表情は相変わらず動きが無い。
整った美しい顔なだけに、ダフネは余計に冷たさを感じていた。

「兄の仕事がなくなると、両親が路頭に迷うものですから。
今の借家をもうすぐ出て行かなければならないのです。だから」

どのように言い訳をしようが、ミルワード公爵にとっては、
政府の高官といえども、カルロスなど単なる側近の使用人の一人。
替えは捨てるほどいるのだろう。

ダフネは自分の無力さを感じて、
言葉を続ける力もなくなってしまった。

ふと、ミルワード公爵がダフネの方に、
つかつかと歩み寄ってくる。

「いつから、入れ替わっていた？」
俯くダフネの顔に手を当て、自分の方に向ける。
ダフネは驚いて、涙の浮いた目でミルワード公爵を見上げた。

「高官の最終試験からです」
「ドーチェランのペラーの試験を受かったのは、君か」
「はい」
ダフネは答えながらも、あまりに強いミルワード公爵の視線に目を伏せる。

ふと、ミルワード公爵が、
頭の上にまとめて束ねているダフネの髪に手を伸ばす。
そして、ピンを全て取って、ダフネの髪を解いた。

「あっ」
ダフネは驚いて、ミルワード公爵の手を止めようと両手を髪に伸ばすと、
公爵がダフネの両手を片手で掴んでそれを止める。
ぱさりとダフネの髪がほどけて、
美しいプラチナブロンドの髪が、肩と背中に流れた。

「ふむ、悪くない」
ミルワード公爵はダフネの両手を片方の手で掴んだまま、

ダフネを見下ろす。
両手を掴まれたまま、
ダフネは、今の公爵の言葉の意味を考えあぐねて、黙っていた。

「君の優秀さは認めよう。
だが、君の兄の本物の高官候補のカルロスは君ほど優秀なのか？」

手を離しながら、ミルワード公爵が言う。
言葉の意味を必死に租借して、ダフネは公爵を見た。
そして、公爵の今の言葉に、
交渉の余地があるニュアンスを見つけた気がして、
ダフネは意気込んだ。

「兄のカルロスは、私なんかよりもずっとずっと優秀で将来性のある人間です。
絶対に雇って損をすることはありません！本当です！」

ダフネの必死な言葉に、ミルワード公爵は首を小さく傾げる。

「確かに、庶民出身の高官候補の双子の妹が、
これだけ優秀ならば、あながち兄もそれ以上に優秀だという、
その言葉も嘘では無いだろう。
どっちみち、君たちの雇用をやめるのはいつでも出来る」

ミルワード公爵は黙り込んで、ダフネを見た。
ダフネも唇をかみ締めながら、
黙って公爵の視線から目を外さずにいる。

「良かろう、君たちの茶番に付き合ってやってもいいだろう」

ミルワード公爵は目を細めて、ダフネを見て言った。

「カルロスが怪我から治って、君が代わりを務めなくて良くなるまで、
男装して私の秘書に成りすますことに、黙って目をつぶってやってもいい。
骨折ならば、三ヶ月もあれば治るだろう？」

ミルワード公爵の意外な言葉に、ダフネは笑顔になりつつ大きく頷く。

「ただし、条件がある」

ミルワード公爵は、びしりとした声で続けて言った。
ダフネの浮かべかけた笑顔が、途中で固まる。

「仕事以外の時間、君が女性に戻る時間は、
カルロスの怪我が治るまで、結婚を前提にしている俺の恋人になってもらう。
もちろん、演技だがな。
つまり、昼間の勤務中はカルロスの身代わりを演じて、その他の時間は、
俺の恋人役を演じるというわけだ」

「どうして……」

ダフネは驚いて、思わず心の中の呟きが口に出てしまった。

あんなに恋人はたくさんいるのだから、

今更自分が演じる必要な無いだろうに。

「ここのところ少し、女性との気軽な関係に疲れてね。
どうも、こちらは気軽に思っていても、相手の方では最初はどうであれ、
どんな女性も最終的には、俺の気持ちとはすれ違うことに疲れてしまった。
もう今後は、本当に結婚をしたいと思う人が現れるまでは、
アバンチュールはやめることにしたんだ」

ミルワード公爵はダフネの座るソファの隣に、どさりと腰掛ける。
そして、ダフネの肩に手を回すと、
バスローブの胸がはだけているのも気にせず、ダフネに顔を寄せた。

「結婚を前提にしているという恋人がいれば、
面倒くさい者は、もう寄ってこないだろう？」

ぐっと近寄ってくるミルワード公爵の顔に、
ダフネは頬を赤らめて、目を伏せる。

ギリシャ彫刻のような美しい顔。
意思の強い茶色の瞳、すっと筋の通った高い鼻、
広くて形の良い唇が、ダフネの頬のすぐ側にある。
その吐息を首に感じる程の近さだった。

「君の、名前は？」
耳元で、ミルワード公爵の低い甘い声が囁くように聞く。

「…ダフネ」
ダフネは首から背筋に向かって、ざわりと鳥肌が立つのを感じながら、
かすれる声で答えた。

「どうする？ダフネ。
俺の申し出を受け入れるか？
カルロスの怪我が治るまでの間、俺の恋人役をするという」

ミルワード公爵の恋人役。
ふと、ダフネは今夜バーラウンジの廊下で見た、
緑のドレスの女性とミルワード公爵の熱い口づけを思い出した。

別に願ったわけではないのに、
その緑色のドレスの女性が、
自分の姿に摩り替わっている妄想が頭に浮かんでしまう。

「ダフネ？」
もう一度、ミルワード公爵が訊いた。
もちろん、ダフネには選択の余地は無い。

「はい、公爵。分かりました」
ダフネはその妄想を追いやったものの、
頬を染めたまま、ミルワード公爵を上目遣いで見上げて言った。

公爵は、そんなダフネの表情を見て、
甘い囁きから一変して冷たく口を開いた。
「ただし、一つ条件がある」

ダフネは、まるで頬を叩かれたように目を見開いて、
ミルワード公爵を見る。

「決して、俺を好きになるな」

ミルワード公爵は真っ直ぐにダフネを見て、真顔で言った。
ダフネは小さく息を飲む。

「俺が君に、これからどう振舞おうが、
それは全て演技だ。それを忘れるな。
もし、君が俺に惚れたら、そこでこの交渉は終わりだ。
君の兄のカルロスは高官を首になる。
そうすれば、君の家族は路頭に迷うのだったな」

ダフネは言葉を失って、
ミルワード公爵をただ見ているだけだった。

「別にうぬぼれて言ってるわけじゃないが、
どうも、女というのは、
俺の顔と地位と体がどうしようもなく好きらしい。
上っ面の入れ物を愛する生き物なのだな。
俺は君が例外だとは決して思えない。
悪く思わないで欲しいが、俺の女性に対する価値観というのは、
そういうことだ」

ミルワード公爵は黙っているダフネを、じっと見ている。
しばらく無言で、お互いに敵意をはらむ様な強い視線で見つめあった後、
ダフネは震える声で口を開いた。

「ミルワード公爵、あなたは女性の誰かを愛したことは無いのですか？」
「無いね」
即答するミルワード公爵に、ダフネは青ざめて続ける。

「それでは、いつか愛する女(ひと)を見つけて、結婚して、
温かい家庭を築くというような夢は」
「いつか結婚はするだろうな。
人の上に立つ人間が一生独身というのは聞こえが悪い。
例え、失敗してもやってみましたという姿勢は大事だからな。
ただ、愛などというものがそれに絡んでくるとは思えないし、
第一、俺は愛などというものがどういうものなのかまるきり分からないし、
分かりたいとも思わない」

口の端に小さく笑みを浮かべるようにして答えるミルワード公爵に、
ダフネは小さく息を吐いた。
「お気の毒に」

ダフネのその言葉を聞いて、ミルワード公爵の表情が変わる。

「ダフネ、どういう意味だ」
冷静ながらも、今までにはなく感情を含んだ声だった。

「いえ、何でもありません。分かろうという気が無い方に、愛など、説明しても分かるものではありませんから」
ミルワード公爵が感情的になった分、ダフネは冷静になって言った。

お互いの顔が近い距離で、じっとお互いを見る。
今までに無い微妙な力のやり取りが、
二人の視線に生まれていた。

「私はミルワード公爵、あなたを好きになることは決してないですわ」
ダフネが断言するように言う。

「…よかろう」
ミルワード公爵は目を細めてダフネを見ながら頷いた。

「では、交渉は成立だ。
君は、これから昼間は俺の個人秘書のカルロスで、
それ以外の時間は、結婚を前提に付き合っている俺の恋人のダフネになる」

「分かりました、公爵」
ミルワード公爵の言葉に、ダフネが頷く。

次の瞬間、ミルワード公爵は、

ダフネのプラチナブロンドの髪に手を入れ抱き寄せた。
ダフネが息を飲む。

ミルワード公爵はダフネに口づけた。
いらつく気持ちをぶつけるような、荒々しい口づけだった。

ダフネは驚いてミルワード公爵の胸を押すものの、
力の強さには敵わない。
そして、これは交渉による恋人契約の一環なのだと思い返すと、
大人しくされるがままに体の力を抜いた。

ミルワード公爵の口づけは、
荒々しいものの、ダフネの胸の中に火を点すかのような、
不思議な情熱を孕んでいた。
気が遠くなるような、官能を体に呼び起こす。

そして、ミルワード公爵に関わった女性が、
最初は気軽な火遊びだと思っても、
最終的には全て公爵のとりこになるのは当たり前なのだと、
ダフネは悟った。

でも、私は決してミルワード公爵に心を奪われてはならない。
決して、好きになってはならないのよ。

ダフネは自分の心と体の反応に逆らうようにして、
必死に自分に言い聞かせていた。

長い口づけの後、
ミルワード公爵は、ダフネから顔を離した。
間近で見るダフネの表情は熱っぽく、瞳は潤んでいる。

どの女も一緒だ。
ミルワード公爵は心の中で冷静に呟いていた。

気のある素振りの口づけをすれば、
どんな女も自分に身を任せるのだ。

こんな関係のどこに、愛など見つかるというのだ。

「もう遅い、運転手に車で家まで送らせよう。
明日の仕事には遅れないように」

ミルワード公爵はダフネから離れると、
使用人を呼ぶベルを鳴らしたのだった。

サンドイッチ

ダフネの男装が、
ミルワード公爵に知れてしまった夜から、三日経った。

仕事以外のプライベートな時間を、
ミルワード公爵の恋人役を演じるという条件で、
カルロスが復帰するまでの期間、
ミルワード公爵は、ダフネの身代わりの変装を見逃すという約束を
したものの、
まるでそんな交渉など無かったかのように、
次の日からのミルワード公爵の態度も様子も、
何の変化も無かった。

ダフネは執務室の入り口近くの秘書のデスクに座り、
書類の束を見ている振りをして視線だけ上げると、
作り物の黒い前髪の間から、
そっとミルワード公爵の様子を盗み見る。

この間、飲みに誘ってくれた時は、
確かもう少し打ち解けていたはずだったのに、
今のミルワード公爵は、
試験の時の態度に似た、ダフネなど眼中に無いかのような、
冷たい態度に戻っている。

あの夜、恋人役は演じるけれど、
ミルワード公爵を好きにならないという条件を承諾したダフネを、
まるで試すように情熱的な口づけをされたけれど、
それ以来、あまりにミルワード公爵の様子に変化が無いため、
もしかしたら、あれはダフネの妄想だったのではないのかと、
疑ってしまうような、ミルワード公爵のつれなさだった。

もちろん、仕事が終わっても、
恋人役としてどこかへ出かけるという誘いも一切ない。
一体、あの交渉はなんだったのだろうと不思議に思ってしまうのだった。

「別に、私から恋人役をやらせてくれって言ったわけじゃあるまいし、
ミルワード公爵がそういう態度ならそういう態度で、
カルロスの仕事がなくなりさえしなきゃ、私はちっとも構わないんだから」

ダフネはミルワード公爵には聞こえないように、
ぶつぶつと小さく呟いて、
でも、どこかがっかりしている自分がいるのを見つけていた。

例え、嘘でもいいから、夢でもいいから、
ひと時、ミルワード公爵のような人の恋人になれたら、
どんなに素敵だろう。
それこそ、ロマンス小説の中の登場人物のようだ。

「カルロス、イリシャ国の貿易白書の概略は出来たのか」

ダフネの視線を感じたのか、ミルワード公爵が目を上げて言った。
見つめていたのをごまかすかのように、
カルロスの格好をしているダフネは慌てて立ち上がると、
まとめ上げた書類を手に持ち、ミルワード公爵のデスクへと歩いて行った。

書類を手渡しすると、ミルワード公爵は手持ちの書類と見合わせて、
また俯いて仕事に戻っていく。

「あの、ミルワード公爵」
ダフネは気後れしながらも、思い切って公爵に話しかけた。
ワンテンポ置いて、ミルワード公爵が口を開く。
「何だ」
「もう、お昼の時間を過ぎていますけれど、
少し休憩されたらどうですか？」
ダフネの言葉に、ミルワード公爵は書類からちらりと目を上げてダフネを見る。
「別に、俺は君に昼飯の時間まで仕事をしろとは言わない。
自己判断で適宜に休憩を取ったらいいだろう？」

ここ三日変わらぬ無愛想な言い方に、ダフネは小さく唇を尖らせる。
「私の事じゃなく、ミルワード公爵、ご自身の事を申し上げているのです。
ここ三日ほど見ていると、出かけられるなりして、
昼食を取られるのを見た事がありません。お体に毒です」
デスクの前に立ったまま、ミルワード公爵を見て言うダフネに、
公爵は小さくため息をついて言った。

「別に、俺は仙人じゃない。食事をしなければ生きていけない普通の人間だ。
必要だと思えば食事はする。君に世話をかけるつもりはない」
言うと、ミルワード公爵はまた手に持っている書類に目を戻した。

冷たい口調に、ダフネは気落ちする。
「別にそんなに冷たくしなくても、好きですなんて迫ったりしないのに」
口の中だけで呟いて、ダフネはくるりと自分の席に戻るとデスクの側に置いてある、
自分の通勤カバンを開けた。

かすかにダフネの呟きが聞こえたミルワード公爵は、
ダフネが席に戻るのを、ちらりと目を上げて見た。

ダフネはカバンの中から、
家から作ってきたサンドイッチの弁当の包みを取り出す。

もちろん、職場の敷地内には職員の為の食堂や、
一歩建物の外、町中に出れば、

食事の出来るありとあらゆるレストランなどの店があったけれど、
ダフネは節約のために、家から毎日弁当を作って持ってきていた。
大抵が、野菜や肉などを挟んだサンドイッチだったけれど、
自分の好みに作れるし、下手な外食よりも、
ずっと栄養のバランスは良かった。

特に今日作ってきた、
薄焼き卵とレタスときゅうりとトマト、
ソーセージを自家製の特製ドレッシングで挟んだサンドイッチは、
孤児院の子供たちが大好きなダフネスペシャルだった。

包みを手にして、ダフネはミルワード公爵のデスクに戻っていく。

「お口に合うかどうか分かりませんが、
栄養のバランスはばっちりだと思います。
サンドイッチなら、お忙しいミルワード公爵でも、
片手で召し上がれるでしょう？
サンドイッチ伯爵がカードゲーム中毒だったように、
ミルワード公爵もお仕事中毒らしいですから」
ダフネは冗談っぽく言うと、肩をすくめて笑って見せて、
その包みをミルワード公爵のデスクの上に置いた。
「もし、お気に召さない場合は、
どなたか他の方に差し上げて下さい」
ダフネはぺこりとお辞儀をして、ミルワード公爵のデスクの前から去る。

そして、自分のデスクに戻ると、
自分の分の包みを取り出して手に持ち、執務室から出て行った。
ここのところダフネは昼食を外に出て、

公園のベンチで食べていた。
気分転換に丁度いいのだ。

パタンと執務室の扉が閉まり、
部屋の中には、ミルワード公爵一人になる。

ミルワード公爵は目の前に置かれた包みをじっと見ていた。
手縫いのパッチーワークのキルトの布に包まれている。

それは、ミルワード公爵が良く頼む、
デリバリーの無機質な紙の包みとは大違いの、
何か温かい温度を、自ずから放っていた。

ミルワード公爵はまた手の書類に目を戻したけれど、
目の端にキルトの布が目に入って気になり、
どうしても集中出来ない。

自分的には納得出来ないものの、
どうしようもない衝動から、そのキルトの包みを手に取った。
見た目よりも、ずしりと重い。

包みを開くと、竹の皮に包まれた大きいサンドイッチが一つ現れた。

茶色い硬い耳もついているけれど、

パンの白い部分はふわふわとしていて、手に持つのが心もとないくらいだった。
中に挟んである具は、外に勢いよく飛び出るくらいにたくさん挟んである。

シャキッとした緑濃いレタス、
白っぽいスパイシーな香りのするドレッシングにまみれているきゅうりとトマト、
そして、その間には黄色の色が目に鮮やかな薄焼きの卵と、
分厚く切られたソーセージ。

「ナイフとフォークが要りそうな、サンドイッチだな」
そのボリュームに苦笑して、でもサンドイッチを両手で持ちながら、
ミルワード公爵は一口齧りとった。

スパイシーで甘酸っぱいドレッシングと、
野菜の歯ごたえ、卵焼きのほのかな甘さ、
ソーセージの旨味の油が口の中で混じりあい、
その素朴だけれど絶妙な味わいに、
ミルワード公爵は思わず小さく唸った。
そしてその時、ミルワード公爵は、
自分がどれだけ空腹だったのかを思い知ったのだった。

あっという間に、
相当なボリュームのサンドイッチを全て食べつくして、
ミルワード公爵は唖然とする。
そして、そんな自分に苦笑した。

デスクから立ち上がり、執務室の大きい窓へと歩いていく。
外を眺めると、王宮の敷地の向こうに、
噴水のある公園が見えた。

目を凝らすと、その公園のベンチの一つにカルロスの秘書の姿をしたダフネが、
同じサンドイッチを食べているのが見える。
遠目でも大きい口を開けてサンドイッチを齧っている様が見えるのに、
ミルワード公爵は苦笑して見ていた。

「今までには、いないタイプだな」
ミルワード公爵は一人で小さく呟く。

試しにあの夜、口づけをした時は、
ダフネはうっとりとして、熱っぽい視線を自分に向けていたから、
他のくだらない女たちと同じその反応を見て、
ミルワード公爵は結局、ダフネを敬遠することにしたのだった。
けれど、ダフネは今までの他の女達のように、
気取っていたり、体裁を気にしたり、
何かをねだったり、自分の要求だけを押し付けたりするようなタイプではないのを、
サンドイッチを食べてしまった今、自分で認めざる負えなかった。

自分のために、手作りで昼食を作ってくれた女など、
初めてだ。

ミルワード公爵は心の中で呟く。

そして、どんな今までの昼食よりも、
とても美味かった。

ミルワード公爵はデスクに戻ると、
手紙類の入っている箱に手を伸ばす。

そして、一枚の招待状を手に取った。
それは、大叔母の誕生日パーティーの招待状だった。

一族親類はもちろん、王族から、仕事上の取引先やら、
世の中を動かしている人間が、一堂を介して集まる、
魑魅魍魎のパーティだった。

このパーティで、
結婚を考えているというパートナーを連れて行けば、
今までのように女どもが寄ってくる事はなくなるだろう。

それはアバンチュールがなくなるということでもあったけれど、
ミルワード公爵は、ここのところアバンチュールには辟易していたので、
それもいいと思うのだった。

ダフネをこのパーティに連れて行けば、
自分の身辺は静かになるのは間違いない。

そして、カルロスが復帰してダフネと入れ替わり、
自分の側からダフネがいなくなれば、結婚を考えていた恋人と、
別れたことにすればいいのだ。
そうすれば、いつでもまたアバンチュールは向こうから訪れてくる。

ミルワード公爵は招待状の日時を確認すると、
知り合いの高級ブティックに電話をした。

役者か囚人

昼休みが終わる前に、ダフネは執務室に戻った。
デスクに戻ると、空になった自分の弁当の包みをカバンにしまい、
そっとミルワード公爵の方を見る。
すると、ダフネが部屋に戻って来た時から、
自分の事をじっと見つめていたらしいミルワード公爵と目が合って、
ダフネは驚いてびくりとしてしまった。

そんなダフネの様子にも、
別になんの反応も見せず、ミルワード公爵は淡々と続ける。

「今週末に、大叔母の誕生パーティに招待されている。
毎年、理由をつけては断って招待を受けた事は無かったのだが、
今年は行く事にした」
ミルワード公爵の言葉をすぐ飲み込めずに、ダフネは首を傾げる。
「…はい」
だから?というニュアンスも含めて、ダフネは相槌を打つ。

「わが一族が揃って顔を出す大きなパーティだ。
一族だけでなく、縁のある王族や他国の貴族なども集まる。
そこにダフネ、君を連れて行く」

しばらくぽかんとミルワード公爵の顔を見つめて、
ダフネはやはり、カルロスの身代わりを見逃す代わりに、
恋人役を演じるという、ミルワード公爵と交わした約束は本物だったのだと、

思い返した。

しばらく、ミルワード公爵は黙ってダフネの反応を見ている。
ダフネはそろそろと口を開いた。

「公爵の恋人役として？」

「そうだ」

真っ直ぐにダフネを見て、即答するミルワード公爵に、
ダフネはごくりと息を飲んだ。

「私なんかが、そのような上流階級の方々のパーティに、
公爵の恋人として伺うなんて、無謀な気がしますが」

自信の無い口調で、ダフネは続ける。

「どうして？」

ミルワード公爵は、
変わらぬ真っ直ぐな視線をダフネに向けたまま聞いた。

「私は下町の育ちの庶民ですし、マナーも知らなければ、
淑女のような優雅な所作も出来ません。
ミルワード公爵が恥をおかきになるだけだと思います」

「ならば、俺の恋人役を演じるという約束は、
一体、どこで果たしてくれるんだ？
パーティなどの外出を共にする恋人役なのでなければ、
ベッドの中での恋人役でもやってくれるというのか？」

ミルワード公爵がデスクを回って、こちらにやって来るのを見て、
ダフネは目を伏せた。

まさか冗談だろうとは思うけれど、
カルロスの身代わりを見逃すという条件を言われてしまえば、
ダフネに抵抗することなど出来ない。

カルロスが仕事を失い、両親が路頭に迷う事に比べたら、
ミルワード公爵と一晩過ごすくらいの犠牲は、
しょうがないのかもしれない。

そんな事を考えていると、ダフネの心臓の鼓動が早まる。

あの夜の、
ミルワード公爵が濡れた体の上に無造作に羽織ったバスローブ姿が、
ダフネの脳裏にフラッシュのように浮かんだ。

あの胸に抱かれることを想像して、
ダフネがそれが嫌ではないと思っている事に気がつくと、
改めて赤面をした。

なんて、はしたないんだろう。

気がつくと、いつの間にか、

ミルワード公爵はダフネの隣に立っている。
その視線を意識しすぎて、ダフネは顔を上げる事が出来なかった。

「まあ、今は俺もそこまで女が欲しくはないのでね、
それは冗談だが」

ミルワード公爵のあっさりとした言葉に、
ダフネは呆気にとられて、ミルワード公爵の顔を見上げる。

「冗談ですか」

少し気落ちしている自分の声に、
ダフネは自分で自分に地団太を踏みたい気持ちになる。

一体、私は何だって言うの！

「君はどんな場所に出向いても、俺にぴったりと寄り添って、
ただ笑っていればいい。ええ、いいえ、ごきげんよう、ありがとうございます。
その程度の言葉だけを、大人しく周りの人間に言っていればいい。
後のフォローは俺がすべてする」

ミルワード公爵は言うと、ダフネの目の前にサンドイッチが包んであった、
キルトの布を差し出した。

中身は空になっている。

「久しぶりに食事ってやつで、
美味いと思うものを食った。有難う」

それまでとは少しトーンの違う柔らかい声で、
ミルワード公爵はダフネに言う。

ダフネの顔がぱっと明るくなって、
満面の笑顔になって、差し出されたキルトを受け取った。

「どういたしまして！」

それは、孤児院の全ての子供たちを魅了する、
素のダフネの笑顔だった。

ミルワード公爵の心臓が、ドキリと音を立てる。
公爵は咄嗟にダフネから視線をはずして、
目を伏せた。

何をうろたえているんだ。

自問する。
そして、もう一度、ダフネの笑顔に目を戻した。
ああ、そうか。

公爵は納得した。
女の作り笑いや愛想笑いになれていたせいで、
あまりに無邪気なその笑顔に、免疫がなかったのだ。

大人になっても、こんな風に笑うやつがいるのか。
ミルワード公爵は小さく苦笑した。

「ところで、これから街でブティックを経営している知り合いが、
君の体のサイズを測りに来る」
腕時計を見て、ミルワード公爵は言った。

「サイズ？」
ダフネは無邪気な笑顔をやめて、ミルワード公爵を見る。

「パーティでは、自分のパートナーがどれだけ美しく着飾っているかを、
競い合うのも集まりの趣旨の一つなのさ。

久しぶりの親族の場だ。気合を入れて着飾ってもらう」

公爵の言葉に、ダフネは慌てる。

「では、ドレス代はお給料から引いてください」

ミルワード公爵はダフネの言葉におかしそうに笑った。

「カルロスの給料など当てにしてはいない。大体、
そんな給料などでは、君の靴の一足も買えないよ」

ダフネは目を見開いた。

「そんな、高級なもの！私には…」

ミルワード公爵はダフネのあごに手を当てて、
自分の目を見るように顔を向けさせた。

「何も、君のために買うわけじゃない。
全て、これから君にすることは俺自身のためにすることだ。
君は本物の恋人じゃない。あくまでも、恋人を演じるために雇われた、
役者みたいなものだ。
もしくは、身代わりを見逃してもらうために取引に応じた、
囚人みたいなものか」

ダフネの顔から血の気が引いた。

そして、負けじと口を開く。

「カルロスの怪我が早く治って、
公爵の恋人役を演じる囚人から、普通の下町の庶民の女に、
私が一日でも早く戻れるよう、これから毎日神様に祈るわ」

「それがいいだろうな」

ダフネのあごから指を離し、
ミルワード公爵は小さく笑って、自分のデスクに戻っていった。

ミルワード公爵って、見た目は美しくて素敵だけれど、
本当に、意地悪な人。
これじゃ、本物の恋人が出来ないのも無理ないわ。

ダフネはプリプリ怒りながら、
自分もデスクに戻ったのだった。

プラチナブロンド

しばらく午後の仕事をしていると、
執務室の扉が叩かれ、ダフネは立ち上がると扉を開けに行った。
扉を開けるとそこには、紫色の派手なスーツを着た男性が立ってい
て、
驚いた事に、ダフネを見るとウィンクをした。

「ミルワード公爵のお部屋って、こちらかしら?」
見るからに男性の体格と容姿をしているのに、
言葉は女性のようで、そのごつい顔にはうっすらと化粧が施してあ
る。

「は、はい」
ダフネは答えたものの、この奇妙な人物を部屋に通していいものな
のか迷って、
ちらりとミルワード公爵を振り返った。

「カルロス、いいんだ。中に通してくれ」
ダフネの気配を察したのか、ミルワード公爵が声をかけてくる。
「はい」
ダフネは返事をすると、扉を大きく開けて、
その来訪者を部屋の中に招き入れた。

「ご機嫌よう、ミルワード公爵」

小指を立てて頬に当てながら、
紫色のスーツの腰を落として、まるで貴婦人のようにお辞儀をする男に、
「ナイルズ、急に無理言って悪かったな」
ミルワード公爵は親しげに声をかけて頷いて見せると、
その紫のスーツから目を移して、ダフネを見た。
ナイルズと呼ばれた男も、唇を尖らせてミルワード公爵の視線を追って、
ダフネを見る。

「あら、この子が公爵が言っていた子ね。
っても、見たところ男の子のようだけれど、
もしかして、男の子にドレスを着せようっていうのかしら？
ミルワード公爵、いつからご趣味が変わられたの？」
驚いたように、ナイルズが言うのに、
「どんな趣味だ」
ミルワード公爵は小さくため息をついて、
デスクから立ち上がりながら言った。
執務室の出口へと歩き始める。

「彼女は、今は事情があって男装しているだけだ。
仕事以外の時間になれば、ちゃんとした淑女に戻るのさ。
ナイルズ、俺はしばらく外に出てくるから、
その間に彼女の体のサイズを測ってもらいたい。
ドレスのデザインは全て、君に任せる。
今週末には間に合うように数着、仕上げてくれ」

そして、ダフネの前を通りかかると、

ミルワード公爵はダフネのあごに手を当てて、自分に顔を向かせた。
「その無骨な男の服を脱ぐんだ。後はナイルズに言われた通りにするように。
いいな、カルロス。いや、ダフネ」

すぐ間近で、まっすぐ目を覗き込まれ、
ダフネはドキリと心臓が跳ねるのを感じた。
それを隠すように、目を伏せると、
「はい、承知しました」
大人しく冷静を装って返事をする。

ミルワード公爵はもうしばらくダフネの目を見た後、
手を離して、執務室を出て行った。

「あらまあ、あなた本当はダフネちゃんって言うのね」
ナイルズはミルワード公爵が扉を閉めて部屋を出て行くのを見届けると、
小走りになってダフネに近づいてきた。

「どれどれ、お顔を良く見せてちょうだい」
ダフネの顔を両手で挟んで、じっと見つめる。

「とっても可愛いお顔をしてるわね。ドレスも作り甲斐があるわ。
男装をしている理由はあえて聞かないけれど、
早速、そのダサい秘書の制服を脱いで頂こうかしら。
女同士だもの、恥ずかしくないでしょう？」
ポケットからメジャーを出しながらナイルズが言うのに、
ダフネは唖然とする。

女同士って。

ダフネが戸惑っていると、ナイルズはダフネの戸惑いを気にしていないように、
にっこり笑った。

そういえば、港町にも、
こんな感じの人が美容師にいたっけ。

と、ダフネは思い返す。
見た目は男性でも、心の中は女性なのだ。
確かに、そういう人もいる。
そして、それは人としての、
単なる個性の一つに過ぎないのだろう。

「ええ」
ダフネは答えると、
無理やり笑顔を浮かべて気後れしながらも、
秘書の制服を脱ぎだした。
ナイルズが変わっているといよりも、
ダフネは、仕事中にドレスのサイズを測るという、
非常識の方に気後れがしていた。
でも、ミルワード公爵に言われれば従うしかないのだ。

「ミルワード公爵が女性にドレスを作るなんて、
　ほんとうに珍しいわね！」
ダフネが服を脱ぎ終わって下着だけになると、
素早くダフネの体の採寸をしながら、
ナイルズが感嘆したように言う。

「え？そうなんですか？だって、公爵はおもてになるから、
女性にこうして、いつもドレスを作って差し上げてるのかと思っていましたけれど」
ダフネが思ったまま口に出して言うと、ナイルズはオホホと笑った。

「まあ、噂の通りのプレーボーイだから、
宝石や花束なんかは、しょっちゅう女性に贈っているみたいだけど、
ドレスは本当に久しぶりだわ。私がミルワード公爵に前に頼まれて作ったのは、
もう、かれこれ１０年前くらいだもの」

１０年前。

確か、今公爵は２８歳だと聞いている。
だとすると、１８歳の時に女性にドレスを贈っているということなのだろうか。

チクリとダフネの胸の中に、小さい痛みが走る。

「そんなに若い頃にドレスなんて贈り物するなんて、
さすが、ミルワード公爵ですね」
ダフネが驚いたように言うと、
「そうねえ、あの頃はミルワード公爵は相手の女性に夢中だったから。
まあ、若さもあったんでしょうけど」
ナイルズは肩をすくめて言った。

ミルワード公爵が夢中だった女性。
一体、どんな女なんだろう。

クルクルと体を回されて、ウエストと股下を図って数字のメモを取ると、
ナイルズはダフネを見た。

「あなた、黒髪なの？」
目を細めて言うナイルズに、ダフネはかぶっていた黒い髪のかつらを脱ぐ。

「やっぱり！」
ナイルズは胸の前に手を組んで、ダフネを見てにっこり笑った。
「綺麗なプラチナブロンドね！」
ぴんで止めてあるダフネの髪をほどいて、見とれるようにナイルズが言う。

「１０年前、ミルワード公爵に頼まれてドレスを作った女も、
それはそれは綺麗なプラチナブロンドをしていたの。
ミルワード公爵はやっぱり、プラチナブロンドの女が好きなのか

しらね」
ナイルズの言葉に、ダフネは小さく唇を噛んだ。

１０年前にミルワード公爵が夢中だった女性が、
プラチナブロンドをしていたのと、
ダフネがプラチナブロンドなのは、何の脈絡もない偶然だ。

何故なら、ミルワード公爵が自分の恋人を演じさせるのは、
男装をして双子の兄の身代わりにもぐりこんでいた女なら、
きっと誰でも良かったのだろうからだ。
身代わりを見逃すという交換条件で、大人しく公爵に従うような相手ならば。

「綺麗な女（ひと）なんでしょうね。
１０年前にミルワード公爵が夢中だった方って」
ダフネが無理に明るく言うと、ナイルズはウィンクをして答えた。
「確か、５才年上の人でね。すらりと背が高くて、
まるで舞台女優のように堂々としている美しい方だったわ。
そう言えば、ダフネちゃんとは髪の色は同じでも、
タイプ的にはまるきり反対かしらね。
でも、私は華奢なダフネちゃんの方が好きだけど」
ナイルズの言葉に、ダフネは目を伏せて小さく笑って見せた。

舞台女優のような背の高い美人。
やはり舞台俳優のように背が高く、
美しいミルワード公爵と隣に並んだら、

二人は、どれだけ映えた事だろう。
同じプラチナブロンドの女性でも、
その女性とダフネとは、まるきり違う人種だった。

「でも結局、ミルワード公爵の想いには答えず、
その女は、親の決めた政略結婚をして、
嫁がれたのよね。その当時のミルワード公爵の落ち込んだ様子は、
傍から見ていられないくらいだったわ」

ダフネはため息をついた。

そんなに傷ついた恋愛経験をしたからこそ、
今のミルワード公爵は、どんな女性にも本気にならず、
深く付き合うのを避けているのだろうか。

ダフネはそんな事を思うと、
ミルワード公爵が心底、気の毒になるのだった。

「さ、採寸は終了よ！
１０年前よりは、ずっと私の腕も上がっているから、
公爵の昔の想い人になんか負けないように、
ダフネちゃんを綺麗にしてあげるわ。
目を見張るような美しいドレスを作るから、楽しみにしててね！
公爵の想い人は、今はダフネちゃんなんだから」

またダフネにウィンクを投げて、スキップを踏みながら、

陽気な足取りでナイルズは執務室から出て行った。

下着姿のまま、ダフネはしばし、
一人その場に立ち尽くす。

そして、自分の肩に流れているプラチナブロンドの髪を手にとって、
小さくため息をつくのだった。

嘘の始まり

ミルワード公爵の秘書として働き始めて、一週間が過ぎ、
週末になった。

初めての休日だったけれど、
夜には恋人役として出向く、
ミルワード公爵の大叔母の誕生パーティを控えて、
ダフネは朝から落ち着かなく、そわそわとしていた。

昨日仕事を終えた後、ミルワード公爵が言った。
明日の午後遅く、ダフネの家にナイルズが仕上がったドレスを持って、
ダフネの出かける為の支度をしに来るとのこと。

驚いたダフネは男装しているのも忘れて、
思わず素の言葉になってミルワード公爵に言った。

「そんな！それでは、私の正体があなたに分かってしまっていると、家族に言うようなものです！」
ダフネが青ざめて言うのに、
ミルワード公爵は表情の無い美しい顔で、ダフネを見て言う。
「何か、問題があるのか？」
ダフネは言葉につまった。

「俺が君の正体を知っていたって、別に君の兄のカルロスを解雇するわけでもないし、
それはダフネ、君の家族が知ったとしても同じ事だろう？
カルロスの怪我が治るまでは、昼間は君がカルロスの身代わりを勤めて、
それ以外の時間で必要な時には、俺の恋人役をするというだけだ。
別に誰に迷惑をかけるわけでもない」
ダフネは何も言えずに、俯くだけだった。

「それよりも、明日の大叔母のパーティで君がどういう振る舞いをすればいいか、
君は分かっているだろうな」
ミルワード公爵がダフネに近寄ってきて、
小さく首を傾げて、ダフネの目を覗き込んで言う。
「私の振る舞い……」
ダフネが不安げにミルワード公爵を見て言うと、
ミルワード公爵は口の端に小さく笑みを浮かべた。
「簡単な事だ。君は俺の恋人なのだから、
俺に夢中な振りをしなければならない。勿論、俺も君に夢中な振りをする」
ぐっと顔を近づけて囁くミルワード公爵に、ダフネは息を飲んだ。

茶色の瞳が、ダフネの目を覗き込んでいる。
もう少し近づけば、唇が触れそうだ。
ミルワード公爵の息がダフネの唇をかすめて、ダフネはくらりと眩暈を感じた。

どうして、神様はこんなに美しい男の人を作るんだろう。
実際に、どういう人なのかまるきり知らなくても、
ただこうして見つめられるだけで、
心奪われてしまうような、どうしようもない魅力がミルワード公爵にはあった。

ミルワード公爵が皮肉な笑顔を浮かべている事にダフネは気がつくと、
我に返って、ダフネは公爵に見とれていた自分の視線を慌ててそらした。

「君の方は、俺に夢中な振りをするというのは問題がなさそうだ」
自信満々に言われて、ダフネは小さく傷つく。

密かにミルワード公爵に憧れている、
自分の心の中を、公爵にはすっかり見透かされているのだ。

ただでさえ、カルロスの身代わりの引け目があるのに、
自分がミルワード公爵に抱いている感情すらも見透かされていて、
ダフネは消え入りたい気持ちで一杯だった。

「それと、もう一つ、パーティに出向く時の注意点がある。
あの大叔母のパーティには、それこそ財界政界の魑魅魍魎がうようよしている。
少しでも、面白いねたがないかと参加者は目を凝らしてお互いを

見ている。
俺が明日君を連れて行ったら、多分君が一番の注目株になるだろう。
俺の側を離れず、君はただ微笑んでいるだけでいい。
というか、自主的に誰とも何も話すな。それがもう一つの注意点だ」

ダフネはミルワード公爵の言葉を聞くと、力なく頷いた。

周りに話を合わせろと言われるよりは、
黙っていろと言われる方がよっぽど気が楽だ。

第一、庶民の港町で育ったダフネに、
そんな上流社会の人達と交わすような話題など、
ひとつも持ち合わせていない。

というような、昨日の出来事をダフネが思い返していると、
家のチャイムが鳴って、客を出迎えたらしい母親が、
悲鳴のような声を上げて、ダフネを呼んだ。

ダフネは小さくため息をついて、玄関へ向かう。

「ダフネ、あなたにお客さまよ！」
裏返った声で言う母親の肩を撫でて、

ダフネは玄関先に立っている人物に頭を下げて挨拶をした。

今日は真っ赤なスーツに身を包んだナイルズが、
にこにこして、後ろに数人の大荷物を抱えている部下を従え、
立っていた。

「ダフネちゃん！　さてさて、これからが私の腕の見せどころよ！」
言いながら、遠慮なくダフネの家の中にナイルズは入って来る。

ダフネの母親はあんぐりと口を開けて、
化粧をして真っ赤なスーツを着ている、
家の中に入ってきた大男を見ているだけだった。

「今日は女の子なのね」
ナイルズはダフネの着ている黒っぽい地味なワンピース姿を見て言う。
しかし、その袖口を人差し指と親指でつまんで、
顔をしかめた。
「まるで、未亡人みたいだわ」

部屋の奥から、ダフネの父親も玄関先の騒ぎに顔を出して、
そして母親同様、ナイルズを見るとあんぐりと口を開けた。

「さ、こんなもの早く脱いじゃいましょう」
ナイルズは言いながらダフネの両親を見て、
貴婦人の挨拶のように小さく膝を垂直に折って挨拶をする。
「ごきげんよう、ダフネちゃんのお父様、お母様」
裏声で言うナイルズに、両親はただ突っ立っているだけだった。

「お父さん、お母さん、ご挨拶して！
ミルワード公爵のお使いの方なの！」
ダフネが両親を振り返って、慌てて早口で言う。
両親はダフネの言葉に、はっと我に返って慌ててて頭を下げた。
「いつも、ミルワード公爵には、
うちの娘がお世話になって…」
母親が言って、自分の言葉の意味を知ると自分の口を両手で封じる。
そんな母親の仕草に、ナイルズは小さく笑った。
「お母さん、お嬢さんが男装されて、
ミルワード公爵の元で、お仕事しているのは知ってます。
大丈夫ですよ、私は誰にも言いません。
それに、ミルワード公爵もご承知です」
ナイルズの言葉に、母親の表情が驚きを増した。
「それよりも、ダフネちゃんを着替えさせたいので、
空いているお部屋に案内して貰えないかしら。
ミルワード公爵が迎えに来る前に、ダフネちゃんを素材に、
私の最高傑作の芸術品を作りたいの」
ナイルズがダフネにウィンクをしてみせる。
ダフネの両親は、まるきり話が見えずに、
ナイルズの言葉に、キョトンとしていた。
「ミルワード公爵の大叔母様の今夜のパーティに、
ダフネちゃんはミルワード公爵のパートナーとして、
出席するのですよ。ご存知ないのですか？」
ナイルズの言葉に、ダフネは頭を抱える。
両親に事情を話すには、複雑すぎる。
黙って出かけたかったのに、とダフネは首を左右に振った。

「パートナー？」
母親が呟いて、父親の顔を見る。
父親も、首を傾げて母親の顔を見返した。

「あら、ミルワード公爵とダフネちゃんは、
お付き合いしているのですよ？
私の後ろに控えている者達が抱えている荷物は、
全て、ダフネちゃんの為にミルワード公爵が仕立てた、
ドレスですもの」

「いいえ、それは違うの！」
ダフネが思わず、叫ぶように言う。
ナイルズがダフネを見た。
「あら？何が違うの？」
目をぱちくりさせているナイルズに、
ダフネは何か言おうとして、思いとどまった。

何も知らないナイルズと両親の前で、
ミルワード公爵の恋人の芝居をする約束になっているなどと言ったら、
余計話がこじれるだろう。

どうせ、カルロスの怪我が治るまでの間のつかの間の恋人なのだ。

本当の事を黙っていても、別に問題は無いのかもしれない。
どっちにしろ、
その間は、周りには本物に見えるように演じなければいけないのだし。

ダフネは両親とナイルズのじっと見る視線に目を伏せると、
小さくため息をついた。

「ドレスなんかいらないと言ったのに、
ミルワード公爵は聞いてくれなくて」
消え入るような声で、ダフネは言った。

ナイルズがみるみる笑顔になり、
ダフネの両親は、気を失わんばかりに驚いた顔をした。

「お前、ダフネ」
父親が、酸欠の金魚のように口をぱくぱくさせて、
ダフネに言う。
「そうなの、お父さん。ミルワード公爵は私の恋人なの」
母親が、よろよろと腰が抜けたようにその場に座り込む。
ダフネは母親に駆け寄りながら、
嘘をつく自分を許してもらえるよう、神様に祈っていた。

「ミルワード公爵の恋人って、あなた、
一体、ミルワード公爵がどんなお方なのか分かっているの？」
母親は驚きで床に座り込んでしまったのを、
ダフネに助けられて起き上がりながら、
畳み掛けるように言う。
「この国に広大な領地を持つ大地主の一族の一人な上に、
亡くなられたお父様の海運業を継いで、
その才覚で数倍にも規模を拡大した実業家。
その能力を買われて、
国が通商航海部門の顧問を、直々に任命している方よ！
そんな特別な方の恋人なんかに、
港町の平凡な女がなれるわけないでしょう？
ダフネ、あなたの勘違いなんじゃないの？
それに、第一ダフネ、
あなたは男としてミルワード公爵の元で働いていたんじゃなくて？」
母親の心配げで不安げな言葉に、ダフネは小さくため息をついた。

言われてみればその通りで、
お芝居だという前提でなければ、
ダフネのような平凡な港町の庶民の女が、
ミルワード公爵のような男性の恋人になどなれるわけがない。

そう、これは取引なのだ。
カルロスの怪我が治るまでの期間は、

ダフネがミルワード公爵の恋人のふりをするという。

だからこそ、
それがどんなに傍から見たらあり得ない事だとしても、
本当の事のように見えるようにしなければならないのだ。

「男装して仕事をしているわよ。
だけど、転んだ拍子にかつらがずれて、私のプラチナブロンドが見えてしまって、
その髪に、ミルワード公爵が一目ぼれしたというわけ」

苦しい嘘だったけれど、どう上手く理由を作ってみたところで、
嘘は嘘、同じなのだ。

母親があまりにもあり得ない理由に、
絶句してダフネをただ見ている。

「あらぁ、お母さん。
ミルワード公爵は、確かにプラチナブロンドの女性に目がないようですの。
何か特別な魅力を感じるのでしょうね」
ナイルズが無意識の助け舟を出してくれて、
ダフネはほっとした。
別に私がプラチナブロンドじゃなくても、
多分、恋人の振りはさせられていただろうけれど、と思いながらも。

「さ、ミルワード公爵がお迎えに来る前に、
万全に準備をしないとね」

まだ釈然としないダフネの母親の目の前から、
ナイルズはダフネを引っ張り出した。

「それで、ダフネちゃんのお部屋は？」

ダフネは頷くと、
ナイルズを自分の狭い自室に案内を始めた。

「ダフネ！」
ふと、玄関から自室へ歩いていく途中で、
居間の方からカルロスの声がする。

ダフネはナイルズを振り返ると、
自室の扉を指して、中に先に入っていてもらうように促し、
居間のベッドで足を吊って寝ている双子の兄のもとへ行く。

「騒がしいけれど、一体何が起こってるんだ？」

カルロスの黒髪の長めの前髪がその目にかかっているのを、
ダフネは指で払いのけてあげながら、カルロスの肩に手を置いた。

「実はね」

なるだけ穏やかな口調で、さきほど両親に話した内容と同じことを、
カルロスにも聞かせる。

「恋人ねえ」

案外驚きもせず、冷静にカルロスは呟くと、
じっとダフネを見た。

ダフネは思わず、兄の視線から眼をそらしてしまう。

「ダフネ、今の君の話の他に、
もう少し僕に話す事があるんじゃないか？」

「え？」

カルロスの言葉に、ダフネはどきりとした。

「父さん、母さんはそれで納得したかもしれないけど、
君の双子の兄のこの胸は、何かが違うと告げてるんだ」

カルロスの真っ直ぐな視線に、ダフネは目を伏せた。

「ほら、言ってごらん。何を一人で抱えてるんだ？」

ダフネは大きくため息をつくと、
全て本当の事を話し出した。

この世に同時に生まれた、たった一人の双子の兄には、
到底隠し事など出来ないのだ。

「僕のせいで、面倒なことになってしまったんだね」
ダフネの本当の話をすべて聞くと、カルロスが肩を落として言う。

「そんなに大した事ないわよ！だって、振りをするだけでいいんだもの。
ミルワード公爵ったらプレイボーイなくせに、
女の人に迫りまくられて、最近は少し辟易しているらしいから、
私はそういう女の人たちからの、隠れ蓑みたいなものになるだけなのよ。
それも、カルロスが職場に復帰するまでの間だけだしね。
社交の場に行っても、ただ側にいて笑っているだけでいいみたいだし、
ぼろが出るからだろうけど、何も喋るなって言われてるし、楽勝よ」

明るく言って、ダフネは兄の手を撫でると、
立ち上がった。

「さて、今夜が恋人の振りの初仕事なの。
気合入れなきゃ」
わざと元気良く言って見せて、ダフネはカルロスのベッドから離れる。

「ダフネ」
ふと、カルロスがダフネを呼び止めた。

「何?」
ダフネが明るく振り返る。

「あくまでも、恋人の振りというだけなんだろうね?
まさか、恋人の代わりをするというわけじゃ」
言い辛そうなカルロスに、ダフネは首を傾げる。
「どういうこと?」

「ミルワード公爵とベッドを共にする義務までは、
その演技には含まれていないんだろうね?」
カルロスの不安そうな声に、ダフネは思わず笑った。

「なわけないじゃない」
笑い飛ばして、ふとダフネの脳裏に、
ミルワード公爵に口づけされた記憶が蘇る。

あの、体が溶けるような情熱的な口づけ。

ダフネはぼーっとなる自分の頭を振ると、
慌ててもう一度、繰り返し言った。
「そんなわけないわ」

カルロスは小さく息を吐くと、
「そうか、ならいいけど。気をつけるんだよ？
相手は公爵さまといえども、一人の男なんだから」

ダフネはカルロスの言葉に小さく笑った。
「それも、カルロスからの、
一人の男としてのアドバイスかしら？」

カルロスは何も答えず、
ベッドの上で不安そうに小さく笑い返しただけだった。

「大丈夫よ！心配しないで！」

ダフネは元気に声をかけると、
居間から出て自分の部屋に向かったのだった。

もし、ミルワード公爵が自分をベッドに誘ったら。
果たして、私は断る事が出来るのだろうか。

ダフネは心の中で呟く。

あの茶色の瞳に見つめられて抱きしめられたら、
何も抵抗など出来ないのではないだろうか。

自分の部屋の扉に手をかけながら、ダフネは苦笑した。

ミルワード公爵ほどの人物で、
国中の女どもが群がるようなルックスをしている男性が、
母親が言ったように、港町の庶民の女をそこまで相手にするはずがない。

あくまでも、ミルワード公爵にとって、
自分には、都合のよい隠れ蓑という存在価値があるだけなのだ。

物事を、
特にミルワード公爵に関しては、
自分のいいように解釈するのは避けなければ。

ダフネは心の中に強く誓った。

でなければ、いつか必ず身の程知らずに、
泣くはめになるのだから。

ダフネは勢い良く自室の扉を開けると、
ナイルズが待つ部屋の中へと入って行った。

悪ふざけ

「ねえ、こんなの手に入れちゃったの。
ダフネちゃん、見てみる？」

部屋に入るとナイルズがダフネに近寄ってきて、
手の中の写真を面白そうに見せる。
ダフネは言われるままに、ナイルズの手の中を覗いた。

それはある婦人の写真。

深い海の底のような濃紺のドレス。
目を奪うような、グラマラスな体のラインにぴったりとした、
そのデザイン。
プラチナブロンドの豊かな長い髪を、
綺麗にカールさせて背中に垂らしている。

ほっそりとした長い首筋、色白の頬に薄っすらと紅があって、
その優雅で優しげな眼差しの口元は、上品に微笑んでいた。

「凄い美人だわ」
ダフネは思わずため息をついて呟く。

「ミルワード公爵のかつての想い人よ。
リサ・ハイード公爵夫人。でも、
旦那さんは最近お亡くなりになったのよね。
だから、今は未亡人だけれど」

「こんなに若くして、未亡人に？」
ダフネが驚いて聞くと、
「だって、旦那さんのハイード公爵は、
リサさんよりも、確か３０歳年上だったって話だもの。
っていっても、まあ長寿社会の今にしては、
結構、若くしてお亡くなりになったことには変わりないけど」
ナイルズは肩をすくめて言った。

確か、このリサという女性は、
ミルワード公爵よりも五歳年上だと聞いている。
ならば、今３３歳ということだろうか。
しかし、自分の親のような年頃の、
３０歳年上の人と結婚するなんて。

ダフネが心の中で呟いていると、
察したのかナイルズが言った。

「良家のお嬢様は、親の言うとおりに自分の意思なく、
嫁ぐ事も多いのよ。
家同士の政略結婚がほとんどでしょうけど」

「親に決められた人と結婚するなんて、
３０歳年上じゃなくても、私には無理だわ」
ダフネはナイルズに言った。

「上流社会に住む人たちの慣習は、

私たち平凡な家系に生まれた者にはついていけないことは、
確かにたくさんあるわね。
さ、それよりも、私が何故この写真を持ってきたか分かる？」

ナイルズが最後は口調を変えて、面白そうにダフネに言うのに、
ダフネは首を傾げた。

「ダフネちゃんも綺麗なプラチナブロンドでしょう？
そして、このリサさんもプラチナブロンド。
ミルワード公爵を驚かすために、
ダフネちゃんをリサさん風にドレスアップしようと思って。
きっと、ミルワード公爵、驚くわよ」
小さくスキップをしながら、ナイルズは部下に運ばせた荷物に近寄
っていくと、
荷物を解き始める。

「ナイルズさん！そんな、リサさんは凄い美人だし、
スタイルも豊満で、胸が洗濯板みたいな体型の私とは大違いだし、
似せるなんて到底無理です！」
ダフネが焦って言うと、ナイルズは顔を上げてにっこりと笑った。

「私を何者だと思ってる？スタイリングとメイクアップのコンテス
トで、
世界一を二回取ってるの。
ダフネちゃんは知らないだろうけど、
私を個人的に呼んで、一回仕事させるには、
最高級の車を買うよりも値段がするのよ？
その腕前を見せてあげるわ」

ダフネは絶句した。

最高級車よりも高い値段。
一体、いくらなんだろう。
高級車とは縁の無い借家暮らしをしているダフネには、
想像もつかなかったけれど、ダフネの家などでは払えないような、
とてつもない金額なのは想像出来た。

恋人の振りをするだけの私に、
それだけぽんとお金を使えるなんて、
一体、ミルワード公爵はどれだけお金持ちなんだろう。

ダフネが呆然と立ち尽くしていると、
「さて、じゃあ始めるわよ」
ポンと手を打って、
ナイルズは結んである、ダフネの髪を解くことから始めた。

「リサの瞳は少し目じりが下がっているの。
それが慈悲深い印象を与えてる。
ダフネちゃんの目は、少し目じりが上がっていて、
元気一杯っていう印象があるから、
それを、メイクで作るのよ。
アイラインを目尻のラインに下向きにぼやかして」

ナイルズが言いながら、ダフネの顔に化粧をしている。

「港町育ちのダフネちゃんの肌は、
少し日に焼けているから、それを透き通るような白に持っていくには、
私の特製のファンデーションが生きるのよ」

ダフネの顔をパフで叩きながら、
ナイルズは続ける。

「このパウダーには、
日の光を反射して、細かい粗を隠す作用があるの。
特許ものよ」

ダフネを見て、嬉しそうにウィンクをするナイルズに、
曖昧な相槌を打った。

リサ・ハイード公爵夫人に似せて、
おしとやかで従順な恋人役を作り上げる。
それは、ナイルズは驚かすためと言っているけれど、
本当はミルワード公爵のリクエストなのではないだろうか。

お金をかけて昔の思い人に似せて作り上げた、
恋人役のお人形が欲しいのではないのか。

ダフネは小さくため息をついた。

それならそれで、望みどおりを演じるまでのことだ。
どっちにしろ、自分を偽ることにはなんら変わりがないのだから。

化粧を終え、ナイルズはダフネのプラチナブロンドの髪を、
綺麗にカールさせ、背中に垂らす。

目の前の鏡の中には、
リサに良く似た面差しを持つ見知らぬ女がいた。
黙っていると、まるで自分のように見えない。

ミルワード公爵の側にいるためには、
昼間は男装をし、その他の時間はまたこうして、
本来の自分とは違う装いをするしかないのだ。

ダフネは自分の素の存在が、
とことんミルワード公爵に嫌われているような気になって、
気持ちが塞ぐのを覚えた。

そして、それはきっと当たらずとも遠からじなのだろう。

「さ、ドレスよ」
ナイルズが自分のイメージ通りに変身していくダフネに、
機嫌よく言うと、写真のリサが着ているドレスに良く似たデザインの、

濃紺のドレスを荷物から取り出してきた。
胸の辺りに豪華なリボンがついていて、
ダフネの華奢な胸のラインを、
上手くカバー出来るデザインになっているようだった。

ナイルズに言われるまま、
ダフネはドレスに体を通す。

ドレスの濃紺が、ダフネの頬を少し青ざめて見せた。

「うーん、私って天才」
ナイルズが少し離れた場所からダフネを見て、
感心したように言う。

「がさつな港町育ちの、庶民の女には見えないかしら?」
ダフネが皮肉な感じで言うと、まるで気にもしないように、
ナイルズは笑って、
「大事に育てられた深窓のお嬢様にしか見えないわよ。
家同士の政略結婚を、もうすぐ控えているような」
ダフネの頬を手のひらで撫でた。
「リサ・ハイード公爵夫人みたいに?」
ダフネが皮肉な口調を保ったまま言うと、
ナイルズは首を傾げて、しばらくダフネを見て言った。

「今、ここにリサとダフネちゃんを並べたら、
確実にあなたが勝つわね」
ナイルズがくるりと目を回して言う。
「だって、リサは年増だもの」
あまりにあっけらかんというその口調に、
ダフネの唇の端が少し緩んだ。

「そうそう、あなたは笑った方が、
断然可愛いわよ。ミルワード公爵もノックアウトね」
「ミルワード公爵は、私のことなんて何とも思ってらっしゃいませんから」
ナイルズの言葉に、ダフネはすかさず反論する。

ミルワード公爵はダフネに「俺を好きになるな」と、
きっぱり言ったのだ。
公爵が自分に好意を持つことなど、絶対にあり得ないのだった。
ダフネの言葉に、ナイルズは黙って微笑んだだけだった。

「ダフネ、お迎えがいらしたわ」

ふと、部屋の扉を叩く母親の声がする。
その驚きで上ずっている声色で、
ミルワード公爵が直々に迎えに来たのだと、ダフネは悟った。

これで両親も、ダフネの嘘の話を信じるを得ないだろう。

「今、参ります」
ダフネは答えると、ナイルズに手を取られて、
部屋を出て玄関に向かった。

家の玄関先に立っている、黒いタキシードのミルワード公爵を見つけて、
ダフネの心臓が大きく音を立てた。

少し長めの茶色の髪はいつもとは違う感じで、
きちんとまとめられている。
そして、そのすらりと背の高い体躯に、
まるで隙なく、しなやかにタキシードを着こなしていた。
広い肩、厚い胸板がかえって正装に引き立てられ、
匂い立つような、男性の魅力が溢れている。

きっと、ミルワード公爵のパートナーとして、
これから行くパーティでは、
全ての女性の嫉妬の視線を受けるのだろう。
今まで体験したこともないそんな事に、
耐えられるだろうか。

ダフネは胸のときめきを感じながらも、
自分の立場を考えると不安で一杯になるのだった。

ミルワード公爵は、ダフネが家の奥から出てくるのを見ると、
目を見張った。

男装をしている姿か、
男装を解いていてもほとんど素顔に近い幼い顔だけしか、
今までは見たことが無かったのだったが、
ナイルズに手を引かれてやってきた、青いドレスの婦人は、
とても優雅で美しかった。

けれど、変身したダフネに、
ある人物の面影を見つけて、ミルワード公爵は首を小さく振る。

ナイルズが近くに寄ってきて、
ミルワード公爵の前で小さくお辞儀をした。

「いかがかしら?私の作品は」
「とても上出来だが」
「上出来だが?」
「悪趣味だな」

ナイルズは公爵の言葉に、大きく笑った。

ダフネは一体どんなやり取りがあるのだろうかと、
首を伸ばして様子を伺うけれど、
ダフネのところまでは、
二人の声は届いてこなかったのだった。

「そりゃ、多少はふざけましたけれども」
ナイルズは言葉を続ける。
「だって、過去の愛の亡霊よりも、生身の若い女性の方が、
何十倍も魅力的ですわ。それを公爵には確認して頂こうと」
「お前の昔からのおせっかいな性格は知ってるが、
俺は女はしばらくはもういい。そのために、
今夜、一族のパーティにダフネを連れて行くんだ」

ミルワード公爵の言葉に、しばらくナイルズは黙る。

「公爵、あなた、ダフネちゃんを好きなんじゃないの？
だから、一族のパーティに連れて行くんじゃないの？」

公爵は黙って、ナイルズを見ているだけだった。

「今夜のパーティには、リサも来る。
亡くなった旦那の喪があけたようだ」
ミルワード公爵がぼそりと言うと、ナイルズは驚いて目を見開いた。

「まあ」
「１８の頃の青臭い恋愛に、俺はもう何の思い入れもない」
ナイルズは黙ると、ミルワード公爵の手にそっと手を添えた。

「公爵のそんな気持ちも知らないで、本当にごめんなさい。
悪ふざけが過ぎたわね」
心から謝ってナイルズが言うのに、
ミルワード公爵は小さく息を吐いて言った。

「悪ふざけの部分を除けば、ナイルズ、
お前の腕はやはり確かだよ。ダフネは見違えるほど綺麗になった。
これなら、俺も気が楽だ」

「ダフネちゃんを連れて行くのは、お芝居なの？」
ナイルズの問いに、公爵は答えなかったけれど、
その答えないということ自体が、答えなのだろうと、
ナイルズは悟った。

「ダフネ、行くぞ」
ミルワード公爵が、少し離れた所に佇むダフネに向かって、
腕を差し出す。

また、ダフネの胸がどきりと音を立てた。

公爵が差し出す腕は、淑女をエスコートするための仕草。

ダフネは恐る恐るミルワード公爵に向かって歩き出すと、
差し出されたその腕に、そっと自分の手を絡めた。

離れた所から、両親が自分たちを見ているのが分かる。
初めて見る公爵の笑顔に、ダフネの心臓が飛び上がる。

ふと、ミルワード公爵がその長身の上から、
腕に手を回したダフネの顔を見下ろして、
ふっと小さく笑った。

「綺麗だ、ダフネ」
目を細めて自分を見つめるミルワード公爵の茶色い瞳に、
ダフネの心は火にあぶられた蝋燭のように、
みるみる溶け出してしまった。

知っている。
全てが演技だって。

ダフネは心の中で呟いた。

知っている。
全てが、カルロスの怪我が治ってしまえば、
終わる事だって。

だけど、全ての世の女たちがそうであるように、
自分だって、
ミルワード公爵に焦がれるのを止める事なんて出来ない。

ダフネはミルワード公爵の視線から目をそらすと、
自分も演技をしている振りをして、にっこりと笑みを浮かべた。

どんなに心の中でミルワード公爵に焦がれようが、
愛そうが、言わなければいいのだ。
決して本心を伝えなければ、
ミルワード公爵には分からないのだから。

「あなたもとっても素敵よ?」
ダフネが精一杯の演技の表情で、ミルワード公爵に言うと、
ミルワード公爵はダフネの頬に唇を寄せて、小さくキスをした。

ダフネの鼓動が早くなる。
これも演技なのよ!
必死で自分に言い聞かせた。

ミルワード公爵に連れられて家を出て、
公爵の高級車に乗り込むとき、
ダフネは全てが終わって、
ミルワード公爵と別れたという芝居になるとき、
一体、今の全てを見ていた両親が、
どれだけ落胆するだろうかと思うと、
今からとても気が重いのだった。

かつての痛み

広い車の後部座席に乗り込むと、
ミルワード公爵はダフネの体から手を離して、
持ち込んだ書類を手に取り眺め始めた。

本当の恋人同士のように、
ほんの一瞬前までは、ダフネの腰に手を回し抱き寄せ、
微笑んで、頬にキスをしてくれたのに。

見る見る間に、現実に引き戻されて、
ダフネはしみじみ、全てがお芝居なのだと思い知ったのだった。

運転手の運転する車の中は、
ミルワード公爵の書類のページをめくる音だけが響いていた。
ダフネは青ざめた表情で、窓の外に流れる景色を見ている振りをして、
傷ついた心をひた隠すのが精一杯だった。

ミルワード公爵は手の中の書類を見ながらも、
時々視線を流して、ダフネの横顔を見ていた。
窓の外の景色に目をやり、ずっと自分から顔を背けている横顔は、
心なしか、青ざめているようだ。

プラチナブロンドの髪、着ている濃紺のドレスが、
その白い肌を引き立てていた。

ナイルズがふざけて施した、リサに似せた化粧も、
こうして改めて見ると、ダフネの顔立ちを引き立てていて、
見れば見るほど、リサには程遠く感じられるようになっていた。

リサの事を思い出して、ミルワード公爵は苦く笑う。

誰にでも若さゆえに、
後で思い出すと、苦い記憶しか蘇らない過去もあるものだ。

確かに、１８歳という幼いあの時の自分は、
年上のリサを愛していたのだ。
幼いなりの拙さで。

しかし、リサは結局、
家の体面と財産を増やすことにしか興味が無かったのだ。
だから、若い自分に気がある振りをしながらも、
３０も年上の金持ちに嫁いで行った。
それだけならまだしも、その後、
その男と婚姻をしながらも、
自分との関係を続けようという申し出をしてきたのだ。

あの時の衝撃は今でも忘れられない。
女というものは、したたかで計算高いものなのだ。

どんなに清純そうに見えても。

その時の教訓通り、リサの後に知り合ったどの女も、
どんなに情熱的な恋に落ちようが、
最終的には結局、全てが財産目当て、
地位目当てに結婚を迫ろうとするのは、
共通していた。
どの一人として、例外はなかった。

この世に、愛なんて言葉があるけれど、
一回たりとも、その正体などを見たことなど無い。
大体が、女性に対して、
どうしようもなくその人だけが欲しいという、
一生ずっと一緒にいたいという、
そんな欲求を抱くなど、本当にあるものなのだろうか。
知れば知るほど、幻滅していくのが、
普通なのでないのだろうか。

いつかは自分が結婚するという可能性は否定しなかったが、
今はもう、もうお互いの腹を探り合うような、
恋愛など、疲れてしまった。
一生独身でも構わないかもしれない。

ミルワード公爵は心の中で呟いていた。
そして、またつとダフネの横顔に視線を流す。

こうして見ると、ダフネのプラチナブロンドも、
ほっそりとした華奢な体も、
色白で愛らしいけれど、意思の強そうな顔も、
なかなか魅力的だった。
そして、２２歳という若さが、
その美しさに輪をかけて輝かせている。

美しく着飾らせて、
一緒に連れて歩くには、申し分ないだろう。
心底、自分がダフネに心を奪われている演技をすれば、
どんな社交の場に出ても、他の女たちは寄っては来ないに違いない。

そして、この茶番はダフネも承知の取引上のことなのだ。
カルロスの身代わりを見逃す代わりに、
恋人役を演じるというだけの。
だから、どんなに自分が甘い態度をダフネにとっても、
ダフネが他の女達と同じように、
ずかずかと自分のテリトリーに入り込んで来ようとすることも、
ましてや、結婚などを迫ることもないのだ。

ミルワード公爵は唇の端に小さく満足の笑みを浮かべて、
ダフネの横顔から書類に視線を戻した。

やがて車は、広大な私有地の私道に入り、
辺りの景色は一変した。

緑濃い林の道をしばらく進むと、
急に道は開けて、
目の前に見渡す限り、手入れをされた芝とバラを植えてある庭園が
広がった。
白いアーチが私道を飾り、暮れかかる朱の走る暗い空に、
敷地内の明かりが、煌びやかに光り始めている。

続々と、車が玄関の車寄せに連なっていて、
ポーターが開けるドアから、次々と着飾った男女が降りてくる
その光景は、圧倒的な上流階級の雰囲気があって、
ダフネは車窓から眺めて、怖気けづくような気後れを感じていた。

そんなダフネを眺めて、ミルワード公爵は不思議に見ていた。
今まで付き合ったどの女性も、
自分とパーティに向かうこんなシーンでは、
まるで戦いに向かうかのように、
息巻いて殺気立っていたものだったが、
ダフネはまるで違っていた。
まるで小動物のように、怯えているのが見て取れた。

ミルワード公爵は思わず、手を伸ばしてダフネの肩に手を乗せる。
ダフネはびくりとして、ミルワード公爵を振り向いた。
車に乗ってから大分時間は経っていたけれど、
ダフネは初めて窓から視線を移して、ミルワード公爵を見たのだっ
た。

「何も怖いことはない」
ミルワード公爵は優しく、ダフネに声をかける。
「誰も、君を取って食いはしないさ」
その言葉に、ダフネは皮肉な笑みを小さく浮かべた。
「ミルワード公爵は、きっと何もお分かりにならないのでしょうね」
ダフネは緊張で青ざめた顔のまま、
かすれた声で言う。
「今後、私が公爵の恋人役を勤める間、
パーティなどの人目にさらされる機会で、
どれだけの視線が、私を殺そうとするか」
ダフネの言葉に、ミルワード公爵は小さく首を傾げる。
「だって、私みたいにチンケで美人でもない庶民が、
ミルワード公爵の側にいるなんて、ミルワード公爵に憧れる、
貴婦人の方々には、到底納得出来ないでしょう！
それこそ、きっとミルワード公爵が目を離したすきに、
私は取って食われます」
冗談のような言葉を、真剣に言うダフネに、
ミルワード公爵は思わず、小さく噴出してしまった。
「笑わないで下さい！私は本気です！」
ミルワード公爵の態度に、ダフネはむっとして抗議する。
「ならば、俺は君から目を離さないさ。
愛しい恋人が、魑魅魍魎に食われたら困るからな」
ミルワード公爵はダフネのあごを指で包んで、顔を自分に向かせる。
ダフネは胸の鼓動が高鳴るのを隠して、公爵の視線から目をそらした。
「そうですね。せいぜい私を守ってください。
何も喋らず、ただ笑って側にいますから」
早口に言うと、ダフネは公爵の指から逃れて、
また車の窓の方を向いた。

どうしてもこう、私の心臓は高鳴ってしまうのか。
全てお芝居だと分かっているのに。

順番が来て、ミルワード公爵の車のドアがポーターに開けられ、
ミルワード公爵とダフネが車を降りる。

ミルワード公爵はダフネの腰を抱いて、寄り添って歩きながら、
パーティの会場の屋敷のエントランスへ歩いていった。

ダフネはその建物を見上げて、
唖然とする。
まるで巨大な城だった。

一体、ミルワード公爵の一族は、
どれだけの由緒ある歴史を持つ一族なのだろうか。

「わが一族の歴史は、この国の歴史でもある」

まるで、ダフネの心を読んだように、
ミルワード公爵が言ったのを聞いて、
ダフネはますます青ざめてしまった。
緊張で体が細かく震えるのが分かる。

「この大役は、私では無理かもしれません。
今から帰してもらえませんか？」
思わず、ダフネは口走ってしまう。

庶民の自分とは属する世界が違う人達のテリトリーに、
うっかり入ってしまったのだ。
「ダフネ、何故君が今ここにいるのか、
　忘れてしまったわけではないだろうね」
ミルワード公爵は言うと、ダフネの腰を抱いたまま歩き続ける。
「もちろん、忘れるはずはありませんけれど、
　でも……」
エントランスの階段を、ダフネを抱えるようにして上りながら、
ミルワード公爵は小さく首を振った。
「ここで怖気づくなんて、まだ早い。
　しょうがない、君がやりやすい様に演出しようか」
ミルワード公爵は言って、屋敷の数人の使用人が、
大きい扉を開けて、招待客を受け入れているエントランスに立ち止
まり、
後ろからぞくぞくやってくる他の招待客も気にせず立ち止まると、
ダフネを抱きかかえて、その唇に口づけをした。

長い長い口づけ。

すぐ側を通り抜けて、屋敷の入り口を入っていく招待客たちが、
驚きや冷やかしの視線を投げ、
口笛や、言葉を呟いて通り過ぎていく。

ダフネは抗うことも出来ず、
ただされるがままに、ミルワード公爵の口づけを受けていた。

ようやく唇が離れると、
ダフネは荒い息を吐いて、ミルワード公爵をキッと睨む。

「お芝居と割り切るなら、何を私にしてもいいというんですか？」
涙の浮いた目で、ダフネは小声でミルワード公爵に言う。
「君がやりやすいために、俺は協力しただけさ」
涼しい顔をして、ダフネの頬を指で撫でると、
側にいたポーターに笑顔を見せて、ダフネを抱き寄せたまま、
屋敷の扉をくぐった。

「ミルワード公爵って、最低な方ですね。
本当に女性の敵です」
ミルワード公爵に歩調を合わせて歩きつつ、
でも、怒りに任せてダフネは言った。
「敵で、結構だね。もう俺の人生に女性はいらないかなと、
そんな事を思っていた頃なのでね。
別に敵視されても、問題などないかなと思っているよ」
妙に冷めて言うミルワード公爵に、ダフネはその顔を見上げた。

もしかして、一生独身でもいいってこと？
それだけ、恋愛に嫌気がさしたのだろうか。

恋愛というより、女性に嫌気が差してしまったの？

そして、ダフネはナイルズが言っていた、
ミルワード公爵が１８歳の１０年前に、
焦がれていたというリサという女性の存在を思い出す。

好きあっていたのに、結局５歳年上のリサは、
３０歳も年の離れた人に嫁いだという。

やっぱり、その人との苦い恋愛経験が、
ミルワード公爵の中では、トラウマとして残っているのだろうか。

ダフネは気の毒に思って、
ミルワード公爵を睨んでいた視線を落とすと、唇をかんだ。

いつか、ミルワード公爵が本当に愛せる女性が現れるといいのだけれど。
素直に、ダフネは心の中で思っていた。

「フレージャー」
ふと、女性の声がして、ダフネはミルワード公爵が足を止めたのを知って、
自分も歩く足を止めた。
隣にいるミルワード公爵を見ると、前方を真っ直ぐ見ている。
ダフネはミルワード公爵の視線を追った。

「久しぶりね、お元気そうで」
声の主は、プラチナブロンドの髪を見事に高く結い上げていて、
フリルの美しい、真っ赤なドレスを着ていた。
身長も高く、すらりとしたスレンダーな体、
顔立ちのはっきりとした美しさは、まるで舞台女優のように堂々としていた。

「リサ」
相手の女性の名前を呼んだミルワード公爵が、
心なしか、固い表情をしている気がする。

そんな事を思って、ダフネはミルワード公爵が呼んだ名前を理解すると、
目を見開いて、もう一度その女性に見入った。

リサ！
１８歳のミルワード公爵を振った本人なの！！

驚いて見ているダフネに、リサはふっと微笑む。
「ずいぶん、可愛らしい恋人ね」
その言葉の裏に、妙な上から視線の態度を感じて、
ダフネはカチンとくると、ミルワード公爵の腕に自分の腕を回した。
「こちら、どなた？あなたに年の近いという、例の伯母様かしら」
甘えるようにミルワード公爵の顔を見上げて、
ダフネは聞いた。
ダフネの言葉に、一瞬ミルワード公爵は目を見開いたものの、
瞬時に答える。
「いや、この婦人は古い知り合いだよ。その年の近い伯母はあそこにいる。
君に会わせよう」
言いながら、そちらの方向に体の向きを変える。
「お会い出来て良かった。それではまた」
ミルワード公爵は言いながら、リサの側を離れていった。
ダフネがちらりと振り返ると、
リサは目を細めて、ミルワード公爵の姿を視線で追っている。

「良かったんですか？私なんか余計な事を言ったんじゃないですか？」
こそこそとダフネが言うと、

ミルワード公爵はダフネの腰を抱く手に力を込めた。
「上出来だ」
一言だけ言うと、ミルワード公爵は黙り込んでしまう。

やはり、あのリサという人の存在は、
ミルワード公爵にとって、とても大きいのだろう。
きっともしかしたら、
ミルワード公爵は、まだリサさんとの過去の恋愛を、
乗り越えられていないのかもしれない。

まだ、リサさんが好きなのかもしれない。
１０年という年月が経っても。

ズキリと、ダフネの胸が痛む。

ああ、これはミルワード公爵が、
かつて感じた胸の痛みと一緒なのだろう。

叶わない思いというものは、
本当に辛いものだ。

ミルワード公爵の、その時の辛さが理解出来るだけでも、
私の辛さは報われる。
それでいいんだ。

ダフネはあくまでも演技の延長として、

ミルワード公爵の手に自分の手を重ねたのだった。

理想の恋人役

ミルワード公爵に手を引かれ、高い扉を潜り抜け屋敷に入ると、
目の前に広がる光景に、ダフネは息を飲んだ。

赤い絨毯が敷き詰められた長い廊下の先に、
抜けるように天井が高い広いホールが続いている。

眩い輝きを放つ豪華なシャンデリアが天井からいくつも下がり、
きらびやかに着飾った人々を照らしている。
その優雅な人々の合間を縫って、
たくさんのボーイが飲み物や軽いつまみを、銀のトレイで運んでいた。

ホールの奥では、生の楽団の演奏が優雅にワルツを奏でていて、
ミルワード一族の大叔母の盛況なパーティが始まりつつあった。

「まあ、ミルワード公爵。お久しぶりね。
お元気だった?」
ミルワード公爵とすれ違う紳士や貴婦人が、
ひっきりなしに、ミルワード公爵に声をかけてくる。
そして、隣でミルワード公爵と腕を組むダフネを見ると、
皆、意味深に、まるでダフネを値踏みするかのように、
じろじろと遠慮のない視線で見るのだった。

ダフネはその好奇な視線達に、

唇の端に小さな笑みを浮かべて見せるのがやっとだった。
あまりにもこの場所に、自分は場違いだという感覚に、
ミルワード公爵の恋人だという演技をしなければと考えはしても、
実行するのはかなり難しかった。
正直、ダフネは自分がこの場から逃げ出さないでこらえるのが、
精一杯だった。

カルロス、どうか私のために祈っていて。

ダフネは強張った笑みを作る努力をしながら、
双子の兄に一心不乱に祈っていた。

話しかけてくる知人の貴族や親類に儀礼的な挨拶をしていて、
ふと隣にいるダフネを見ると、
まるで罠にかかった小動物のように怯えている様子をしている。

少しからかい過ぎたか。

ミルワード公爵は、自分の腕にすがり付いているダフネが、
少し可哀想になった。

一族のパーティ会場の屋敷の入り口で、
傍の招待客から見たら、酔狂だと思われるのが狙いで、
ミルワード公爵はダフネに口づけた。

ダフネの緊張を解くというのはあくまでも口実で、
自分の目的を果たすための短絡的な手段を思いつき、
それを実行しただけのことだった。

以前から、ミルワード公爵の大叔母は、
ミルワード公爵を一族の総跡取りにしようと企んでいた。

両親を早いころに亡くしたものの、
ミルワード公爵は一族の中でも、
一番正統な血筋を引く両親に生まれていた。
母親は王族の血を引いていたし、
何よりも、ミルワード公爵自身が自分で築いた地位と名誉は、
この国の誰よりも誇れるものだったからだ。

大叔母の目に適う妻を娶り、
一日も早く跡継ぎをもうけて、
一族のリーダーたる人物の安泰を図るのが、

大叔母の狙いだった。

しかし、ミルワード公爵の中では、
大叔母の描いたような、
模範的な小さな甥になるつもりは毛頭無かった。

一族など、どうでもいい。
両親が事故で死んだとき、
本当に自分を心配してくれたのは、
古くからいた使用人だけだったのだ。
あの親戚の冷たさは、今でも覚えている。

経営が傾いていた父の海運業の尻拭いから、
血の？がった親類の誰もが逃げたのだ。
その後、必死に命をかけるつもりで、
父親の尻拭いをした息子の自分が父親の負債を乗り越え、
事業を何倍にも膨らませて、成功した。

そして、その時になって、
また親類は自分を一族の人間だと認めたのだった。

地位と財産に踊らされている人間ほど、
愚かな者はない。

これが、ミルワード公爵が身を持って知った人生観だった。

決して思い通りにならない、奔放だけれど実力を持っている親類の男。
その存在を知らしめるために、
ミルワード公爵は、
今夜の一族のパーティに久しぶりに顔を出したのだった。
ダフネという、一族にはある意味、
インパクトもダメージも強い女を連れて。

そして、今回のパーティへの出席は、
リサへのけん制でもあった。

リサは、ミルワード公爵の中では、
メランコリックな感傷的な、思い出の一つではあったけれど、
いつまでも、自分が１８歳だとリサに思われるのは迷惑だった。

それに、もう十分、
自分はリサに見返しをしたはずだった。
リサがかつて嫁いで、この間亡くなった３０歳年上の旦那よりも、
今のミルワード公爵の方が、財産も地位もしのいでいる。
だから、もう関わりたくなかった。

もちろん、１０年経った今も、
自分にとって、リサは魅力的だった。
今までのどうでもいい情事の相手の女達とは、
比べ物にならないほど。

そうなのだ。
リサ以来、女性に関して心を動かされた事が無かった。
心奪われた事が無かったのだ。

リサ以外に、もう自分は女性を愛する事が出来ないのか。
ミルワード公爵は、そんな不安を漠然と抱えていた。

もし、それが事実なのだとしたら、
なおのこと、ダフネが唯一無二の恋人なのだと演技をする必要があった。

ミルワード公爵は、緊張のせいか、
自分の腕につかまる冷たいダフネの指に、自分の手を重ねる。

もう、真実の愛を探すのは疲れた。
きっと、もう自分は誰も愛さないのかもしれない。

ミルワード公爵は、しみじみ今日のパーティに参加して、
そんな事を思ったのだった。

諦めの感情に身を任せて、
ミルワード公爵は、ダフネに優しく微笑んだ。

カルロスが復帰するまでの間、
ダフネには、親類やその他自分の周りの人間たちに、
自分は結婚する気は無いのだと知らしめるための、
都合のいい道具として働いて貰おう。

ミルワード公爵は思っていた。

けれど。

そんな事を思いながらも、改めてダフネの横顔を見て、
ミルワード公爵は感心する。

見れば見るほど、
ダフネは可憐だ。
自分が強く抱いたら、壊れてしまいそうな儚さがある。
自己主張の強かった、今まで知り合った全ての女性に比べたら、
ダフネは異色だった。

女は非力だから守られる存在だというのは、
今まで自分が知り合ったどの女達にも当てはまらなかったので、
それはたわ言なのだと思っていたけれど、
ダフネに関しては、当てはまるようだった。

ミルワード公爵のダフネを見る目が、

興味深いものに変わっていた。

パーティはまだ序盤だというのに、
ダフネは心底、疲れきっていた。

ミルワード公爵の腕に絡ませる自分の手も、
もう握力が無い。

まるで見世物のように、
高貴な人々の視線にさらされて、値踏みされて、
ダフネは改めて、自分はここに属していない人種なのだと、
思い知らされていた。

ミルワード公爵の大叔母だという、
美しい銀のドレスを纏った気高い老婦人が挨拶をした。

それまでざわついていたホールが嘘のように静まり返る。

「皆様、今宵は私のために集まってくださって、
本当に感謝しております」

年齢のわりに、
朗々たるあたりに通る声で、
ミルワード公爵の大叔母のスピーチが始まる。
ダフネはため息をついて、
一刻も早く、この茶番の芝居の幕が引けるのを祈っていた。

親族の紹介なのだろうか、
近くに並んでいる男女のペアが、大叔母の言葉が途切れると、
それぞれが招待客に頭を下げている。
そしてその度に、あたりの招待客から拍手が上がるのだった。

順番がやってきて、
ミルワード公爵とダフネの番になる。
それまで緊張に体の震えまで覚えていたダフネだったけれど、
たったその時は、ダフネの耳には大叔母の言葉は耳に入っては来なかった。

何故なら、小さい男の子を連れてきている招待客がいて、
その5才くらいの男の子が、パーティのケイタリングの食べ物を、
つまみ食いしているのを見ていたからだった。

ダフネは孤児院に勤めているという経歴上、
その男の子が次に何を引き起こすのかを、はらはらして見ていた。

スピーチに集中している大人の目を盗んで、
スティックに刺されている、

大きめのチーズを口にほお張っている。
そのチーズは、男の子の口と喉には大きすぎるように見えた。

ダフネの心配が現実になる。
良く租借出来ないまま、その男の子はチーズを飲み込んだ。
途端、喉にチーズを詰まらせる。
息が出来ないのか、体をかきむしるようにしてもがいて、
男の子は絨毯の上に倒れこんだ。

ミルワード公爵の大叔母のスピーチはまだ続いている。
しかし、そんな事を構っている場合ではなかった。

ダフネはミルワード公爵の腕から自分の手を抜くと、
ドレスの裾を引っつかみ、
その窒息している男の子に向かって、走り出した。

ダフネの突拍子も無い行動に、辺りは騒然となる。
ミルワード公爵も何が起きたのかと、
ただダフネの行動を見守っているだけだった。

ダフネが走りよって、初めてその男の子の親が、
自分の息子に何が起こっているのかを気づく。

「アーサー！」
自分の息子に何が起こっているのか知って、
驚いて固まっている母親を無視して、

ダフネは絨毯に倒れて呼吸が出来ないでいる男児の、
小さい正装の燕尾服の体を両手で持ち上げると、
そのウエストに手を回して思い切り抱き上げた。

胴を締めて、喉に詰まったものを吐き出させる為の、
応急処置だった。
働いている孤児院では、何度も実践して成功していた。

何度か、男児をそのウエストで抱き上げると、
やがて、その口からチーズの塊が、咳と共に出てきた。
男児は泣きながらも、荒い呼吸をする。

ダフネはほっとして、男児を自分の両腕から放すと、
その場に座りこんだ。

「アーサー！」
母親が男児に走り寄る。
そして、その無事を確かめると、
母親は、絨毯の上に座り込んでいるダフネを抱きしめた。
「あなたは、息子の命の恩人です。
本当に有難うございます！」
泣きながら抱きしめられて、ダフネは恐縮する。
「いえ、こういうのは初めてではないですから。
息子さんが、無事で本当に良かった。
けれど、この年頃の子供たちは、
何をしでかすか分かりません。
どうか、今後は決して、
目を離さない様になさって下さいね」
ダフネは母親に言うと、にっこりと笑って見せた。

ふと、辺りから拍手が起こる。
最初は、パラパラだったものが、
しばらくすると、ホールを割るかのような大きな拍手になった。

ダフネはきょとんとして、辺りを見回す。

ミルワード公爵が、その拍手の中、
ダフネの方に歩いてきた。
その顔は、今まで見たこともない様な、
魅力的な微笑を湛えている。

ダフネが絨毯の上で座り込んでいる場所にたどりつくと、
ミルワード公爵も、ダフネの視線に合わせて膝を追って座った。

「君は素晴らしい。俺の理想の恋人役だ」
ミルワード公爵は言うと、ダフネを抱き寄せて口づけをした。
それは、今までになく激しい情熱を孕んだ口づけ。

一度やみかけた拍手が、また大きくなった。
と同時に、人々の感嘆の呟きのざわめきも加わる。

ダフネは、自分の唇から離れたミルワード公爵が、
満足げな笑みを浮かべるのを、
ただ湧き上がる不安な気持ちで見ているだけだった。

同じ失態

辺りの拍手が止み、注目の視線が過ぎるまで、
ダフネはミルワード公爵の腕の中で、ぎこちない笑みを浮かべていた。

「皆さん、飛んだハプニングでご紹介が遅れました」
途切れたスピーチを、ミルワード公爵の大叔母は続けるのに、
ダフネは顔を上げる。

「ご存知のように、私には子供がいません。
なので、ゆくゆくは私の跡目は、
そこにいる甥のフレージャーに継がせようと思っています」

マイクに向かって話を続けるミルワード公爵の大叔母は、
大分年齢のためにその髪の色は褪せているとはいえ、
伸びた背筋と凛とした姿勢には威厳がある。
そして真っ直ぐな強い視線を向けて、ミルワード公爵を手で指し示した。

「なので、もし良い縁談があれば是非ご紹介して頂けたらと思っています。
もうすぐ三十になるというのに、ふわふわと落ち着かなくて困っております」
大叔母はマイクに向かって小さく苦笑してみせる。

今夜、ミルワード公爵と一緒に会場にやって来ているダフネのことなど、
大叔母は、まるきり見えていないかのようだった。

周りの招待客は、その大叔母の言葉にどう反応していいのか、戸惑っている。

たった今、子供の窮地を救ったミルワード公爵の恋人に拍手をしたばかりなのに、
その恋人はミルワード公爵の大叔母の公認の相手ではなかったのだ。
どちらかというと、わざと壇上でダフネを無視してみせるのを見ると、
公認どころか、反感を抱いている様子が見える。

招待客達はざわめいた。
大叔母の機嫌を損ねては、自分達の進退に影響がある。

ミルワード公爵は目を細めて、壇上の大叔母を見た。
相変らず強引で自分勝手で冷酷な人だ。
ミルワード公爵が大叔母を睨むようにして見ていると、
大叔母は壇上で小さく微笑んだ。

昔から同じ。子供の甥を見るような上から目線の微笑み。

大叔母がスピーチを終えて壇上から降りると、
ミルワード公爵はダフネの腕を自分の腕から外し、
「少し待っていろ」
ダフネに声をかけて、急ぎ足で大叔母の方へと歩いていった。

ぽつんと一人残されたダフネは、心細く辺りを見回す。
子供の窒息を助けた時には温かかった人々の視線が、
今はまるで見てはいけないものを見るかのように、
ダフネが視線を流すと、誰もが目を伏せるのだ。

どうしようもなく心細くなって、
ダフネはミルワード公爵の姿を視線で探した。
見るとずっと離れた場所で、たった今壇上でスピーチをしていた大叔母と、
何か早口で話しているようだった。

「あなた、お名前は？」
ふと、声がしてダフネは振り返る。

そこには真っ赤なドレスを着ている、
あのミルワード公爵のかつての恋人、
リサの姿があった。

ダフネと同じプラチナブロンドの髪を高く結い上げ、
グラマラスなのにすらりとしたその完璧なスタイルに、
ダフネは気後れしてしまう。
そういえば、今日のメイクはこのリサに似せて、
ナイルズが自分に施したものではなかったか。
比べればまるで貧相な自分なのに、
メイクだけはリサに似せているなんて。
そんな事も思い出して、ダフネはますます俯き加減になった。

「ダフネ・クレインです」
消え入るようにダフネが言うと、
リサは微笑んで、グッとダフネに顔を近づける。

「ねえ？今でもフレージャーはベッドの中で、
女性の耳たぶに、歯を当てるのが好きなのかしら？
変わった癖だけど、可愛らしいわよね？」
もと人妻で年上の貫禄を見せ付けているように、
そして、かつて本当の恋人同士だったのを、
まるで偽の恋人をしているダフネに、
知らしめるかのように言うリサに、ダフネは言葉を失った。

ベッドどころか、
実はダフネはキスだって、ミルワード公爵が最初の相手だった。

黙っているダフネに、リサは首を傾げる。
「もしかしてあなた達、ベッドはまだなの？」
くすりと笑うリサに、ダフネは何も言えなかった。
「それじゃあ、恋人とは言えないわね？」

ミルワード公爵が大叔母とこちらに歩いてくるのを見て、
リサはダフネの側から離れて行った。

確かに、偽の恋人だから。
これは契約だから、ベッドなんて一緒に入る事なんて無いし、
だからと言って、何故それをリサにどうのこうの言われなきゃいけ

ないんだろう。
世の恋人は、常に過去の恋人の干渉を受けたりするものなのだろうか。

リサのさっきの言葉が蘇る。
「ねえ?今でもフレージャーはベッドの中で、
女性の耳たぶに、歯を当てるのが好きなのかしら?」
妄想が瞬時にダフネの脳裏に浮かぶ。
けれど、ダフネは必死でその妄想を消した。
偽者の恋人の私には、関係の無い事なんだから。

「ダフネ」
ミルワード公爵がダフネに声をかける。
ダフネは我に返って、ミルワード公爵を見た。

その背後には、
壇上のスピーチでダフネを無視した大叔母の姿があった。

非常に冷たい視線で自分を見ているミルワード公爵の大叔母に、
ダフネは青ざめながらも、自分の役目をしなければと気を引き締めた。

「こちらが今、俺が付き合っている女性です。
きちんとご紹介をしなければと思っていました」
ミルワード公爵の言葉にも、大叔母は片眉を上げて見せただけで、
無言でダフネを見ている。

ダフネはなるたけ上品に見えるように、ゆっくりと頭を下げてお辞儀をした。
「初めまして、ダフネと申します」

「あなた、どこのご出身？」
ダフネの言葉を遮るようにして、大叔母が言う。
「港町です」
ダフネが答えると、大叔母は納得したように頷いた。
「フレージャー、あなたの亡くなったお父様も、
こうした戯れが好きでした。
港町の娼婦と遊び歩くなどという、
悪趣味があったわ」

大叔母の言葉が理解できず、ダフネは呆気に取られて、
ただ黙って大叔母を見ているだけだった。

ミルワード公爵は大きくため息をついて、
釈明をしようとする。
「ダフネは娼婦などでは…」

「一体何を根拠に、私を娼婦だと？」
ダフネは言葉の意味をようやく理解すると、
ミルワード公爵を遮り、
怒りを抑えた冷静な口調で、大叔母を見て言った。

「港町などという、どこの国のものが出入りするか分からないような、
　胡散臭い町の出身なら、あり得ることでしょう？」
しらっと言う大叔母に、ダフネはカチンと来ると強い口調で続けた。

「私が体を売っている現場をご覧になったというなら別ですけれど、単に港町出身だからと、そういう発言をなさるのはどうかと思います。

港町というのは、その国が他の国々と行う貿易交易の玄関口です。港町の程度が低ければ、他の国に相手にされず、その国の国交は栄えることもなく、国の発展など望めません。特に、このマルターナのように小さな島国が栄えていくためには、他の国々との交易が重大になるのです」

ダフネは頭の片隅で、

ミルワード公爵の従順な恋人役に戻らなければと思うのだけれど、怒りに火がついてしまった今は、どうにも口を開くのをやめられなかった。

「国々の文化、産業、経済の全てが、港町を通って出入りします。港町は常に、時代の最先端の情報で溢れています。日々の物事は他の町よりも、速く移り変わりいく性質があります。港町で生活をしている住人は毎日必死で、それらの物事に追いついていく努力をしているのです。他の町の住人よりも怠惰な人は少ないはず。事実を何も知らずに、単なる先入観で」

ミルワード公爵の大叔母だけではなく、今は周りの招待客も、ダフネに注目していた。

「港町や港町の住人を馬鹿にすることは、恥ずかしい事なのではないでしょうか。

もう少し、情報を集められるなり、勉強なされた方がよろしいかと思います」

最後の方は消え入るような小声になると、

ダフネはこらえきれずに、大叔母の前から小走りに離れた。

「ダフネ！」
ミルワード公爵の声がする。
ダフネは立ち止まらなかった。

もう無理だわ。

出来はどうであれ、恋人の振りをするダフネの容量は、
今夜はもう超えていた。

小走りに屋敷の外に出ると、ミルワード公爵がダフネに追いつく。
そして腕を掴んで、ダフネを抱き寄せた。

「大叔母の無礼には謝る。だから機嫌を直してくれ」
ミルワード公爵はまるで子供をあやすかのように、
ダフネを両手で背中から、優しく抱きしめた。

張り詰めていた気持ちが緩んで、
ダフネの目から涙が溢れる。

「リサさんの無礼にも、謝ってくださいますか？」
ダフネがミルワード公爵を見て言うと、
ミルワード公爵は目を見開いた。
「リサが君に、何かしたのか？」
ダフネは涙を拭いて、それには答えずにいる。
ミルワード公爵もリサの嫌がらせが想像出来るがゆえに、
それ以上何も聞けずに黙っていた。

屋敷の外の外灯の淡い黄色の光の下、
しばらく、ダフネは黙って、
ミルワード公爵に背中から抱きしめられるままいた。

「ひとつ、お願いがあります」
ダフネがふと口を開く。
「なんだ？」
ミルワード公爵が優しい声色のまま聞いた。

「もう、私に口づけをするのはやめて下さい」
涙がたまった目で、ダフネはミルワード公爵を振り返って言った。

「ミルワード公爵は簡単に人前で私に口づけるから、
きっと、大叔母様には娼婦だと思われたんだわ。
もう、私そんな風に思われるのは嫌なんです」

思いもよらないダフネの申し出に、
ミルワード公爵は呆気に取られてダフネを見た。

「まさか、君。
口づけスもしたことがなかったなんて言うんじゃないだろうな」
ミルワード公爵が驚いて言うのに、
「結局、ミルワード公爵も私が港町の出身だからって、
口づけなんてしてて当たり前だと思ってらっしゃるんでしょう？」
ダフネはミルワード公爵の腕を振り切ると、
エントランスの階段を駆け下りた。

確かに、ミルワード公爵は、
ダフネがそんなに初心な娘だとは思っていなかった。

なんと。
自分も大叔母と同じことを、無意識にダフネにしていたのか。

ミルワード公爵は思いもよらぬ自分の失態に愕然として、
慌ててダフネを追った。

意外な申し出

ミルワード公爵はダフネに追いついて、
再びその手を掴む。

「悪かった」
心からの思いを込めて言うと、
ダフネが渋々という感じで振り返った。

「もう今夜は、家まで送って下さいますか？」
逃げるのをやめはしたものの、
拒絶する声色の強いダフネに、ミルワード公爵は不安を感じる。
今までに感じたことの無い自分のその感情に、
ミルワード公爵は戸惑っていた。

「まさか、もう俺の恋人を演じるのをやめたいと思っているのか」
ミルワード公爵の言葉に、ダフネは目を伏せて小さく苦笑する。
「カルロスの仕事の契約があるのですもの。
途中で投げたりすることはしません。最後までやり遂げます」
ミルワード公爵の視線を避けて、ダフネは俯いて言う。

その言葉を聞いても、ダフネが自分を置いて去りそうな気がした。
そんな事を思う自分に、ミルワード公爵は改めて戸惑っていた。
一体、俺はどうしたというんだ。

帰りの車の中、

無言で隣に座るダフネを、ミルワード公爵はじっと見ている。
「そうだ、今夜の不快な思いをさせた埋め合わせに、
宝石を買ってやろう。何でも好きな物を」
言うと、ミルワード公爵は運転手に一流の宝石店の名前を告げる。
ダフネは黙って俯いていた。

車が止まり、宝石店に着く。

今まで付き合ったどんな女達も、
リサを含め、宝石を嫌う女はいなかった。
だから、港町育ちのダフネだとて、
例外では無いに違いない。

自信満々の笑みを湛えながら、
ミルワード公爵は車を降りるように促して、ダフネに手を差し出す。

「私は、宝石なんていりません」
ミルワード公爵を見ずに、ダフネは言う。
一瞬、言葉を失って、ミルワード公爵はダフネを見た。
「じゃあ、何が欲しいんだ。今夜は何でも買ってやる」
ダフネがもしかして、自分を嫌ったのかもしれないと、
他の女に抱いた事も無い焦りを感じて、
ミルワード公爵は早口に言う。

「何でもですか？」
ダフネがミルワード公爵の言葉を聞いて、
自分に視線を戻すのを見て、ミルワード公爵は大きく頷いた。
「俺はこの国でも指折りの億万長者だ。
何でも買ってやるとも」

やはり、ダフネも他の女と違わないと知って、
ミルワード公爵はほっとすると、満面の笑顔になって答えた。

「ならば」
ダフネは続ける。
「港町にある肉屋に行って下さい。まだこの時間ならやっているだろうし、
あの店がこの界隈では、質も良くて安い価格でお肉を売っているので」

一瞬、ミルワード公爵はダフネの言った言葉が理解出来なくて、
呆気にとられて言葉を失った。

「今、なんて言った?」
ミルワード公爵が言うと、ダフネはもう一度同じ言葉を繰り返した。
「港町の市場にある肉屋に行って下さいと言いました」

お互いはしばらく黙って、お互いを見ていた。
ミルワード公爵は、今起きた出来事が理解出来ないという風に。
ダフネは、ミルワード公爵は意外にも、
自分と身分の違う相手との想定外の会話に慣れていないのだなと、
微笑ましくなってしまって、親しみのこもった理解をしていた。

「肉屋に行って、何を買うんだ?」
信じられないという風に、裏返った声で言うミルワード公爵に、
ダフネは笑ってしまう。

クールで、ギリシャ彫刻のように美形で、
誰よりも仕事が出来て、国の助言も求められている億万長者なのに、

単なるダフネの言葉に、戸惑っているのだ。

「もちろん、肉屋で宝石は買えません。
お肉を買うのですわ」

ダフネがクスクスと笑っていうと、ミルワード公爵の表情も和らいだ。

「肉が欲しいのか？いくらでも買ってやるが」

この言葉の後、困惑気味の表情を浮かべてミルワード公爵は続けた。

「どうして、肉が欲しいんだ？
どうしようもなく、今食べたいのか？」

このミルワード公爵の言葉に、ダフネは堪えきれず噴出した。

「私は普段、港町の孤児院で働いています」

ダフネは説明する。

「国に承認されている施設と言えども、予算は厳しくて、
施設の子供たちは、普段は肉など食べられない、
貧しい食生活を強いられているのです。
なので、ミルワード公爵のご協力を頂けるなら、
子供たちにお肉をたくさん食べさせて上げたいなと思ったので、
お肉屋さんと言ったのです」

「なんだ、そういう事なのか」

ミルワード公爵はダフネの言葉に驚きながらも、
腑に落ちて、ほっと微笑む。

「港町の肉屋に向かってくれ」

そして、行き先をダフネの要望どおりに、
運転手に伝えた。

「有難うございます」

ダフネは小さく頭を下げると、また車窓に目を戻した。

しかし。
ミルワード公爵は思う。

自分の欲求よりも、孤児院の子供たちの要求を自分に求めるとは。

ダフネは宝石はいらないと言って、
それでも何か穴埋めをと申し出る自分に、
自分が普段勤める施設の子供たちの食事を願ったのだ。

こんな女は、見たことが無い。

ミルワード公爵は、しみじみダフネの横顔に見入るのだった。

痛烈な興味

車は次第にゴミゴミとした下町に入って行く。
夜もまだ早い時間、店々は煌々と店先の明かりを灯し、
商売をしていた。

小さい店の軒先で車が止まる。
綺麗とは言い難い、雑多な商店街。
入り口にかかる古びた木の看板に、
ダフネが運転手に言った肉屋の名前があった。
笑顔になって、ダフネは車から降りて店に入って行く。

食品の買い物など、もちろん屋敷付きの使用人の仕事で、
自分ではしたことなどあるわけもないミルワード公爵は、
薄汚い店に入るのに一瞬躊躇したけれど、
ダフネの様子があまりに楽しそうだったし、
肉をダフネに買ってやると言ったのは自分なので、
しょうがなく、自分もダフネの後について車を降りると、
肉屋に入っていった。

店先に止まっている黒くて大きい高級車、
パーティに参加したままのドレスとタキシード姿は、
下町の肉屋では異様だった。
通り過ぎる通行人が、驚いたようにミルワード公爵の車を見て通り過ぎた。

店に入ってきたダフネとミルワード公爵を見て、
肉屋の店主が汚れた白衣姿で、
ギョッとして店の入り口を振り返る。

「今、施設には４０人の子供たちがいます。
一番安いのでいいので、牛肉を5キロと豚肉を5キロ、
鶏肉を5キロ、買ってもいいですか？」
ダフネが振り向いて、ミルワード公爵に言う。
ミルワード公爵は頷いた。
そして、屈託なく笑っているダフネの表情に見とれた。

女というのは、
こうも無防備に無邪気に笑うこともあるのか。
ミルワード公爵は思う。

世にプレイボーイと言われたミルワード公爵は、
今までに付き合ってきた数え切れないほどの、
上流階級の女達を思い浮かべて、
ダフネと比べると混乱した。

というか、ダフネは本当に俺の知っている女達と、
同じ女なんだろうか。
昼間は男装しているし、もしかしたら、
普通の女ではないのかもしれない。

そんな自分でも馬鹿げていると思うことを、
ふと、ミルワード公爵は真面目に思ってしまうのだった。

大きな肉の塊を三つ包んでもらって、
ダフネはミルワード公爵を振り返る。

自分の中でダフネについて葛藤していたミルワード公爵は、
我に返って、肉屋に料金を支払うと、
包んで貰った肉を受け取った。

「あの、私が持ちます」
ダフネが言うと、ミルワード公爵は首を左右に振る。
「こんな重いものを女性に持たせるわけにはいかない」
ミルワード公爵がいうと、ダフネは明るく笑った。
「こんな重いもの？私は平気です」
言うと、ミルワード公爵から肉の包みを奪って自分で抱える。
「買って頂いて、その上運んで頂くのでは、
私の気持ちがすみませんし。私が持ちます」
「しかし、１５キロもあるんだぞ？」
さっさと肉の包みを抱えて店から出ようとしているダフネに、
ミルワード公爵は、その背中越しに声をかける。
「慣れていますから。幼い子供でも、

抱きかかえたら、１５キロなんて当たり前なんですよ？」
肩越しに振り返っていうダフネに、
ミルワード公爵は言葉を失う。
その間に、さっさとダフネは店の外に出てしまった。
ミルワード公爵も慌てて、店の外に出る。

車に乗ると、肉の包みを抱えたダフネはニコニコとしていて、
大叔母のパーティでの不機嫌は、どこかに飛んでしまったようだった。

「何でそんなに肉が嬉しいんだ？」
ダフネの隣に座りながら、ミルワード公爵は今はもう、
心に浮かぶ自分の疑問を、素直に口にした。
ダフネは自分の想定内に納まる女ではないのだから、
疑問をぶつけるしか答えは見つけられないと、観念したのだ。

「普段、子供たちはタンパク質の補給のために、
安い豆の料理ばかりを食べています。
栄養的には、肉と変わらないくらいなのですが、
育ち盛りの子供たちが、毎日毎日豆料理を食べているのです。
それだって、食べられるだけでも有難い事ですけれど、
でも出来るなら、お肉を食べさせてやりたいなと、
私は、常々思っていたものですから」
ダフネは答える。
「だから、今日、こんなにたくさんお肉を買って頂けて、
本当に嬉しかったです。
ミルワード公爵さまは、お優しい人なんですね」

ダフネの真っ直ぐな視線に、
ミルワード公爵は思わず、目を伏せる。
「俺は今夜、お前が嫌な思いをした穴埋めをしようとしただけだ」
「それでも」
ダフネが続ける。
「本当に感謝しています」

ミルワード公爵が目を上げると、
ダフネはまだ自分を真っ直ぐに見て、微笑んでいた。

ミルワード公爵は、何故かこらえ切れず、
もう一度、目を伏せる。

どうして、ダフネはこんなに真っ直ぐに自分を見られるのだ。
それも、言葉どおりに、
無邪気な感謝に溢れている温かい視線。

自分が女に見つめられる時というのは、
どの女からも、いつも、
打算と勝算が混じり合った、自己主張の刺すような視線が襲ってきた。
真っ直ぐに自分の心の中を晒すような視線は、一度も無かった。
だから、自分もそれ相応の態度でしか、
応対したことがなかった。

今、こうしてダフネに、こんなに素直に心の中を見せられて、
どういう態度をしていいのか、

ミルワード公爵は分からなかったのだった。

「申し訳ないですけれど、このお肉を施設の冷蔵庫にしまいたいので、
施設に寄って頂いていいですか？」
ダフネが言う。
ミルワード公爵は頷いた。
ダフネが働いているという施設に、興味が沸いていた。
というより、ダフネ自身について、
ミルワード公爵はもっと知りたいと、痛烈に思っていたのだった。

無意識な微笑み

ダフネに言われるままに、
車は港町の施設にたどり着く。

町の外れ。
外灯も無いような暗い場所に、
その施設はあった。

粗末な木造の平屋の建物の窓からは、
温かい黄色い光が溢れている。

ミルワード公爵は、
その粗末な施設の窓の温かい黄色の明かりを見た瞬間、
胸を打たれていた。
大きな嵐でも来たら壊れてしまいそうなぼろい建物なのに、
理由は分からないけれど、その窓に灯る明かりほど、
温かい明かりを、ミルワード公爵は見た事が無かった。

車から降りながら、
ダフネは肉の包みを抱えなおしている。
ミルワード公爵は今度は有無を言わさず、
ダフネから、その荷物を取り上げた。

ダフネが驚いてミルワード公爵を振り返ると、
ミルワード公爵はダフネを見ずに言った。
「やはり、この荷物は女性が抱えるような重さじゃない」

照れ隠しに無表情を装いながら、
ミルワード公爵は肉の包みを抱えたまま、
施設の入り口へと歩いていく。

ダフネは呆気にとられながらも、
ミルワード公爵は自分で思ったよりも、
思いやりのある良い人なのかもしれないと思った。
小さく微笑んで、素直にミルワード公爵に肉の包みを預けたまま、
ダフネも施設に歩いて行く。

まだ夜早い時間。
とはいえ、もう幼い子達は寝ている時間だ。

ダフネは久しぶりに魂の故郷とも言える、
自分の一生の働き場所に戻ってきても、
分かってはいたのだけれど、
小さな孤児という、自分の最愛の天使たちの歓迎は、
時間的に受けられないのだろうと思うと、
気落ちするのだった。

建物の中に入ると、
案の定、公共の場のほとんどの照明は消えている。

なので、ダフネとミルワード公爵は、
施設のドアを開けて中に入ると、
台所への廊下を、なるべく静かに音のしないように歩いた。

しばらく歩くと、
台所から先に見える、真っ暗な廊下に続く部屋達のドアの隙間から、
温かい光が漏れているのが見える。
子供たちの部屋だ。

「午後9時ですから、きっとスタッフは、
子供たちを寝せようとしているのです。
絵本でも読んでいるのでしょうね」
ダフネがミルワード公爵の様子に気がついて、
きっと疑問に思っているだろう事の答えをそっと言うと、
ミルワード公爵は頷いた。

台所につくと、
ダフネはミルワード公爵から肉の包みを受け取って、
冷蔵庫にしまう。

「ここが君の本当の職場なのか？」
ミルワード公爵が台所の中を見回して言う。
「はい」
ダフネは笑顔になって言った。

壊れたものを、何度も直して使ったと分かるテーブルや椅子。
古い型の家具。
たった今、ダフネが肉をしまった冷蔵庫も、
相当な型遅れで、動いている方が不思議なくらいだった。

粗末。
その言葉の表現がぴったりの台所であり、
施設自体が、そうだった。

でも。
ミルワード公爵は思う。

煤だらけの壁に貼られた子供たちの絵。
遠足だろうか、誕生パーティだろうか、
数々の子供たちと職員の記念写真も、
所狭しと額に入れて、あちらこちらに飾られている。
どれもこれもが、楽しそうで、嬉しそうで、
笑顔に満ち溢れていた。

古臭くても、貧相でもなんでも、
ここには温かい何かが、一貫して流れている。
ミルワード公爵は、そんな事を思った。

ミルワード公爵は、子供たちの絵と写真から目を伏せた。
身よりもないという孤児たちの境遇は、
国からの予算もままならないし、
とても気の毒だと思うのだけれど、
でも、少なくとも、自分が幼かった頃よりも、
この施設の子供たちの方が幸せかもしれない。
そんなことを、ミルワード公爵は思った。

愛が、この場所にはあるのだ。

ミルワード公爵は、
自分の幼い頃を思い出す。
両親が健在な時も、
教育で有名な遠く離れた寄宿学校で、
ミルワード公爵は一人きり、子供時代を過ごしたのだった。

「ダフネ？」
ふと、声がする。

トイレでも行こうとしたのか、
パジャマ姿の幼い少女が、廊下を歩きながら目を擦り、
台所の中にいるダフネを見て言った。

「ナイケ！」
ダフネが声の主が誰だか分かると、
駆け寄って、その少女に抱きつく。
少女も寝ぼけ顔から、満面の笑顔になると、
ダフネの抱擁に答える。

ミルワード公爵は、二人の様子を眺めている自分が、
微笑んでいると知ったのは、かなり後の事だった。

純粋で素直な声色

「ダフネ、みんな、なんでこない、いってた」

片言の言葉を、ゆっくり口から押し出すように言う、
ナイケと呼ばれた幼い少女に、ダフネは驚く。
「ナイケ、何時の間に、マルターナの言葉をそんなに覚えたの？」
ナイケと呼ばれた、金髪のおかっぱ頭の少女は、
えくぼを頬にくぼませて笑顔になると、
「ナイケ、べんきょう、とくい」
自信満々に言った。
それを聞いて、ダフネは満面の笑顔になると、
もう一度ナイケを抱きしめた。

「ダフネ　こいびと？」
ナイケが言って、冷蔵庫の脇に立ち尽くしているミルワード公爵を、
子供ならではの、遠慮の無さで指をさして言う。
「違うわ、お世話になっている方なの」
ダフネが言うと、ナイケは意味が分からないようで首を傾げた。

ふと、廊下にドタバタという足音が響き、
ダフネとナイケ、ミルワード公爵は驚いて音のする方を見る。

温かい明かりが漏れていたドアが、
全て開いていて、今は眩しく廊下を照らしていた。

「ダフネ！」

「ダフネ！」
子供達の声が次々として、
暗い廊下を走って近寄ってくる足音の物凄い音に、
ミルワード公爵は身構える。

一体、何が起こるんだ？
ミルワード公爵が驚いていると、
廊下でナイケを抱きしめていたダフネに、
その足音の主達が、どっと押し寄せるように抱きついた。

「ダフネ！何で来なかったの？」
「ダフネ！心配してた」
「ダフネ、会いたかった」

パジャマ姿の子供たちが、
ダフネに、重なるようにしがみつく。

ミルワード公爵は驚きながら、
言葉を失って、ただその様子を眺めていた。

「皆、ごめんね」
ダフネがたくさんの子供たちに抱きつかれて、
もみくしゃになりながら、明るく声をかける。
「私のお兄さんが怪我をしてね、
代わりにしばらく、よそでお仕事をしなきゃいけないの。

だけど、皆の事は一日たりとも、忘れたことはないわ！愛してる！」

ダフネは明るく叫ぶように言うと、
自分に絡みつく子供たち全てを抱きしめた。

「いつ戻ってくるの？」
ダフネに抱きついている一人の少女が、
唇をとがらせて、ダフネに聞く。

「そうね」
ダフネはちらりとミルワード公爵を振り返って、
「私のお兄さんの怪我が治るまでだから、
二か月か、もしかしたら三か月かしら…」」

ダフネの言葉を聞いて、
その少女が泣きべそをかく。
「そんなに長い間、会えないの？」

「そんなに長くはならないだろうさ」
思わず口を開いている自分に、
ミルワード公爵は自分で驚いていた。
「そんなにかからず、
必ず、ダフネはここに戻ってくる」

ミルワード公爵の言葉に、
ダフネが驚いて、ミルワード公爵を見る。

真っ直ぐなダフネの視線に、

ミルワード公爵はたじろぐと、目をそらした。
「秘書の代わりはいくらでもいる」
照れ臭さを隠すために、
わざとぶっきらぼうに言ってしまった後、
ミルワード公爵は後悔した。

「それは、兄のカルロスの怪我の治癒に、
想定以上の時間がかかったら、
兄は、仕事をクビになるということですか」

それまでとは違う、感情の無いダフネの声に、
ミルワード公爵はひるむ。
そして同時に、自分の胸がちくりと痛むのを感じた。

「いや、そういう意味では」
慌ててミルワード公爵は口を開くけれど、
ダフネは子供たちに視線を戻して、
ミルワード公爵の事は見なかった。

「私のお兄さんは一生懸命怪我を治しているの。
だから、じきに私は戻って来れるから」
子供たちに優しくダフネは言った。

そして、改めてミルワード公爵は思う。
兄のカルロスの怪我が治ったら、ダフネは自分の元を去るのだ。

そんな事は最初から分かっていた事だし、
ましてや、ダフネは嘘をついて試験を受け秘書の仕事を得たのだ。
全うな雇用ではない。自分の恋人役をやらせるのでなければ、
すぐにでも、クビにしてもいい存在なのだ。

心の中で呟くけれど、
そんなことが、ちっとも実感として迫って来ないことに、
ミルワード公爵は、自分で自分に首を傾げていた。

「さあ、皆もう寝なさい！」
立ち上がって、子供たちの頭の上で、
ポンポンと手を数回はたきながら、ダフネは言う。

子供たちはそれぞれ、不満げながらも、
口々に返事を返しながら、
自分たちの部屋へと戻っていった。
子供部屋の入り口では、ダフネの同僚であろう大人が、
様子を見ていたらしく、子供たちを部屋に招き戻しながら、
ダフネに手を振っていた。
ダフネも、同僚に小さく手を振りかえす。

子供たちが部屋に全て帰ると、
ダフネとミルワード公爵は、施設を出た。

「今日は子供たちにお肉を買ってくださって、
本当に有難うございました」

ダフネを家まで送ると、
車を降りて、深々と頭を下げてダフネが言った。

肉を買った時は、ダフネは機嫌を直して、
もう少し、打ち解けていたと思っていたのに、
別れ際の今は、また大叔母の言動に、
気分を害したダフネに戻ってしまっていた。

自分を見ないで去ろうとするダフネに、
思わずミルワード公爵は、
「週明けも、ちゃんと仕事に来るんだろう？」
不安を滲ませて、ダフネに声をかけてしまう。

その言葉を聞いたダフネは振り返って、
きょとんとした顔で頷いた。
「もちろんです」

答えたのを、その言葉が本当なのだろうかと、
ミルワード公爵が、
必死に詮索の視線で自分を見つめているのを見て、
ダフネは何だかおかしくなって、小さく笑った。

「ちゃんと、仕事に行きます。
なんで、そんな疑り深い表情で私をご覧になるのです？」

ダフネの笑った顔を見て、
ミルワード公爵はようやく視線を緩めた。

「いや、何故だか、もう会えないかもしれないと、
そんな気がしてしまって。
馬鹿げてるな。カルロスが戻るまでは、君が秘書だった」
ミルワード公爵は、ダフネから目をそらして言った。

それはまるで今までのミルワード公爵のものと違う、
純粋で素直な声色だった。
まるで、施設の子供たちのようだ。

プレイボーイで、お金持ちで、
ギリシャ彫刻のように美しい男性のミルワード公爵が、
まるで愛情に飢えている、子供のような事を言う。

肉屋での買い物のあたりから、
ミルワード公爵の意外な部分が、
ちらりちらりと見えていて、戸惑いながらも、
今までとの印象のギャップに、
ダフネは、ミルワード公爵に興味が湧いてきていた。

でも、恋人を演ずる契約の時の、
ミルワード公爵の言葉がよみがえって、
ダフネはそのときめきを打ち消す。

「決して、俺を好きになるな」

ミルワード公爵は、確かにそう言ったのだ。

あくまでも、カルロスの仕事の存続のために、私はミルワード公爵の側にいるのだ。

それを決して忘れないようにしなければ。

ダフネは改めて、自分に言い聞かせていた。

それぞれの悔い

週明け。
いつも通りミルワード公爵は、
就業時間の一時間早く、執務室にいた。

しかし、仕事の書類を手にしながらも、
ちらりちらりと執務室の扉を見てしまう。

ダフネが、今出勤するのではないかと、
その扉が開くのが、待ち遠しい自分に気が付き、
ミルワード公爵は、自分で驚いていた。

この俺が、
ダフネが早く来ないだろうかと、思っているのか？
思う自分に、首を小さく振る。

まさか。

そう心の中で、自分に言い聞かせるけれど、
自分への疑いは、時間が過ぎるほど、
確固たるものになるのだった。

やがて始業の時間が来て、執務室の扉が開き、
男装をした青い秘書の制服、黒髪のダフネが入ってくる。

ミルワード公爵の心臓がドキリと音を立てた。

ダフネは扉を閉めると、その場でミルワード公爵に一礼して、
「お早うございます」
と、声をかけてくる。

ミルワード公爵は書類に目を落としていて、
ダフネが入って来たのに気が付かなかった振りをして、
ワンテンポ置いて顔を上げた。

「ああ、お早う」
何気ない口調を装って書類を見ながらも、
ミルワード公爵はダフネの様子を盗み見る。

ダフネはいつも通り、
執務室の入り口の自分のデスクに行き座ると、
ミルワード公爵を見ずに、自分の仕事を始めた。

何故、ダフネは俺を見ないんだ?

ミルワード公爵は、心の中で不満気味に呟く。

他のどんな女達も俺を無視して、

自分の仕事などをするような者はいなかったのに。
いや、もちろん女達と、
一緒に仕事をしたわけでもない。
というか、俺が今まで知り合ったような女達とは、
一緒に仕事をするなど不可能だ。

今まで俺が知り合った女達は、
地位や名誉のある男に気に入られ、
その妻になることだけを考えているような女ばかりだった。
着飾ることや、華やかな場所に出向いて行く事だけに、
楽しみや生きがいを見つけているような。

ミルワード公爵は、心の中でそこまで考えて、
首を傾げる。

ならば、今俺の執務室にいるダフネは、
一体、どんな女なのだろうか。

青い秘書の制服を着て男装して、
その辺の男以上の仕事をする女。

社交界のどんな女達も妻になりたいと願うような、
地位も名誉もある自分の事をまるで見もせず、
デスクに座り、つまらない書類仕事を淡々とこなしている。
兄のカルロスのため、身代りになって自分を犠牲にまでして。

「もう、私に口づけするのはやめてください」

大叔母の屋敷での、ダフネの声がミルワード公爵の脳裏に蘇る。

「ミルワード公爵は簡単に人前で私に口づけるから、
きっと、大叔母様には娼婦だと思われたんだわ。
もう、私そんな風に思われるのは嫌なんです」

ミルワード公爵の胸が小さく痛む。
それは後悔に似た痛み。

それまで、ダフネを軽く扱っていたのは本当だった。
何故なら、男装をしていない時のダフネは女だったし、
ミルワード公爵は、自分の口づけを疎む女が、
この世にいるのを知らなかったのだ。

そして、またミルワード公爵の脳裏に、
肉屋で肉を買ってやった時のダフネの笑顔が浮かぶ。
無邪気で無防備な、あの笑顔。

今ではもう、書類を読んでいる振りをするのも忘れて、
ミルワード公爵は、ダフネを見つめていた。

ふと、ミルワード公爵が自分を見ている気がして、

ダフネは顔を上げる。

すると、ミルワード公爵は、
相変わらず書類に顔を伏せているので、
ダフネは首を傾げた。
確かに、視線を感じたと思ったのに。
そんなことが、朝出勤してから何度もある。

しかし。

ダフネは思う。

最初の高官試験で出会った頃の、
ミルワード公爵の印象と、今の印象では、
ダフネの中では大きく変わりつつあった。

最初のミルワード公爵の印象は最悪で、
見た目だけ美しいだけの、
傲慢で、冷たい氷のような男という印象だったけれど、
ダフネが大叔母の家でのパーティで、
嫌な思いをしたお詫びのプレゼントの宝石の代わりに、
肉を買って貰うと言った時の、あのミルワード公爵の表情には、
思うことがあった。

そして、ダフネが勤めている施設を訪れた後、
少し不機嫌になった自分へ、来週も仕事に来るのかと言った、

ミルワード公爵のあの不安な口調にも。

ギリシャ彫刻のように美しく、
若くして成功し、地位も身分も高くて、
人間離れしているとさえ思ってしまうミルワード公爵も、
本当は思っていたよりも、親しみ深い人なのかもと、
ダフネは思っていた。

ダフネが仕事の手を休めて、
ミルワード公爵をじっと見る。

ミルワード公爵は、書類に目を落としているので、
自分が見つめているのには、気が付いていないようだった。

相変わらずのギリシャ彫刻のような美しさだけではなく、
昨夜、感じた親しみが、
ダフネの心の中だけに納めている、
ミルワード公爵への憧れに拍車をかける。

何故、自分は、
「もう、私に口づけするのはやめてください」
なんて言ってしまったんだろう。

ダフネは思って、自分で打ち消す。

いや、本当にそう思ったのだ。
軽々しく扱われたくなかったし、
大体、そんな気軽な口づけのせいで、
ミルワード公爵の大叔母さまは、
自分を娼婦だと思ったのだろうし。

でも、もう二度と、
ミルワード公爵には、口づけて貰えないのだろうか。

自分で言ったくせに、
その自分の言葉を後悔している事に、
ダフネは驚いていた。

しかし、そこでハッと思い出す。
ミルワード公爵の言葉。

「俺を決して好きになるな」

そうだった。
これは契約。
昼間は男装の秘書、そしてプライベートは恋人役。
割り切った関係なのだ。

そして、もし自分がミルワード公爵に、
恋慕を抱いていると分かったら、
即、カルロスの仕事は無くなる。
最初から、そういう条件の取引なのだし。

そこまで思って、気持ちを入れなおした後、
何気にまた顔を上げると、
今度は本当に、ミルワード公爵が自分を見つめていた。

そのあまりに真っ直ぐなその視線に、
首を傾げながらも、ダフネもミルワード公爵を見つめた。

女にもいろいろ

「何か、御用でしょうか」
自分を見つめるミルワード公爵に、
ダフネはとうとう声をかけた。

見つめ合っているのに、
ミルワード公爵の方からは、
まるで話しかけて来る様子が無かったからだった。

するとミルワード公爵は、
まるで弾けたように、ダフネの言葉に反応して、
「いや」
言って、顔を伏せる。
そして、何事も無かったように仕事に戻っているミルワード公爵に、
ダフネは納得が行かなくて、席から立つと、
ミルワード公爵のデスクに歩いて行った。

ミルワード公爵のデスクの前に行くと、
「何か、仰りたいことがあるなら、
どうか、仰って下さい」
言って、ミルワード公爵の言葉を待つ。

「別に言いたいことは無い」
ダフネを見ようともしないで、
口の中で呟くように言うミルワード公爵に、
ダフネは小さく首を傾げるけれど、
それ以上は何も言わずに、自分の席に戻った。

そしてまた、しばらく仕事をしていると、
ミルワード公爵が自分を見つめているのを見つける。
ダフネはため息をつくと、また席を立って、
ミルワード公爵のデスク前に行くのだった。

「一体、私の何がお気に障っているのでしょうか？」
冷静な口調を装うけれど、
苛立ちはごまかせない。
仕事の支障になるのだ。視線が気になってしょうがない。

「いや…」
ミルワード公爵は自分の目の前に立っているダフネを見て、
また目を伏せる。
「公爵？」
ダフネの強い口調に、ミルワード公爵は顔を上げた。

「考えていたんだ」
ようやくのミルワード公爵の言葉に、ダフネは首を傾げる。

「ダフネ、お前は、
俺の知っているどんな女とも違う。
他の女達のように馬鹿でも無知でもない上に、

男以上に仕事も出来る。
それに、俺のオフィスで働いているお前は、
男装もしているしな。
混乱するんだ。本当に、お前は女なのか？」

ミルワード公爵の言葉に、一瞬呆気にとられたものの、
ダフネは噴出した。

「ミルワード公爵、女にも色々あります。
上流階級の女性達は、
日々の生活費を稼ぐ仕事をしなくても生きて行けますから、
自力で生きる術を知る必要も無いのでしょうね。
でも、港町の女は、男以上に必死で働かなければ、
自分の家族すらも守れませんから。
その辺の腑抜けな男たちよりも、ずっと逞しくて、
賢いのですよ。
女がか弱いなんてデマが、世の中に流れてるとしたら、
それは間違いです」

ダフネの言葉に、ミルワード公爵は、
考えるようにして頷く。

「確かに、ダフネ、お前を見るとそうなのだろうな」

しばし、二人の間に沈黙が流れる。

「ならば、男というのは、
ダフネ、お前のように強い女にとって、

どういう存在なんだ？一人で稼ぎ生きて行けるなら、
男などいらないだろう？」

あまりに真摯なミルワード公爵の言葉に、
ダフネはクスリと笑う。
ある意味、ミルワード公爵は純粋なのだ。

「私にとって、男性とは、
いつか一生を共に出来る、
愛情を育める相手を見つける対象です」

ダフネの言葉に、ミルワード公爵は黙る。
そして、しばらくして口を開いた。

「女がてら、稼いで一人で生きて行けるのに、
何故、男と生涯を共にしようとするんだ？
一人の方が気楽だろう？」
ミルワード公爵が言う。

「ただ稼いで食べて、生きていくというのは、
無味乾燥で、詰まらないものです。
なんで、人間は男女があるのだと思います？
二人で一つになるように、作られているからですよ？」

ダフネの言葉に、ミルワード公爵が笑う。

「俺は、そうとは思えないがな」
「お気の毒に」
ミルワード公爵の言葉を打ち消すように、

ダフネは強く言った。

ミルワード公爵は目を細めながらも、
穏やかに言葉を続ける。
「ダフネは、自分の対の相手の男が、
見つかると思っているのか？」

「もちろんです」
即座に、ダフネが答える。

「いくら一人で暮らせるような、稼ぎのある強い女でも、
男性と二人でなければ、家族は持てませんから。
私は家族が欲しいんです。賑やかな家庭が欲しい」
ダフネは胸に手を当てて、憧れを口にする。

ミルワード公爵は、ダフネのその言葉を聞くと、
もう黙って書類を見たきり、
何も言わなかった。

「ミルワード公爵？」
ダフネが、黙り込んだミルワード公爵に声をかける。

「無駄な話をして、申し訳なかった。
仕事に戻ってくれ」
感情の無い平坦な声で、ミルワード公爵が言う。

一体、ミルワード公爵というのは、
どういう人なのだろう。

ダフネは、自分のデスクに戻りながらも、
考えあぐねていた。

外でのランチ

ミルワード公爵は書類に目を戻しながら、
さっきダフネの言った言葉を思い返していた。

家族。

その言葉を言って、
ミルワード公爵の頭の中に思い浮かぶのは、
幼い自分を外国の厳しい寄宿学校に送り届ける車の外で、
手を振る両親の姿だった。

泣いている自分を見て、
運転手に車を早く出すように言いつけている父親。
その学校を卒業するころには、一人前になっているだろうと、
乳母に話している美しく着飾った母親。
幼い頃からミルワード公爵の世話をしていた乳母だけが、
ぼろぼろと涙を流して、ミルワード公爵を見送っていた。

事故のせいで、今はもうその両親もこの世にはいない。
そのせいか、家族というのはどうにも、
ミルワード公爵には、ピンと来なかった。

どっちにしろ、ダフネが言うほどに、
自分にとっては家族など、
未来に憧れ描くようなものではないような気がする。

一族というものなら、もう少し理解しやすいかもしれない。
家柄だけは良い、海千山千の魑魅魍魎の集まり。

この間の大叔母のパーティを思い出して、
ミルワード公爵は苦く笑った。

まあ、俺の家族、一族など、
ろくでもないことには変わりがないが。

ミルワード公爵は、席に戻ったダフネをちらりと見て、
ダフネと家族を持つという男とは、
一体どんな男なのだろうと思った。

あの黒いかつらの下には、
プラチナブロンドの美しい髪がある。
あのだぶついた青い制服の下には、
白くなめらかな肌、華奢な細い腰。

施設でのダフネの無邪気な笑顔が、フッと脳裏に蘇る。
あの微笑みが他の男に向けられるのか。

心の中で呟いて、
自分がイラつくのが分かった。

ミルワード公爵は首を傾げた。

一体、このイラつきはなんだ？

ミルワード公爵は目を細めて、
またそっと、ダフネを盗み見た。

昼食の時間になり、ダフネは自分の持ち物から、
サンドイッチの包みを二つ取り出すと、
少し迷ったものの、一つを手に持ち、
ミルワード公爵のデスクまで歩いて行った。

「今日はターキーサンドです。
お口に合うといいのですけれど。
良かったら召し上がって下さい。
子供たちにお肉をたくさん買ってくださって、
本当に有難うございました」

キルトに包まれたサンドイッチの包みを、
ミルワード公爵のデスクの上に置くと、
ダフネは一礼をして、執務室の外へと出ていく。

今日も天気がいいので、
ダフネはまた敷地内の公園のベンチで、
昼食を食べようと思っていたのだ。

穏やかな日差しに目を細めて、
ダフネはいつものベンチまで歩いて行くと、
腰掛けて、ランチの包みを膝に乗せたまま、
大きく深呼吸をしてあたりを見回していた。

子供たちと外で遊ぶこともある施設で働いていた時と違って、
秘書の仕事は、ずっと一日室内で仕事をしているので、
昼休みに外に出るのが、とても良い気分転換になった。

目を閉じると、まぶたの上で木漏れ日がきらきらと揺れるのが分かる。
ダフネはにっこりと笑って背伸びをした。

ふと、ダフネの隣にドスンと腰を掛ける気配がして、
ダフネはハッと目を開けて、自分の隣を見た。

「ミルワード公爵！」

真っ直ぐ前を向いてダフネを見ないまま、
ミルワード公爵がダフネのベンチの隣に腰掛けていた。

黒い上着の下、白いシャツのタイは外してあって、
二つほどボタンが外してある。
執務中とは違う雰囲気に、ダフネの心臓がドキリと音を立てた。

「外で飯を食うなんて、初めてだな」

ミルワード公爵が言いながら、
持参して来た、ダフネのサンドイッチの包みを開く。

「え？初めてなんですか？」
ダフネはミルワード公爵の言葉に驚いて訊いた。
ミルワード公爵は包みを開ける手を止めて、
ダフネを見ると、首を傾げる。
「初めてなのが、何か変か？」
「だって！」
ダフネは答える。
「小さい頃、ご両親とピクニックとか、
学校では遠足とか、外で食事をする機会っていうのは、
子供時代には、たくさんあると思うのですけれど」

ダフネの言葉に、ミルワード公爵は肩をすくめる。

「俺は7歳の頃から18才まで寄宿学校に入っていたし、
それ以前も仕事で忙しかった両親と、どこかに出かけた記憶はないな。
乳母が公園など散歩に連れて行ってくれたことはあったけれど、
飯は外で食うなんてしなかった」

その言葉に、ダフネは思う。
ミルワード公爵は、かなり寂しい子供時代を送ってきたのかもしれない。

愛情を十分に注いで貰わなかった子供は、
愛を知らない大人になる。

ミルワード公爵が女性に対して、
偏見とも思える偏った価値観があるのも、
そういう幼少時のトラウマがあるせいなのかもしれない。
ダフネは思った。

「じゃあ、今日がミルワード公爵が、
外で食事をする初めての日ですね」
ダフネは明るい声になって言う。
「きっと、病み付きになりますよ！」
笑顔で言うと、ダフネは自分の包みを開きだした。
ミルワード公爵も、自分の分を開きだす。

柔らかいバゲットに縦に切れ目を入れたものに、
燻製にしてあるターキーの厚切りとオニオン、ピクルスにレタス、
トマトのみじん切りとガーリックの効いたドレッシングがはさんである。
今日のサンドイッチもボリュームたっぷりなものだった。

二人とも各々が、それぞれのサンドイッチに齧り付く。

ジューシーなターキーと、

フレッシュで爽やかな野菜とが、
トマトとスパイシーなドレッシングのハーモニーを伴って、
口の中一杯に広がる。

もぐもぐと咀嚼しながら、
お互いの顔を見合わせる。

言いたいことは一緒だった。

最初の一口を飲み込んで、
先に言葉を発したのは、ミルワード公爵だった。

「美味い」
満足げに言って、驚いたように自分の手の中のサンドイッチを見ている。

ダフネはその言葉を聞いて、満面の笑みになった。
「外で食べるから、余計に美味しいんです。
私の作った普通のサンドイッチでも、
良い天気の外の空気と一緒だから、
余計に美味しいんですよ？」

ダフネの言葉に、ミルワード公爵はあたりを見回した。
「確かに、気持ちのいい天気だな」
ぼそりと言うミルワード公爵に、ダフネは小さく首を傾げる。
「今まで、天気など気にしたことは無かった。
室内で仕事をするのには、天気など関係無かったしな」
まるで独り言のように言うミルワード公爵に、
「太陽は、神様の恵みです。施設では、

雨が降ると子供たちはがっかりです。庭で遊べないですし。
それに、私もがっかりなんですよ？
だって、外でこうしてランチを食べられないから」
ダフネが言うと、ミルワード公爵は頷いた。
「今は、良く分かるよ」
そして、またミルワード公爵はサンドイッチに齧りつく。
ダフネもにこにこしながら、サンドイッチを齧った。

「その、さっきの家族って話だが」
ふと、ミルワード公爵がおずおずと言った感じで口を開く。
「はい？」
ダフネが聞き返すと、
「もう、ダフネにはそういう対象になる男がいるのか？」
そのミルワード公爵の言葉に、ダフネは噴き出す。
「いるわけがありません。あくまでも憧れというか、
夢というか。普段は施設の仕事で精一杯で、出会いもありませんし。
このカルロスの身代りが終わって施設に戻っても、
その後、出会いが見つかるかは分かりませんね。
でも、施設の子供たちがもう、家族みたいなものですから。
最悪、素敵な男性に出会えなくても、私はもう十分幸せです」
ダフネの言葉に、ミルワード公爵はほっとしている自分を見つけて、
苦笑した。
「そうか」

その後は、
しばらく、お互いに黙ってそれぞれサンドイッチを食べる。

「今度の週末の休みは、何をしているんだ？」
ふと、ミルワード公爵が口を開く。
「え？」
ダフネはあまりに意外な質問に、ハッとする。
「もしかして、また何か恋人の役が必要なのですか？」
「いや、決まった予定が無いなら」
ミルワード公爵はダフネの言葉に、苦笑しながら言う。
「付き合ってもらって、また施設の子供たちに、
今度は果物でも魚でも、何でも必要とされているものを、
買いに行くのもいいかなと思って」

「どうしてですか…？」
ダフネは純粋に思った言葉を口にした。

ミルワード公爵はダフネの視線から体ごと反らして、
そっぽを向くようにしながら、
「宝石なんかに比べたら、取るに足りない些細な金額の買い物で、
大げさに喜ばれるのが、面白かったというか」
ぶっきらぼうに言う。

ダフネはほっこりと微笑んだ。
ミルワード公爵は本当は良い人なのだ。
ギリシャ彫刻のように美しいだけではなく、
心の優しい人。

「ご厚意は有難くお受けしますとも！
週末の休みはどうせ、施設に行くつもりでしたし、
また子供たちに美味しいプレゼントをして下さるのを、

どうしてお断り出来ます？」
少しおどけた口調で、ダフネは言った。

「安心して下さい。どんなにミルワード公爵が良い方だと分かっても、
私はミルワード公爵に恋なんてしませんから。
それが最初から、ミルワード公爵が私に望んでいらしたことですもの」

自分で言った言葉に、ダフネの胸がずきりと痛む。
所詮、最初から身分違いの憧れだ。
そもそも、ダフネはミルワード公爵自身から、
自分を好きになるなと言われている。
己の気持ちを牽制するにも、
口に出して自分に言い聞かせなければならないのだ。

ミルワード公爵は、ダフネを振り返った。
そして、自分がかつて、
上流の女たちに愛想を尽かして、恋人役を申し付けたダフネに、
確かにそんな事を言ったのを思い出した。

「ああ」
ミルワード公爵は頷くのがやっとだった。

そして、気落ちしている自分を見つけて、
ミルワード公爵は驚いていた。

サンドイッチの約束

「じゃあ、今週末は港町の市場をご案内しますね。
フルーツなんて、いつも半分痛みかけのものしか、
施設の子供たちは食べたことが無いから、
新鮮なものを買っていただければ、どんなに喜ぶ事か。
いえね、それだって市場の方たちに、
ただで分けて貰ったものばかりなので、
有難いんですけれど」

ダフネはサンドイッチの最後のひと齧りを、
お腹が一杯になってしまって、持て余しながら言う。

「フルーツなんて、いくらでも買ってやるさ」
ミルワード公爵は言うと、自分のサンドイッチは食べてしまって、
ダフネの手の中の残りを見ている。

その視線に気が付いて、ダフネは首を傾げた。

「もし、それを食べないなら、
俺が貰ってもいいだろうか」

真面目な口調のミルワード公爵に、ダフネは笑う。

「だって、私の食べ残しですよ?」

ミルワード公爵は手を伸ばすと、
ダフネの手の中から、残りのサンドイッチを取った。
そして、自分の口の中に放り込むようにして、

食べてしまう。

ダフネは呆然として、ミルワード公爵の様子を見ているだけだった。

「ダフネ、お前がカルロスの代わりに、俺の秘書としている間、予定が入らなければ、毎週施設に訪れて寄付をする。だから代わりに、こうして俺に毎日サンドイッチを作ってくれるか？」

ダフネを見ずに、その辺の景色を見ながら、ミルワード公爵は言う。

「毎週ですか？」

ダフネは声に喜びを滲ませて、ミルワード公爵を見て言うと、ミルワード公爵は、そっぽを向いて頷いた。

「お安いご用です。そうですよね、ミルワード公爵は男性なんだもの、サンドイッチ一つじゃ、足りませんでしたよね？明日からは、二つ作って来ます」

ダフネは嬉しそうな声で言うと、ミルワード公爵の腕にそっと触れる。

「ミルワード公爵の好きなサンドイッチの具とかって、ありますか？」

ダフネが腕に触れているのを見て、

ミルワード公爵は、びくりと体を動かした。

ダフネは気に障ったのだと、
迂闊にも、ミルワード公爵の腕に触れた自分の手を、
慌てて引っ込める。

うなだれるダフネに、ミルワード公爵は慌てて口を開いた。
ミルワード公爵は、女に触れられたことで、
初めてドキリとした自分に驚いて、身じろぎしたのだった。

「海老が好きだ」

声色を明るくしようとしている自分にも、
ミルワード公爵は驚いている。

ダフネは顔を上げると、ミルワード公爵の声色に、
別に怒っているわけではないのだと知って、ほっとした。

「海老がお好きなんですか！なら、海老とアボガドとオニオンと、
サウザンドレッシングのサンドなんて、きっとお気に召すと思います」

ダフネが気を取り直して、隣に座るミルワード公爵を見上げて言う。

「明日、そのサンドイッチを作ってくれるか？」
ミルワード公爵が言う。

ダフネは頷いて、
「はい、承知いたしました！」
おどけた口調ながらも、きちんと返事をした。

もちろん、もうミルワード公爵の腕には触らない。

「明日も、天気がいいといいな」
ミルワード公爵がぼそりと言うのに、
ダフネはドキリとする。

もしかして、天気が良ければ、
明日もこうして一緒に公園のベンチで、
サンドイッチを食べるということなのだろうか。

ダフネの胸の鼓動は早まる。

でも、そんな自分を心の中で、皮肉に笑うのだった。
ミルワード公爵は、私を女としてなんて見ていない。
あくまでカルロスの身代りの、都合のいい恋人役もする男装の秘書なのだ。

ダフネは小さく息をつくと、
ときめきを胸から追い出して、明るく口を開いた。

「ミルワード公爵、週末市場にいらっしゃる時は、
どうか、汚れてもいい恰好でいらして下さいね」

ダフネの言葉に、ミルワード公爵は初めてダフネを見た。

「汚れてもいい恰好？」

「冷蔵庫にしまったお肉と違って、
直接子供たちが食べられるフルーツのプレゼントなんかを、
施設に持って行ったら、もみくちゃになりますから」

ダフネが笑顔になって、ミルワード公爵に言う。

「もみくちゃか…」

不安そうなミルワード公爵に、ダフネはクスリと笑って、
「何なら、子供たちには会わないで届けた方がいいですか？」
訊いた。

ミルワード公爵の脳裏に、
子供たちに好かれている、ダフネの施設での様子が蘇る。

寝る間際だったというのに、子供たちは皆部屋から飛び出てきて、
ダフネに走り寄って来ていた。

あんなに純粋に子供たちに好かれるというのは、
どんな気持ちなのだろうか。
そんな事を思った。

ミルワード公爵は素直に、自分の気持ちを己で認めた。
施設での、ダフネに憧れていたのだ。

子供達のような純粋な存在達に、
あんなに愛されるということに。

自分は誰も愛したことが無いし、
本当の意味では、愛されたこともないかもしれない。
今までは、そんなことは、どうでもいいことだった。

でも、ダフネと知り合ってから、
ダフネに憧れた。

ダフネと知り合ってから、
ミルワード公爵は、誰かを愛したいと思う以上に、
誰かに愛されたいと思った。

こんなにひねくれた大人の自分でも、
子供たちに好かれるだろうか。
それは、目の前にある素朴な疑問だ。

「子供たちに、直接会いたい」

ミルワード公爵は言った。
ダフネは笑顔になって、

「覚悟してて下さいね。本当にもみくちゃになりますから」
言った時、昼の休憩が終わるチャイムが鳴ったのだった。

大きな温もり

あれから週末まで、
毎日、ダフネはミルワード公爵のために、
サンドイッチを二つ作って、仕事に向かっていた。

一番好評だったのは、やはり好きだと言っていた海老のサンドで、
アボガドとオニオンと一緒に挟んだサンドイッチを食べた時の、
ミルワード公爵のあの表情は忘れられなかった。

まるで子供のように、目をきらきらさせてダフネを見ながら、
昼休み、天気の良い公園のベンチで、
サンドイッチに齧り付くミルワード公爵に、
ダフネはおかしくて始終クスクス笑っていた。

「まるで、毎日ろくなものを食べていない、
施設の子供達みたいに見えますよ？」
おかしくて、ついつい無遠慮にダフネが言うと、
「施設の子供たちは、いつもこんなに美味い、
ダフネのサンドイッチを食べているとしたら、
確かに、子供たちの方が俺よりも美味いものを食ってるさ。
食べ物の味と値段は、比例しないものなんだな。
俺が行きつけの値段ばかり高いレストランのシェフに、
このサンドイッチを食わせてみたい」
ミルワード公爵が真剣に言うのに、
ダフネは照れて、また笑うのだった。

ミルワード公爵と初めて会った、
あの試験でのいかつい無表情で冷たい印象は、
もうまるきりダフネの中には無かった。

仕事では若いながらもやり手で、
国にも通商航海部門の助言を求められるくらいの、
優秀な人物。
億万長者で、見た目もまるでギリシャ彫刻のように、
美麗で端正で、女性とも次々と浮名を流すプレーボーイだけれど、
でも、それはあくまでもミルワード公爵の一面であって、
ダフネの作ったサンドイッチを美味しそうに無邪気に食べるのも、
ミルワード公爵の本当の一面なのだと、ダフネはしみじみ感じていた。

その上、これから毎週、
施設の子供たちに寄付をしようと申し出てくれている。
奇特な紳士でもあるのだと、ダフネは素直に思っていた。

こんなに自分の理想に近い男性が、
この世には存在するのだ。
ダフネは思うけれど、その思いを小さく悲しく笑って頭から追い出す。
憧れるだけ無駄なのだ。
身分違いもそもそもだけれど、
その上、ミルワード公爵には嘘の秘書と恋人を演ずる間に、

自分を好きになるなと釘を刺されている。

カルロスの怪我が治って、
秘書と恋人の振りをする期間が終わってしまえば、
もう二度と関わらない高嶺の人。
こうして今、ベンチの隣に座って話している方が、
有り得ないことなのだ。

そんな事をダフネは自分言い聞かせていた。

週末が来ると、
施設に差し入れをするフルーツなどの買い物をするために
ダフネはミルワード公爵と、港町の市場で待ち合わせた。
雑多とした人ごみの市場は、
施設に勤めるダフネにとっては、
食糧を調達するために、毎日通う慣れた場所だったけれど、
ミルワード公爵は来たことがあるのだろうかと思う。
ダフネの記憶では、
港町の市場ではミルワード公爵のような、
身なりのしっかりしている人物を見ることは無かったから、
きっとミルワード公爵は港町の市場などには来たことが無いだろうと、
ダフネは思った。

けれど、港町の市場は、外国から来て商売をしている店も多い。

国際色豊かで、出店を眺めているだけでも楽しいのだ。
ダフネはミルワード公爵を案内するのを、とても楽しみにしていた。

ミルワード公爵は運転手に言って、
港町の市場前の広場に車を止めさせると、
そのあまりに雑多に出店が混み合い、
人がごった返している港の市場を見て、
驚いていた。

市場の入り口でと、確かにダフネと約束をしたけれど、
これではお互いを見つけるのも難しいのではないか。

ミルワード公爵はため息をつきながら、
車を降りて、運転手に近場で待機するように指示すると、
人でごった返している市場の方へと歩いて行った。

ミルワード公爵は、ダフネを見つけるのは難しいだろうと思った。
けれど、市場に歩いて近づいて行くにつれ、
自分の目の中にダフネの姿が飛び込んできて、
ミルワード公爵は、自分でも驚いていた。

秘書の青い制服姿とも違う、
ミルワード公爵が買い与えたドレスとも違う、
シンプルな紺のワンピースに身を包んでいるダフネ。
その美しいプラチナブロンドの髪は二つにしばっていて、
両肩に流してあった。

市場の入り口に雑貨の出店を構える初老の老人と、
ダフネは談笑していた。

何か冗談を言っているのだろうか、
老人の言葉にダフネが大きく笑っている。
そのあまりに無邪気で無防備な笑顔に、
ミルワード公爵の胸がドキリと音を立てた。

ダフネを知ってから、何度も思っているけれど、
しみじみ、こんな風に笑う女をミルワード公爵は見たことが無かった。
ミルワード公爵の中に、
もっとダフネを知りたいという欲求が湧いてきている。

今まで俺はどんな女にも、
自分から深く関わりたいと思ったことがあったか？
自問して苦笑する。
答えは分かり切っていた。
そんな事など、一回たりとも思ったことなんかは無かったのだ。

早足で近づいて行くミルワード公爵の姿に、
ダフネが気が付いて顔を上げる。

そして、あの無邪気な笑顔になって、
ミルワード公爵に向かって片手を上げる。

それにはまるで恋人に向かった仕草かのように、
親しみが込められていて、
ミルワード公爵の胸がまたドキリと音を立てた。
そして、それに答えて、
ミルワード公爵も鼓動を抑え、
自分の気持ちに素知らぬ振りを続けながら、
手を上げて見せるのだった。

汚れてもいい恰好と、
ダフネの言った通り、
今まで見たこともないラフな服装のミルワード公爵に、
ダフネの胸がときめく。

タイの無いグレーのシャツに、臙脂のベスト。
黒いパンツ姿。
家などのプライベートな時間は、
いつもああいう服装なのだろうかと、ダフネは思う。
そして普段の服装同様、その服装もとても似合っていて、
いつもとは違うカジュアルな魅力があるのを、
ダフネは否めなかった。

美しい人は、何を着ても美しいのだろう。
男性なのにな。

ダフネはミルワード公爵に、小さな嫉妬をした。

「おやー、ダフネが男と待ち合わせなぞ、
初めて見たのう」
雑貨屋の老人が、ダフネと手で合図をしつつ近づいてくる、
ミルワード公爵を見て、目を丸くしておどけたように言うと、
ダフネを見てにんまりと笑う。
「ずいぶんなイケメンだ。彼氏かい？」
老人の言葉に、ダフネは傍で見ていても分かるくらい、
動揺した。

「ジョン爺さん、そんなわけないでしょう？
この方は、施設に寄付をして下さる奇特な紳士なの。
普段、私もとてもお世話になっている恩人よ。
変な勘違いしないでちょうだい！」
からかった老人に、強く言うダフネに、
ミルワード公爵は少し気落ちする自分を見つける。

「ごめんなさい」
改めて、老人のからかいを謝るダフネに、
ミルワード公爵は慌てて、小さく首を左右に振って見せた。
「いや、別にかまわない」
それ以上、もっと何か言葉を足して言いたいのに、
ミルワード公爵は、
女性との関係を踏み込んで言う言葉を使ったことも無いせいか、

何を言っていいのかも分からなくて、黙ってしまった。
今までの人生で、自分は器用で出来る男だと信じて疑わなかったけれど、
そうでもないのかもしれないと、そんな事を思って、
ミルワード公爵は、自分で愕然としていた。

「じゃあ、ジョン爺さん、またね！」
ダフネが明るく言うと、雑貨屋の老人は笑って頷く。
そして、ダフネに分からないように、
老人は、ミルワード公爵に向かってウィンクをして見せた。
「あの子はとてもいい娘じゃ」
小さく言う。
ミルワード公爵はそれにもなんて返していいのかわからず、
頷いて見せるだけで精一杯だった。
そして、自分は自分で思っているよりももっとずっと、
不器用なのだろうと、確信を抱き始めていた。

そして、先を行くダフネに視線を戻して、
ミルワード公爵はダフネの姿が、
ごった返した人ごみの中に消えそうになっているのに、
慌てて追いすがる。
けれど、いつも運転手の車に乗って移動しているミルワード公爵は、
人ごみを歩くのは慣れていなくて、
どんどんダフネに離されてしまうのだった。

「ダフネ！！」

ミルワード公爵が大きな声で叫ぶ。
「待ってくれ！」

何度か繰り返して声の限り叫んでいると、
大分前を行くダフネが、ようやく振り返った。
そして、上手に人ごみを避けてミルワード公爵の元に戻ってくる。

「どうしました？ミルワード公爵」
ダフネは不思議そうにミルワード公爵見上げて聞いた。
「いやその」
ミルワード公爵は口ごもる。
まさか、いい年をした大人の自分が迷子になりそうなどと、
口に出して言うのも憚られた。

「こういう風に、
　人がたくさんいる場所を歩くのは慣れていないんだ」
呟くように、自分から目を反らして言うミルワード公爵に、
ダフネは大きく頷く。
「ごめんなさい、私は自分が慣れているものだから、
　気づかなくて」
言うと、ダフネはミルワード公爵に向かって右手を差し出す。
ミルワード公爵は戸惑って、差し出されたダフネの手を見ていた。
「迷子にならないように」
面白そうな声色でダフネは言いながら、
自分の右手で、ミルワード公爵の左手を掴んだ。

「こうすることに、何の下心もありませんからね。
だから、私に触られるのを嫌がらないで下さい」

ダフネは気後れするように、小さく笑って言った。
前に自分が何気に触れた時の、
ミルワード公爵の体が、びくりと震えたのを思い出したせいだった。

「施設の子供たちと、こういう人ごみを歩くときには、
必ず手をつなぎます。ほら、小さい子供にお母さんがするように」
ダフネは小さく肩をすくめて、ミルワード公爵を振り返って言った。
「っても、ミルワード公爵は私がお母さん役をして、
手を引いて歩くには大人すぎますね。でも、迷わないためには、
これは大人にも有効ですから、どうかお気を悪くしないで」
言うと、ダフネはミルワード公爵の手を引いて、
ごった返した人ごみの中を歩き出した。

ミルワード公爵は、ダフネに手を引かれて歩きながら思っていた。
幼い頃から、外国の厳しい寄宿学校に入れられて育った自分は、
こうして親に手を引かれて歩いたことは無かった。
そして思う。
親どころか、今までのかりそめの恋人達とも、
こうして人ごみで手を繋いだことなど無かった。

そもそも、自分をここまで、心底思いやってくれる存在など、
今までの人生で、出会った事がないのではないか。

ミルワード公爵の手の中のダフネの手は、
本当に華奢で、それこそ自分の手の半分くらいの大きさしかない。

けれど、その温もりは自分手のひらどころか、
ミルワード公爵の体の全てを包み込んでしまうほど、温かかった。

甘いクリーム

すれ違う人々の体が次から次へと自分の体に当たるほど、
港町の市場は人で混み合っているのに、
自分の手を引き歩くダフネは、そんな人ごみなど気にもしないようで、
ひょいひょいと体をかわし歩いて行く。
ダフネに手を引かれていなければ、
間違いなくミルワード公爵は、ダフネを見失っていただろう。

どこまで歩いて行くのかと思いながらも、
ミルワード公爵は、左右に並ぶ出店を眺める。
異国の言葉が飛び交っていて、商品を売っている者も外人が多い。
港町のこの辺りは、異国人の商売に規制が甘いと聞いていた。
だから余計、こうして活気づいているのだろう。
並ぶ品物も、普段見かけないような珍しい物が多くあって、
市場など初めて足を運んだミルワード公爵には、
とても物珍しく面白く目に映った。

やがて、ダフネが立ち止まる。

「ボンジュー　アシル、エスシ　クア　ヤ　ル　ボン　フリ？」

そして、豊富なフルーツを並べている、
屋台の男に声をかけた。
相手はエプロンをした赤毛の大男なのに、

ダフネは臆することもない様子だ。
顔見知りなのだろうか。

それにしても、今ダフネが喋ったのは『フッツ語』じゃないか？
ダフネはフッツ語で『こんにちはアシル、今日のお勧めのフルーツは何？』
と訊いた。
ミルワード公爵は驚いていた。

「イヤル　ラ　ルクモンデションエ　アン　オロージュ
セ　スクレ　エエス　デリシュー」

相手の大男は笑顔になって答えた。
『今日のお勧めのフルーツは、オレンジだよ。甘くて美味しいよ』

「それにしても、ダフネのフッツ語は素晴らしいな」
マルターナの言葉になりながら、大男が続ける。
「有難う、アシル」
ダフネも笑顔になって礼を言った。
「それじゃあ、アシルのお勧めのオレンジを貰おうかしら。
今日はスポンサーがいるから、
ちゃんとした売り物を分けて下さいな」

ダフネの言葉に、アシルと呼ばれた大男が、
側に立つミルワード公爵に、気が付く。

「これはこれは素敵な彼氏だ」
目を見開いて言うアシルに、

ダフネが慌てて否定しようと口を開きかけると、
それを遮るようにミルワード公爵が口を開いた。

「セタジュ　ファン　オージューヒュイ　ブイリュ　ディストリビュ
　アポスメティブ　シン　ドーザン　ドロージュ」

ミルワード公爵はにっこりと笑顔になって、
アシルに向かって言う。

ダフネは驚いて、自分の後ろに立っているミルワード公爵を見上げていた。
ミルワード公爵が言ったのは、
『良いお天気ですね。では、オレンジを5ダース下さい』
というフッツ語だった。

どうして、彼氏という言葉を否定しなかったのだろう。
ここは港町の市場で、ミルワード公爵に関係のある人間などいない。
だから、別に無理をして恋人の振りをする必要も無いのに。

ミルワード公爵は、自分のベストの胸ポケットから名刺入れを出すと、
一枚名刺を取り出して、アシルに差し出す。

「請求はこちらへ。そして、これから毎週、
君のお勧めのフルーツを5ダース、ダフネのいる施設に配達してくれないか。
その費用は、全てこちらで払う」

ミルワード公爵の言葉に、ダフネは再び驚いて、

その端正な顔を見上げた。

「毎週！いいんですか？ミルワード公爵」

ダフネが自分の体に身を寄せ、自分の顔を見上げている真剣な表情に、
照れるとミルワード公爵は、ダフネから視線をそらして、
肩を小さくすくめて見せた。

「別に大したことじゃないさ」
わざとぶっきらぼうに言うミルワード公爵に、
ダフネは抱きついた。

「有難うございます！ミルワード公爵。
施設の子供たちは、常々ビタミンが足りないから、
風邪を引きやすいんだと思ってはいたものの、
なかなかフルーツなんて食べさせてあげることなんて出来なくて。
ああ、なんて優しい方なんでしょう」

ダフネが、自分の胸に抱きついて感激しているのに、
ミルワード公爵はそろそろとダフネの背中に手を伸ばすと、
添えるだけだけれど、そっとダフネの体を抱いた。

「しかし、なんでダフネ、君は、
フッツ語まで、こんなに流暢に話せるほど優秀なんだ？」
ミルワード公爵は胸の中の疑問を口に出す。

「前に、ミルワード公爵の大叔母様は、
港町の女を侮辱なさっていましたけれど、

港町の女だからこそ、幼い頃から触れている外国の言葉に、
親しみやすくなるんです。下手な高級官僚のお役人より、
私は外国語を理解できると思いますよ？」

ダフネの言葉に、ミルワード公爵は素直に頷いた。

しかし、ミルワード公爵の中に、
今まで感じたことも無いような、
くすぐったいような気持ちが、ダフネに対して生まれていて、
自分でも戸惑っていた。

ダフネが望むなら、何でもしてやりたい。
素直にそう思えるけれど、言うのは憚られる照れくさい感情。
これは一体なんだ。
今まで知り合ったどんな女にも、
感じなかったものだ。

アシルが口笛を吹いた。
「二人はとてもお似合いだよ、ダフネ」
アシルの言葉に、ダフネが弾かれたように顔を上げる。

「アシル、違うんだってば」
ダフネが焦って言い訳をしようとするけれど、
ふと、自分の体に回されているミルワード公爵の腕を見て、

ダフネは固まってしまった。

「注文はしかと受けました」
アシルがミルワード公爵に言う。
ミルワード公爵は頷いて、
空気を抱くように、胸に抱えていたダフネの体を離すと、
屋台に背を向けた。

「ミルワード公爵！」
屋台の前から歩き去るミルワード公爵を、
ダフネは慌てて追いかる。

ミルワード公爵が立ち止まって、
黙ってダフネを見ると、
ダフネはその真っ直ぐな視線に、
何も言えなくなってしまった

ダフネはぺこりと頭を下げる。
「フルーツの毎週の配達。本当に嬉しいです。
有難うございます」
ダフネが言うと、ミルワード公爵は小さく笑って頷いた。

ダフネは思う。
こんな風に、気を許しているような笑みを浮かべる、
ミルワード公爵を、見たことがあっただろうか。

あの施設に肉を買った日以来、
日に日に、ダフネはそれまで思っていたような印象とは違う、

ミルワード公爵の顔をいくつも見つける。

そして、出会った日にはこれ以上は無いというくらい、
最悪だった印象が、今は全く変わってしまった。

確かに出会った当初から、
ミルワード公爵のルックスの美しさには、
単純に憧れてはいたけれど、
それだけだったら、きっと今、
こんな気持ちにはならないはずだ。
ダフネは心の中で呟いていた。

恋人になるのが無理ならば、
せめて、友達になることは出来ないだろうか。

ダフネは唇をかみしめながら、
心の中で呟く。

だって、人生の中で、
心から失いたくないと思う人と、
どれだけ出会えるだろうか。

ダフネはミルワード公爵と、
二度と会えなくなる日が来るなんて、
もう今は耐えられなかった。

友達でもいい。
カルロスの身代わりの秘書の仕事が終わった後、
たまにお互いの近況を知らせる程度でいいから、
ミルワード公爵と繋がっていたかったのだ。

「友達は、ギブアンドテイクです」
ダフネは明るい口調になって、
思いついたように言った。

ダフネの意外な言葉に、ミルワード公爵はダフネを見て首を傾げる。
そして、市場の辺りを見回して何かを見つけると、
「ミルワード公爵、ここで動かずじっとしていて下さいね！」
言って、ダフネはミルワード公爵の前から走り去った。

「ダフネ？」
呆気にとられて、ミルワード公爵はその場に言われたまま立ち尽くす。
一人で動いたら、ここから無事に帰れるかも分からないのだから、
ミルワード公爵は、ダフネが戻って来るのをじっと待つしかなかった。

しばらくして、ダフネがミルワード公爵の元に戻ってきた。
その両手には、丸く筒のように焼かれた、

クッキーの上に乗ったアイスクリームが二つ握られていた。

「これはこの市場で、一番美味しいアイスクリームです。
そりゃ、ミルワード公爵が、
施設にご馳走して下さる金額には程遠いですけど、
でも、これはこの市場を良く知らなければ、
見つけられない極上のアイスクリームなんです。
ご馳走します。食べてみませんか？」

ミルワード公爵は、目の前に差し出されたアイスクリームに、
戸惑うけれど、ダフネの期待満々の表情に、
自分の手を伸ばして、そのアイスクリームを受け取った。

甘いものなんて、女、子供のものだと思って来ていたから、
アイスクリームなんて食べたことも無い。
それも、こうして立ち食いだ。

ミルワード公爵は自分の手のアイスクリームを見て、
げんなりとなる。

それも、この密集した人ごみの中で、
公爵という身分の男の自分が、甘いものを立ち食い。

そんな事を思うと、
ミルワード公爵はどうしてもそれを口に運ぶのを躊躇してしまうのだ。

いっそ、ダフネに謝って、
手の中のこれを返してしまうか、捨ててしまうかしようと思って、

ミルワード公爵は、ダフネを見た。

けれど、ダフネは、
まるで周りの雑踏など気にもならないように、
そして、自分が女だと言う事すら忘れているように、
大きな口を開けて、その冷たく甘いクリームを舐めていた。

今まで女性という生き物で、
こんな風に奔放に、
食べ物を食べている姿を見たことの無かったミルワード公爵は、
ダフネの姿を見て、驚いて固まってしまったけれど、
自分の視線に気が付いて、ダフネが目を上げた時には、
思わず、大きく声を上げて笑ってしまった。

本当に、面白い女だ！

そして、自分も手の中の溶けかかった甘いクリームを、
大きく口を開けて舐めた。

そんなミルワード公爵の心中の葛藤は、
まるきり知らなかったダフネは、
ミルワード公爵がクリームを舐める姿を見守る。

「美味い！」

クリームを飲み込んで、
ミルワード公爵が叫ぶように言う。

ダフネは遠慮なく、
大きい声でミルワード公爵を指さして笑った。
「もう、病み付きになりますよ！
毎週、港町のこの市場に通うしかなくなります！」

ダフネのその言葉に、
ミルワード公爵は一瞬、表情を変える。
ダフネはドキリとした。

「確かに、病み付きで、
週に一度、通う事になるかもしれない」

そのミルワード公爵の言葉に、
ダフネは、自分の手の中の食べかけのクリームが溶け出して、
服を汚していることに気が付くのは、少し後だった。

うぶな少年のような

「ダフネ、クリームが」
ダフネがぼうっとミルワード公爵を見ていると、
ミルワード公爵が、ダフネの服の裾を指で差して声をかける。

ダフネはハッと我に返ると、ミルワード公爵が指さした自分の服を見下ろす。
見ると、手に持ったクリームから溶け出した滴が垂れていて、
ぼうっとしている間に、自分の服を汚していたのだった。
「きゃ」
ダフネは慌てて垂れているクリームに口をつけて、
中身をすする。
勢い余って、口の端からクリームが流れてしまい、
ダフネが指で拭おうとすると、一瞬早くミルワード公爵の指が伸びてきて、
唇の脇のクリームをふき取った。
ダフネは驚いて固まる。
ミルワード公爵は何事でもないかのように、
自分の指についたクリームを自分の口の中に入れた。
そして、ふいと視線をダフネからそらすと、
辺りの雑踏などを眺めている。

ダフネの心臓が、ドキドキと激しく鼓動した。
ミルワード公爵は、一体どういうつもりで、

こんなに親しげな態度をするのだろう。

「あっ！そう言えば、今日施設に持っていくフルーツを、
貰ってくるのを忘れました」
ダフネもミルワード公爵から視線を外して、早口で言う。

「配達してくれるとしても、手土産として少しは持っていかないと、
格好がつきませんから。アシルからオレンジを少し貰ってきます」
ダフネは言うだけ言うと、ミルワード公爵の側から小走りに離れて、
高鳴る自分の胸と赤く染まる頬とを押さえながら、
もと来たアシルの果物の屋台へと戻って行くのだった。

ミルワード公爵は、甘い香の余韻の残る自分の指先を見る。
咄嗟に自分がした仕草は、自分が思っている以上に、
ダフネに心惹かれているのだという証拠にしかならなかった。

今までのかりそめの恋人達にも、
こんな愛情の籠った仕草をしたことはない。
ミルワード公爵は、自分に自分で苦笑していた。

カルロスの怪我が治ったら、
改めて、ダフネに交際を申し込もうか。

意地悪く自分が言い出した、
恋人の振りをする契約など破棄すると、
ダフネには謝るのだ。

でももし、ダフネに断られたら。
そんな事を考えて、ミルワード公爵は自分が怖気づくのを知った。

馬鹿な。
俺が一人の女を失うことを恐れるなど。

ミルワード公爵の頭の中が白くなる。
こんな体験など、今までしたことが無かったのだ。

ダフネを知れば知るほど、
自分という人間が小さく感じてくる。

恐れる事が出来るというのは、
守りたいと思う存在が現れるというのは、
今まで自分が頼りにしてきた、張ったりや勢いというものの、
信憑性をどれだけ、失わせるものなのか。

自分の心の身ぐるみが、
一切剥がされてしまったような心もと無い心境になって、
ミルワード公爵はダフネが戻ってくるのを、不安な気持ちで待つのだった。

ダフネがオレンジを籠に一杯持って戻ると、
ミルワード公爵は、人ごみの中にダフネの姿を見つけて微笑んだ。

今まで見たこともないような、その飾らない笑顔に、
ダフネの胸は高まるばかりだった。

ダフネの持つ籠を、ミルワード公爵が当たり前のように受け取る。
「ミルワード公爵、大丈夫ですよ？」
ダフネが遠慮しようとしても、ミルワード公爵は聞く耳を持たなかった。

そして、市場からの帰りは、
ダフネがミルワード公爵の手を引いていた代わりに、
ミルワード公爵がダフネの肩を軽く抱いていた。

恋人同士のような甘い仕草に、
ダフネは戸惑うけれど、わざわざやめてくれというほどの事でも無かったから、
そのまま市場を歩くのだった。

これが本当の甘い仕草だったらいいのに。

ダフネはこっそりと心の中で思う。
でも、好きになるなと言われている以上、
これが本物になることは無いのだと、
ダフネは自分に言い聞かせていた。

施設では、案の定、
普段あまり食べる事のないフルーツを手土産に訪れた、
ダフネとミルワード公爵を、子供たちが熱烈に歓迎した。

群がってくる子供たちに、
ミルワード公爵は少し怯えるようにして、
ダフネに言う。
「子供たちをどう扱ったらいいのか、分からないんだ」
素直な発言に、ダフネは好ましく思って微笑んだ。

「ミルワード公爵、動物は何か飼った事がありますか？」
ダフネの言葉に、ミルワード公爵は頷く。
「猟犬を二頭、訓練して育てている。
二頭とも、優秀な猟犬だと欲しがる人も多い。
もちろん、絶対ゆずるなんてしないが」
ミルワード公爵の言葉に、ダフネはにっこりとして
「子供たちを、子犬だと思えばいいんです。
このくらいの年齢の子らは、子犬となんら変わりありませんから」
ダフネの言葉に、ミルワード公爵は少し考えて、
ふと、自分の体につかまってくる男の子の一人を抱え上げると、
床に押し倒して、ふざけて腹のあたりをくすぐった。

げらげらと大きな笑い声をあげて、
その男の子は、
自分をくすぐるミルワード公爵の手にじゃれつく。

楽しげなプロレスごっこを目にした他の子供たちも、
ミルワード公爵の側にやって来ると、
次は自分の番だと、抱き上げて床に倒して貰うのを待つのだった。

出会った頃の冷たい印象は、あれは照れ屋で自分を表わす事の苦手な、
ミルワード公爵が被った仮面だったのだろう。

本当のミルワード公爵は、とても情に厚く、
優しい男性なのだ。

しみじみ、ダフネは感心して、
ミルワード公爵が子供たちと上手に遊ぶ様を眺めていた。

「保育士も真っ青ね」
同じく様子を見ていた、施設のスタッフの仲間の一人が言う。
「ええ、本当に」
ダフネは答えると、ミルワード公爵の様子をじっと見つめるのだった。

施設を出た時には、
すっかり辺りは暗くなっていて、
家の前まで車で送ってもらうと、
ダフネはミルワード公爵に深く頭を下げた。

「今日一日お付き合い頂いて、本当に有難うございました。
フルーツの差し入れも、施設の子供達やスタッフは、
非常に感激していました。心からお礼を申し上げます」

車の外に降りてきたミルワード公爵は、

ダフネの言葉に笑って首を左右に振った。

「こちらこそ、今までにないような、
不思議な楽しさを味わった一日だった。市場で食べた」
ミルワード公爵の言葉を、ダフネが続ける。
「あのクリームは、本当に絶品でしたでしょう？
もしミルワード公爵が市場に出向いて、
一人であのクリームを食べている所を見かけても、
私、声をかけず黙って知らんふりをしてあげますから」
「そうしてくれ、男前の評判が下がるからな」
二人は声を合わせて笑う。

そして笑い終わると、
ふたりはお互いを見た。

小さなトキメキが、また自分の胸を襲うのを知って、
ダフネはミルワード公爵から目をそらすと、
もう一度お辞儀をしてミルワード公爵から踵を返して、
家に戻りかけた。

「ダフネ！」
ミルワード公爵が思わず、ダフネを呼び止める。
ダフネは驚いて、ゆっくりとミルワード公爵を振り返った。

ミルワード公爵が何か言いたげに、
でも、言葉を見つけられないかのように、
もどかしげにダフネを見ている。

ダフネは見たことも無いミルワード公爵の表情をまた見つけて、

なんだかおかしくなって、小さく笑った。

「どうしたんですか？ミルワード公爵」

ダフネが言うと、ミルワード公爵は慌てて口を開く。

「良かったら今度、うちの猟犬を見に来ないか。
その…、子供たちに負けないくらい可愛い奴らなんだ」

意外な申し出に、ダフネは驚いたけれど、
にっこりとして頷いた。

「私も犬は大好きです。
ぜひ、今度わんちゃんたちに会わせて下さい」

ダフネが言うと、ミルワード公爵がほっとしたように頷く。

「ああ」

ダフネが家に入って行くのを見送ると、
ミルワード公爵は小さく首を振った。

「初心（うぶ）な十代の少年でもあるまいに。一体なんなんだ、
この垢抜けなさは」

運転手の待つ車に乗り込んで、
ミルワード公爵は小さくため息をついた。

「ダフネの前では、俺は施設の子供らと一緒だ。
少しでもダフネと一緒にいたくて、じたばたとしている」

小さく呟くと、ミルワード公爵は自分の言葉に苦笑したのだった。

理由の分からない混乱

ミルワード公爵の感じが変わったと、
ダフネはしみじみ思っていた。

市場でクリームを食べたあの日以来、一週間が経っていた。
仕事場で男装をするダフネに対しても、
ミルワード公爵の態度は見るからに変わっていて、
それは本当に戸惑うほどだった。

執務室では、以前は余計な事は一切話さなかったミルワード公爵が、
最近は、自らダフネのデスクの前に足を運ぶと、
仕事についてダフネの助言を求めてきたり、
貴重な鉱物や宝石などの産出が豊富な国、
ドーチェランと国交を新しく持つ計画などを、
とても雄弁に聞かせてくれる。

もし、ドーチェランとの国交が開かれれば、
産業、工業、商業全般において、
お互いに国同士、不足している部分を補い合う事が可能になり、
ますますの発展につながるだろうと、
ミルワード公爵は、将来の大きな展望を楽しげに話すのだった。

そして、毎日の昼休みは、
ダフネが作ってきたサンドイッチを、

二人で公園のベンチに座って食べるのだ。

隣に座り、時々は冗談を言って笑いあいながら、
ミルワード公爵とダフネが楽しげに、
手作りのサンドイッチを食べている姿は、
周りからはどう見えるのだろうか。

ダフネが男装をしていなかったら、
きっと恋人同士に見えただろう。
というより、ダフネが男装をしているからこそ、
もしかしたら、周りには、
仲良くベンチで並んでサンドイッチを食べている、
上司と秘書という図は、奇妙に映るかもしれなかった。
でも、ミルワード公爵はまるで気にもしないようで、
秘書の青い制服を着て男装をしているダフネ相手に、
市場で接していたプライベートな感じと変わらず、
談笑しているのだった。

今度の週末は、
ミルワード公爵に、屋敷に狩猟犬を見に来るように誘われていた。
あのミルワード公爵の大叔母のパーティ以来、
毎週のように、週末は一緒に過ごす事になってしまうけれど、
ダフネに断る理由は無かったし、
実際に、ミルワード公爵の育てたという犬を見てみたかったのは事実だった。

前に酔っぱらってしまって、

ミルワード公爵の屋敷に連れて行かれた事を思い出す。
そこで、恋人の振りをする代わりに男装を見逃すと言われたのだった。
あの言葉をあの時、冷酷に言ったミルワード公爵と、
今、この側に座りサンドイッチを頬張るミルワード公爵とは、
果たして同じ人物なのかと、ダフネは首を傾げるほどだった。

一週間のサンドイッチのお礼にと、
ミルワード公爵は、ダフネが屋敷に来る週末は、
屋敷のシェフにダフネのために、
ご馳走を作ってもらうように頼んだと言う。

ダフネは恐縮して辞退するのだけれど、
ミルワード公爵は聞く耳を持たなかった。

「外で食べる食事が、こんなに美味しいなんて知らなかった。
週末、天気が良ければ、シェフには庭の芝生の上に、
テーブルを用意しろと言ってある」
嬉しそうな声色で言うミルワード公爵に、
ダフネは苦笑した。
最近のミルワード公爵は、何だか子供っぽいとダフネは思う。
まるで、施設の子供たちのように、
楽しみを話している時には、表情がキラキラとしているのだ。

そんな事を思って、ダフネは心の中で呟く。

もしかして、私と過ごす時間がミルワード公爵にとって、

楽しみになっているのだろうか。
それは一体、どうしてなんだろう。

恋人の対象に見ていない女と、
どうして、プライベートな週末まで過ごしたいと、
こうして誘ってくれるのだろうか。

もしかしたら。

ダフネは絶対にそんな事はあり得ないと思うのだけれど、
心に浮き上がってくる疑問を否定は出来ないのだった。

もしかして、ミルワード公爵は、
私に好意を持ってくれているのではないか。

否定を繰り返しているけれど、
プライベートな週末を、こうして屋敷に誘われたりすると、
そんな気持ちが、次から次へとダフネの中に生まれてきてしまうのだ。

一週間の仕事が終わり、
ミルワード公爵に挨拶をして、
ダフネが執務室から出ようとすると、
ミルワード公爵がダフネを呼び止める。

「明日、昼前には迎えに行く」
デスクに座りながら、
ミルワード公爵が真っ直ぐにダフネを見て言った。
そのストレートな視線に、ダフネはドキリとしながらも、
気持ちを隠して、頷いて微笑んだ。
「お待ちしています」
ダフネは言うと、執務室から出て行った。

家路をたどるダフネの胸は高鳴っている。
これはやはり、恋なのだろうと、
ダフネは渋々ながらも、
さっきのミルワード公爵の真っ直ぐな視線を思い出して、
ときめく自分に、もう否定することは出来ないのだった。

ダフネが帰った後、
ミルワード公爵は、今度の週末には、
本当の自分の気持ちを、ダフネに打ち明けようかと思っていた。

そんな事を思っていると、
自分の執務室の扉をノックする音がして、
ミルワード公爵は顔を上げる。

「どうぞ」

声を扉にかけると、扉は開いた。

扉の向こうから、一人の女性が現れる。
女性にしては、すらりと高い背、
美しいプラチナブロンドは、頭の上で高く結われている。
青いドレスに身を包んでいるその姿は、
まるで舞台女優のように美しかった。

「リサ…」
自分の執務室を訪れた女性が誰だか分かると、
ミルワード公爵は、驚いて目を見開く。
「どうして、ここに…？」

ミルワード公爵の驚いている顔を見て、
リサは小さく笑った。

リサは、若かりし頃のミルワード公爵の恋人だった。
しかし、当時リサは、年下だったミルワード公爵を振って、
親子ほども年の離れた、財産家のハイード伯爵に嫁いだのだ。
伯爵が亡くなり、今は未亡人になったけれど、
リサがこうして突然、自分を訪れた理由が分からなかった。
ミルワード公爵は混乱していた。

パートナー

リサが微笑みを浮かべて、
ミルワード公爵の執務室の中に入ってくる。

陶器のように白い頬には、
薄らと紅をさしていた。
高く結い上げられたプラチナブロンドの髪は、
またダフネのものとは違う感じで、
色の薄いような光を、しっとりと放っている。
その色の薄いブルーの切れ長の瞳が、
ミルワード公爵を真っ直ぐに見ていた。

若かりし頃の感傷が蘇る、そのまなざしに、
ミルワード公爵は思わず目を伏せた。

もう昔の事だ。
ミルワード公爵は自分に言い聞かせる。

でも、純粋に人を愛したのは、
リサが最初だった。
１０年前。若ければ若かった分、
情熱的に思いを抱いていた。

「面会ならば、前もって予約を入れて欲しいものだ」

ミルワード公爵はデスクの椅子から立ち上がると、
こちらへ近づいてくるリサを見て言った。
「まだ俺の仕事は終わっていない」

ミルワード公爵とデスクを挟んで向き合うと、
リサは青いドレスの肩を小さくすくめた。

「私が来ることを、知らされていなかったのですか？
外務省の大臣からお話が来ているはずですが」

リサの言葉に、ミルワード公爵は首を小さく傾げる。
ついこの間、外務省の大臣とは会食をしたばかりだ。
その時に、リサの話など出ていただろうか。
思い当たる事を思い出せずにいるミルワード公爵に、
リサは口を開いた。

「近々、ドーチェランとの国交を持つ計画があるようですね」

リサの言葉に、ミルワード公爵は顔を上げる。

「どうして、それを」
ミルワード公爵が驚くと、リサは小さく笑った。

「私の亡くなった夫、ハイード公爵の従弟に、
奔放な人生を送った方がいらっしゃって、
様々な国々を放浪した挙句、

最後は旅の途中で、海難事故にあったそうなのです」

ミルワード公爵を見て、リサが面白そうな口調で続ける。

「その方は、事故の際、記憶を失くしてしまったそうなのですが、
海を漂流した後、無事にドーチェランの海岸にたどり着き、
助けてもらったその国の女性と一緒になって、
その後の生涯を、ドーチェランで暮しているというのです」

ミルワード公爵は驚いて、ただリサを見ているだけだった。

「その方の記憶が戻って、このマルターナに連絡をよこしたのが、
今から半年前。夫の従弟が行方不明になったのは、
もう２０年も前ですから、
今ではすっかりドーチェランの人間になったようですわ」

ミルワード公爵は、言うべき言葉が見つからなくて、
黙ってリサを見続けた。

「夫の従弟は、地元でも力のある、
家柄正しい地主の娘と一緒になったのです。
家業はペラーの生産をしているとか。
貝の作る黒い宝石。もちろん、ミルワード公爵はご存じでしょう？」

ペラー。
知るも何も、ミルワード公爵が一番、
ドーチェランから仕入れたいものだった。

あんなに珍しく美しいものは、

このあたりの他の国々の誰もが欲しがるだろう。
不思議な七色の光を放つ黒い小さな珠。
まだドーチェランでしか、産出されていないのだ。
他の国には見つかっていない。
その流通ルートを、元から握ることが出来れば、
相当の利益がマルターナに上がるだろう。

「ハイード公爵が亡くなった今、
ドーチェランのその従弟に、一番近い親類は私なのです。
マルターナの人間が、ドーチェランの有力者の一族にいる。
彼の血縁の私が、ドーチェランとの国交を開くために尽力をしている、
ミルワード公爵のお役に立つだろうから、
力を貸してくれとの、お達しがあったのですよ」

リサは言い終わると、しばらく黙ってミルワード公爵を見上げた。

ミルワード公爵は、何と言っていいか分からなくて、
もどかしくも、言葉を探している。

「フレージャー」

リサが優しく声色を変えて、
ミルワード公爵のファーストネームを呼ぶ。

ミルワード公爵の事を、この名前で呼ぶのは、
親戚を除いては、リサだけだった。

ミルワード公爵は黙っている。

「あなたの事を忘れたことは、
一時も無かったの」

リサの言葉を理解すると、ミルワード公爵は顔を上げた。
そして、苦く笑った。

「あなたが今日来たのは、
ドーチェランの話でだろう？
今更、プライベートな話をする理由は無い。
それに俺たちは別れてから、もう１０年も経っているんだ」

「この１０年、私はあなたを忘れなかった。
いつか、こうしてまた二人で会える日を願っていた」

リサの言葉に、ミルワード公爵は目を細めて、
冷たい視線をリサに向ける。

「会ってどうしようというんだ？
俺は、あなたの二番目の夫にはならない。
というより、もう俺の財産を目当てにしなくても、
充分、死んだ夫の遺産で潤っているとお見受けするが？」

「私は家のために、好きでもない男と結婚した。
それは、あなたも知っているでしょう？」

リサは小さく震える声で言うと、ミルワード公爵の手を取った。
振り払おうとするミルワード公爵の手を、
リサは両手でつかむと、力を込めて握って離さない。

ミルワード公爵も、今は頭では理解することは出来た。
家のために、親の決めた相手と一緒になるのは、
家系が古く由緒あればあるほど、
守るものの多い家柄であればあるほど、
良くあることなのだ。
そこに生まれた者は、
自分の意志など、持つことも許されないこともある。

でも、だからといって、
嫁いだ後も、今までの恋人同士の関係を続けようと言った、
あの時のリサは、ミルワード公爵には、
今なお、どうしても受け入れられなかった。

「俺には、愛している女がいる」

ミルワード公爵は思わず言ってしまっている自分に、
自分で驚きながらも、顔を上げると真っ直ぐにリサを見る。

「…そう」
リサがミルワード公爵の手を握る力が抜けた。

「でも、仕事の上での重要なパートナーになるということでは、
私はあなたに一番近いのよ。あなたの周りにいるどの女よりも」

リサは顔を上げると、ミルワード公爵を斜に見返して言った。

「ドーチェランとの国交開設の運びは、私がいるのといないのとでは、
雲泥の差があるわ。そこを良く理解して頂戴。
あなたの心がどこにあろうと、ドーチェランとの国交を開く間は、
私があなたに一番近いパートナーになるのだから」

言い捨てるようにして、リサはミルワード公爵に背を向けると、
執務室から出て行った。

ミルワード公爵は、
どさりと椅子に腰を落とす。

ドーチェランとの国交の開設まで、
リサと関わるしかないのか。

自分にもう気持ちは無いとはいえ、
リサの方には、これを機会に何かを進展させたいというのが、
見え見えだった。

旦那が死んだからだろう。

貞淑な妻を演じる必要がなくなったからだ。

自分の気持ちは、どうなのだろうと思う。
リサは今も美しく、魅力的なのは否めなかった。
愛情は無くても、欲望が無いと言ったら、
それは男として嘘になる。

それも最近は、一夜限りの情事もなかった。
女の肌に触れなくなって、久しいのだ。

つと、ダフネの顔が浮かぶ。

だけど、ミルワード公爵は首を左右に振った。
彼女は、そんな対象じゃない。

もっと純粋で、可憐で、
ただ一緒にいて、食事をしたり、笑い合ったり、
癒しを分けて貰うだけで十分な存在だ。

双子の兄のカルロスの、代わりの男装の秘書をやめてもいい、
ふざけた俺との契約の、理想の恋人役なんてものもやらなくてもいい。

ただ、これからもずっと、
一緒にいたかった。

一体、こういう気持ちを、なんて呼ぶのだろう。

素直に、ミルワード公爵は、
この気持ちを、ダフネに言ってみたかった。

簡単ではない問題

「ダフネ、ちょっと話がある」

居間に備え付けられているベッドの上から、
双子の兄のカルロスが、ダフネを呼び止める。
相変わらず、足を天井から吊っている形で寝ていたけれど、
大分、骨折の治癒経過は良いと聞いていた。

今日の休日も、
ミルワード公爵がもうすぐ迎えに来るので、
ダフネは身支度に忙しい。

「何？カルロス。私忙しいのよ？」

ここの所、週末は、
ミルワード公爵とプライベートに会うことが多くなって、
ダフネは市場で、おしゃれな服も買うようになっていた。
そのせいか、地味な紺のワンピースだけを着ていた時よりは、
オシャレにも興味が湧いてきていて、
身支度に時間がかかるようになっていたのだ。

髪をまとめながら、
弾んだ声で居間を覗くダフネに、
カルロスは厳しい声でもう一度言った。

「いいから、こっちに来るんだ」

決して自分に声を荒げた事も無いような、
穏やかなカルロスが、珍しく厳しい声色で自分を呼ぶのに、
ダフネは驚くと、居間におずおずと入って行く。

「今日もまた、ミルワード公爵と出かけるのか？」

ベッドの上、髪の色は黒とプラチナブロンドと違うけれど、
同じ青い瞳の色、二卵性だけれど双子ならではの、
似ている面立ちしたカルロスが、
じっとダフネを見る。

「…ええ。それが？」
ダフネが答えると、カルロスは続ける。

「それも恋人の振りなのか？
僕の身代りを見逃すための契約とやらの」

カルロスの言葉に、ダフネは黙った。
そして、口を開く。

「いいえ、多分違うと思うわ」
ダフネは答えた。

「じゃあ、一体どういうことなんだろうね」
カルロスが言う。

ダフネは眉をひそめて、首を傾げた。
「何を言いたいの？」

カルロスは冷静に続ける。

「僕の代わりをして男装の秘書をした最初の週末に、
バーへ飲みに行き酔いつぶれて、
ミルワード公爵に、女だと気付かれた。
そして、僕の身代りを見逃す代わりに、
恋人の役割を演じるようにと、条件を提示された次の週には、
ダフネ、君はミルワード公爵の大叔母のパーティに出た。
恋人役を演じて、そこまでは分かる」

カルロスが言葉を区切る。
ダフネはカルロスの言葉に、小さく頷いた。
その通りだからだ。

「しかし、その次の週は、
ダフネの勤める施設に寄付をすると、
ミルワード公爵が、突然言い出して、
お前を誘って施設に、一緒に出向いたというけど。
でも何も、ミルワード公爵のような高い身分の人間が、
慈善を施すなら、わざわざ自分から施設に行く必要はないし、
それ以上にダフネ、お前を連れて行く必要も無い。
そして、次の週はミルワード公爵の家に行ったな?
一体、その日はミルワード公爵の家に何をしに行ったんだ?」

カルロスの言葉に、ダフネは目を伏せながら言う。
「ミルワード公爵の、飼っている犬を見せてもらいに行ったわ」

カルロスが黙って、ダフネを見る。

「そして、その後も毎週毎週、
休みになれば、ミルワード公爵と出かけている。
そうして、もう二か月だ。
お蔭で僕の足の骨折は、大分治って来たのはいいけれど、
一体、ダフネ、ミルワード公爵とどうなっているんだ？
傍から見ているだけだと、本当の恋人同士のようだけれど、
でも、そうじゃないんだろう？
もし、本当に恋人同士ならば、僕には何も言うことは無いんだが」

カルロスの言葉に、ダフネは顔を俯ける。
口調から分かる。
カルロスは、本当に心配をしてくれているのだ。

「ミルワード公爵とは」
ダフネは小さい声で言いながらも、
顔を上げて、真っ直ぐにカルロスを見た。

「出会いは最悪だったけれど、
今は、とても良い友人になれると思っているの」

自分の心の中に湧いている、
恋慕の想いについて触れない。

ミルワード公爵に恋をしてはいるけれど、
叶わない事は、重々知っている。

カルロスに、余計な心配はかけたくない。

「友人というか、スポンサーと言ってもいいかも。
私の働く施設に、とても有望なスポンサーを見つけた。
それだけよ。ミルワード公爵は、本当に施設の子供たちには優しいし、
これからもきっと、ずっと施設に援助して下さると思うわ。
例え、私との関係がどうなろうとも、
援助は続けて下さるような、良い人よ」

ダフネが心から笑って言うと、
カルロスは、黙って頷いた。

「お前がそういうなら、そうなんだろう。
それで、今日はミルワード公爵と、
どこへ出かけるんだ？」

カルロスの言葉に、ダフネは気持ちを切り替えると、
笑顔になって答える。

「近々ある、ドーチェランとの国交開設の折りに、
着ていくスーツを買いたいので、一緒に選んで欲しいそうよ。
ミルワード公爵に頼まれたの」

カルロスは苦笑した。
「まるで、今までの俺たちの問答が無駄なような、
恋人同士のイベントだな」

ダフネも苦笑する。

「本当の恋人か、
もしくは、親しい気の置けない友人か」
言って、肩をすくめると、
カルロスは小さく首を左右に振って、
ダフネから目を反らした。

『気の置けない友人』を、
カルロスは態度で、真っ向から否定していた。

そこで初めて、
ダフネは、自分に疑問を抱いた。
どうして、ミルワード公爵は、
出会って以来、
毎週の休みに、私と会うのだろう。

スーツなど、
わざわざ休みをつぶしてまで、
自分に一緒に選んで貰うまでもないだろう。
第一、ミルワード公爵が、
スーツごときに、
そんなに労力を使いそうなタイプには思えない。
何か、他の意味があるのではないか。

確かに、カルロスの言うとおり、
最初の頃に比べたら、
最近のミルワード公爵の週末の誘いは強引なのは、
真実だ。

秘書の仕事でもない。
恋人の役をするでもない。
なら何故、私なのだろうか。

ダフネは、その理由が知りたかった。
その手段として。

もし、今週の誘いを自分が断ったら、
ミルワード公爵はどう思うだろうか。
そんな事を思う。

施設に寄付するとか、
犬に会うとか、
ダフネにとっても楽しみがあるなら別だけれど、
今回の休日は、単にミルワード公爵のスーツを、
選ぶためだけに、付き合うというのだ。

カルロスの言うとおり、
これらは本当は恋人同士がするような、
休日の過ごし方だと気が付くと、
ダフネはミルワード公爵に、意地悪をしたくなった。

自分は秘書の兄の身代りなわけだし、
恋人の振りをする役割の契約はしたけれど、
スーツを買うのには、恋人の振りは必要ない。

いっそ急用の無い休日くらい、自由にしてくれと、
ミルワード公爵に自己主張してみたらどうだろうかと、
ダフネは思った。

決して、本心では無かったのけれど。

「今日は、やっぱり家にいるわ」
ダフネが言って、
カルロスのベッドの側に座り込むと、
今までとは、また違う表情で、
カルロスはダフネを見た。

そんなに簡単な問題じゃないようだが…、
と、カルロスは思いながらも、
自分の傍らに座り込むダフネを見る。

そして、小さな借家の呼び鈴を押す、
ミルワード公爵の来訪を待った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9295v/

ダフネの願い

2011年12月28日02時48分発行